中傳達、是ゝハ岡部庄右衞門、奥津内記之代ゝ也。御日記。

寛文十二壬子年二月八日、屋鋪改川田六郎右衞門、渡邊久助、藤堂庄兵衞、石谷七之助右ハ骨折ゆゝ付、爲ニ御褒美一金貳枚、小袖貳ツ、羽織貳ツ、被ニ下レ之一、且又六郎右衞門久助義ハ永々相勤ゆゝ付、被成ニ御免一、爲ニ代大關勘右衞門、中川勘三郎被仰付ニ之一。御日記。

元祿九丙子年七月、本所深川屋敷改被仰付ニ於ニ本所一屋鋪被ニ下一。年錄。

寶永七庚寅年正月二十六日、新地奉行五人屋敷改相止候ゝ付御役御免。

酒井因幡守組　大井庄十郎
大岡土佐守組　金田惣八郎
酒井下總守組　井上隼人
大岡土佐守組　倉橋三右衞門
岡野備中守組　杉山安兵衞文露叢

正德三癸巳年五月廿八日、今度屋鋪改被仰付、江戸廻ハ、石河三左衞門、山岡傳五郎、堀八郎左衞門、井上隼人、本所深川ハ飯田四郎左衞門、諏訪源六郎可ニ相改一ゆゝ正德新令。

武家、寺社、町家ニ右面中ヘ〻、差圖を得て前の如く書付等可ニ被一差出一ゆゝ。或ハ新規之屋敷寺社町屋等ニおゐてハ、前々之法不案内之事ニ可ニ有之一ゆゝ。猶以て右之面々指圖を受ゆゝて、萬事無間違急度其旨を可相守事。嚴制錄。

——國字分類雜記卷之廿二

武家宅地商人ヘ貸與嚴罰

武家宅地商人ヘ貸與嚴罰事蹟

一季居其他禁令

一季居其他禁令事蹟

五月五日壬子○寛永二年乙丑（紀元二二八五年）○壬子、三綜正覽。武家ノ宅地ヲ商人ニ貸置キタル者改易セラレ、空曠ニ附シタル者收公セラル。○江城年錄。大猷院殿御實紀。日本財政經濟史料。

武家宅地商人ヘ貸與嚴罰

五月五日○寛永二年。

一、今度屋鋪御改、商人ニ借置申ゆゝ衆御改易。又知行所なとに罷在、屋敷明置ゆゝ、其屋鋪被ニ召上一。

——江城年錄

阿倍正之屋鋪改ヲ命セラレタルコト、既ニ之ヲ記ス。大猷院殿御實紀ニハ、「五日○寛永二年五月。武家の宅地商人に借置のものは改易せられ、采地にも宅地を空曠になし置時は、收公せらるへしと令せらる。」ト見ユ。日本財政經濟史料第四卷載スル所同ジ。

八日廿七日癸卯○寛永二年乙丑（紀元二二八五年）。癸卯、三正綜覽。令シテ武家一季居ヲ嚴禁シ、又年季ヲ十年ニ限リ、是ヲ過グルモノヲ罰シ、人身賣買ヲ禁シ、處士借屋ノ制ヲ定メ、辻立門立ヲ禁ズ。○東武實錄。大猷院殿御實紀。日本財政經濟史料。

一季居其他

同○寛永年八月。二十七日、仰出サル、御制法

定

一、喧嘩口論之時、至ニ其場一圓不可ニ出向一之事。

一季居

一、公儀違背之族有之る被行死罪之刻被仰付輩之外雖爲一人至彼所不可懸合之事。

一、侍屋敷火事之節、其家中之者幷親類縁者之外、至其所不可懸集事。

附、町中火事有之時、奉公人一切不可出合事。

一、武士之面々侍之儀も不及申、中間小者に至迄、一季居一切抱置ゐからさる事。附、一季居之請人ゟ不可立、堪忍次第とは不苦事。

年季十年人賣買

一、年季之事、十ヶ年を限るし。十年過ハ可爲曲事。

一、人賣買一圓停止たる。若濫之輩於有之ハ其輕重をもろち、或ハ死罪或ハ籠舍可爲過料事。附、口入宿主同罪事。

處士借屋制

一、手負ふるものを不可隱置之事。

一、主なし宿借り之事、請人之手形町奉行所へ差上裏判を以宿を借ゐきゑ事。

一、辻立門立をべからす幷顔をゐかくゑつみかくゑ輩あらば可爲曲事。

右可守此旨者也。仍執達如件。

寛永二年丑八月廿七日

——東武實錄

年期奉公人身賣買

廿七日〇寛永二年八月〇中略。けふ令せらるるは、闘爭ある地に一切出向ふべからず。令條にたがひ死刑に處せらるゝ時、有司のほか一人たりとも、其の地に闌入すべからず。武家失火の時、家人ならびに親戚のほか、其地に馳參るべからず。市井の火に奴僕一切馳向ふべからず。侍はいふまでもなし。中間小者たりとも、一年期に召抱ゆべからず。一年期の保人となるべからず。年期は十年を限るべし。此期を過ば曲事たるべし。人賣買すべて是を停止す。もしそむく徒あらば、その科の輕重に隨ひ、あるは死刑、あるは繫獄、あるは過料たるべし。口入宿主同罪たるべし。刃傷のものかくしをくべからず。處士に借屋せしめば、保人の券を町奉行の廳に呈し、裏判とりて借與ふべし。辻立門立すべからず。深く覆面するものあらば曲事たるべしとなり。

——大猷院殿御實紀

一季雇入並抱置年季禁止

寛永二年乙丑八月廿七日

一、武士之面々侍之儀は勿論、中間小者に至る迄、一季居一切抱置べからざる事。付、一季居之請人に立べからず。但し堪忍次第と（本のまま）はくるしからざる事。

一、男女抱置年紀之事、拾箇年を可限、拾年すぎば曲事たるべき事。原九條

右此旨を可相守者也。仍執達如件。

寛永二年八月廿七日　奉行　（御觸書古二。政柄秘記一。寛永日記增補一。）

人賣買停止

寛永二年乙丑八月廿七日

一、人賣買一圓停止たり。若猥の輩あらば其輕重をわかち、或は死罪籠舍、或は過錢たるべき事。

附、口入人宿主同罪之事。

一、手負たる者を隱置べからざる事。

一、主なし宿かりの事、請人の手形を町奉行へ差上、判を取り宿をかすべき事。原九條

右此旨を相守るべき者也。仍執達如件。

寛永二年八月廿七日　奉行　（御觸書古二、政柄秘記二。）

爾來寛永三年、四年、十、十九年ニ同一ノ令文發セラレタリ。

——日本財政經濟史料第四卷

〔附記〕關所通行者査檢令

寛永二年乙丑八月廿七日

定

一、往還之輩番所之前にて、かさ、づきんをぬがせ相通すべき事。

一、乘物にて通い者、乘物の戸をひらかせ相通すべし、女乘物は又女に見せ通すべき事。

一、公家、御門跡其外大名衆往還の刻、前かどより其のさたこれあるべくゆ間、改るに及ぶべからず。

但、不審の事あらば格別たるべき事。

右此旨を相守るべき者也。仍執達如件。

寛永二年八月二十七日　　奉行　御編書古二、政柄秘記二

——日本財政經濟史料第四卷

又各所の關尹（クワンヤク）に令せらるゝは、往來の輩番所前にて笠頭巾を脱せしむべし。乘輿のものは戸をひらかしめ通すべし。女乘物は婦女をして改めしむべし。公家門跡其他大名往來の時は、あらかじめ其沙汰あるべければ、査檢に及ぶべからず。されど不審の事あらば、此限にあらずとなり。

——大猷院殿御實紀

〔附記〕關所通行者査檢

番所査乘物開扉

公家其他無檢者通過

關所之制

傳馬駄賃駕量規定

傳馬駄賃駕量規定事蹟

同日○寛永二年乙丑（紀元二二八五年）八月廿七日癸卯。○癸卯、三正綜覽。傳馬並駄馬ノ駕量及ヒ駄賃ニ付令ス。○東武實錄。大猷院殿御實紀。御當家令條。德川禁令考。日本財政經濟史料。

傳馬駄馬駕量駄賃規定

定

一、御傳馬并駄賃之荷物壹駄ニ付る四十貫目之事。

一、從江戸品川迄上下之荷物壹駄ニ付る錢三拾四文、板橋へ三拾九文、歸馬之駄賃右同前之事。

附、人足賃は馬之半分さるべき事

一、御定之外增錢とるもの有之は、五十日可爲籠舍、并其町之年寄過料として五貫文其外家一軒よりも百文づゝ可出之事

一、夜通し立人馬之儀、奉行所が手形於無之ども一切不可相立之事。

附、御傳馬駄賃之荷物馬持次第ニ可出之事

一、駄賃馬多く入い時は其町より在々所々にやとい荷物遲々無之樣雨風の時も可出之事。

右可相守此旨者也、仍執達如件。

寛永二年丑八月廿七日

——東武實錄

又諸驛に令せらるゝは、驛馬ならびに駄馬の荷物、一駄四十貫目たるべし。府より品川驛迄上下の荷物、一駄に錢三十四文。板橋へ三十九文、歸馬も是に同じ。人夫賃は馬の半たるべし。定外に增錢とるものあ

らば、五十日獄につながるべし。其他の年寄は過料五貫文、其他家毎に百文づゝ出さしむべし。通夜往來する人馬は、奉行より咎なからんには、一切出すべからず。幷驛馬の荷物は、馬をもてるものゝ心に任すべし。駄馬多く用ゆるときは、其驛より所々の馬をやとひ、風雨たりとも荷物遲遲せざらんやう出すべしとなり。

——大猷院殿御實紀

寛永二丑年八月

定

一、御傳馬幷駄賃之荷物壹駄に付四拾貫目之事。

一、江戸より品川迄上下之駄賃荷物一駄ニ付錢三拾四文、板橋ニ三拾九文、歸馬之駄賃右同斷。

附、人足賃ハ馬之半分たるへき事。

一、御定之外增錢取者有之ハ、五十日籠舍たるべし。幷其時之年寄過料として五貫文、其外家一軒より百文つゝ可出事。

一、夜通し立ゐ人馬之儀、奉行所より手形無之に於てハ一切不可相立事。

附、御傳馬之駄賃荷物ハ馬持次第たるへき事。

一、駄賃馬多入候時は、其町より在々所々ハやとひ、荷物遲々無之樣ニ風雨之時も可出事。

右可相守此旨者也、仍執達如件。

寛永二年八月廿七日　御當家令條

——徳川禁令考卷五十二

寛永二年乙丑八月廿七日

定

一、江戸より品川迄の荷物、壹駄に付て三拾四文、板橋へ三拾九文、歸馬之駄賃同前事。

附、人足賃は馬の半分たるべき事。

一、お定の外まし錢取者これあらば、五拾日の籠舍たるべし。幷に其町之年寄過料として五貫文、其外は家壹間より百づゝこれをいだすべき事。

一、人馬賃にてやとひ通ゐもの、奉行所より手形これなきにおいては、夜通しあひ立る儀停止之事。

附、御傳馬駄賃之荷物、宿中馬持次第これをいだすべき事。

一、駄賃馬おゝくいりゐ時、其町より在々所々へやとひ、荷物遲々これなきやうに雨風の時もこれをいだすべき事。原五條

右條々此旨あひまもるべき者也。仍執達如件。

寛永二年八月二十七日　御編書古二、政柄總記一、寛永日記增補一

——日本財政經濟史料第四卷

金錢比價幷撰錢布令

金錢比價幷撰錢布令事蹟

同日○寛永二年乙丑八月廿七日癸卯。復、金錢比價並ニ撰錢ニ付キテ令ス。○大猷院殿御實紀。德川禁令考。敎令類纂。條令。碧海探珠。東武實錄。大日本貨幣史。

同參考。

金錢比價幷撰錢布令

廿七日○寛永二年八月。また令せらるゝは、錢の賣買、金壹兩に四貫文と定められしうへは、いふ迄もなく金壹歩には壹貫文たるべし。此旨をそむき、價を低昂してうりひさぐものあらば、定制の如く、違犯の者より賣買

せし金錢一倍を出さしむべし。大猷、新錢、ころ錢、形なし、われ錢、鉛錢、此六錢の外はゑらびすつべからず。もしゑらびすつるか、あるは六錢の中を強て用ゆるものあらば、其者の面に烙印すべし。もしそむくものあらば、鄕村は代官里正等、市井は年寄過料として錢五貫文、其他一戸より百文づゝ出さしむべし。見出せしものへは贖錢殘らず給ふべしとなり。

——大猷院殿御實紀卷五

寛永二丑年八月廿七日

錢賣買之定幷六錢之外不可撰事

定

一、錢之賣買、金子壹兩ニ四貫文之御定之上者、勿論金壹分に壹貫文たるべき事。

此旨を相背高下之賣買仕におゐてハ、御定之通違背之方より其賣買錢金壹倍可取之事。

一、大かけ　一、われ錢

一、かたなし　一、ころ錢

一、新錢　一、なまり錢

此六錢之外撰むべからず、若ゑらむ者、又六錢を押てつかふものあらハ、其面に火印をおすべき事。

右可相守此旨、自然猥之輩有之ゝ、在々所々におゐては庄屋、或ゝ至町中ゝ年寄、爲過料五貫文、其外ハ家壹軒より百文宛可取之、若又代官給所人等、此法度之趣其品々念を入不申聞ニ付ゐハ、過料代官（一本「代官給人」）「代官人。」給人より可出之、見出しゆものにハ爲褒美彼過料不殘可被下者也。

寛永二年八月廿七日

奉行

定

一、錢之賣買、金子壹兩ニ四貫文、御定之上ゝ、勿論壹分ニ壹貫文たるべき事

此旨相背、高下之賣買仕ゐおゐてハ、御定之通違背の方より其賣買錢金一倍可出之事。

一、火かけ　一、新錢

一、ころ錢　一、かたなし

一、ゐれ錢　一、なまり錢

此六錢之外、撰ゐからず、若撰もの又六錢を押てはりふものあらば、其面に火印をおすべき事。

右可相守此旨、若濫之輩於有之ゝ、其在々所々代官庄屋、至町中ゝ年寄爲過料五貫文、其外家一軒ゟ百文宛可出之、見出しゆものは右之過料不殘可被下之者也。仍如件。

——徳川禁令考卷五十五。政令類纂、條令、摂海採球、同。

寛永二年丑八月廿七日

——東武實錄

寛永二年乙丑復タ六錢ノ外ノ錢ヲ選フヲ禁ジ、錢ノ賣買ヲ金壹兩ニ四貫文トスルコトヲ令ス。

是歲、八月二十七日、令シテイハク、六錢ノ外ハ之レヲ選ヒ棄ツヘカラス。若シ之レヲ選ヒ棄テ、或ハ強テ六錢ヲ用ルモノアラハ、烙印ヲ以テ其面ニ印スヘシ。且ツ又其里長ヨリ錢五貫文及ヒ同里毎戸ヨリ百文ヲ罰トシテ出サシムヘシ。而シテ其贖錢ハ告者ニ與ヘン。又イハク錢ヲ賣買スルコトヲ金壹兩ニ四貫文ト定メタレハ、卽チ一分ニハ一貫文タルヘシ。若シ私ニ錢價ヲ低昂スルモノアラハ、既ニ賣買セシ錢價ノ一倍ヲ其罰トシテ出サシムベシ。徳川實紀

謹按、六錢ハ、前文ニ記スル大カケコロ等ニテ、同錢ノコトナレハ之レヲ略ス。又明年錢ノ賣買ニツキ令アレトモ、是亦同文ナレバ之レヲ略ス。

——大日本貨幣史

寛永二年○丑。錢價ノコトヲ令ス。

是歳錢ノ賣買ハ金一兩ニ四貫文トスベキコトヲ令ス。○德川實紀

謹按、寛永ノ頃、大坂ニテハ大抵金一兩ニ銀六十二匁前後ナリトイフ。

——大日本貨幣史參考金銀價部

人市帶刀其他規定

十月十八日癸巳○寛永二年乙丑〔紀元二二八五年〕○癸巳、三正綜覽。令シテ、市人大脇差ヲ帶ルコトヲ禁ジ、又質屋典物取扱方ヲ規定シ、借家請人ノ制ヲ嚴達ス。○大猷院殿御實紀。

市人帶刀其他規定事蹟

市人帶刀、質屋典物取扱規定、借家請人規定

十月十八日○寛永二年○中略。

町人帶刀

けふ市井に令せらるゝは、市人大脇差帶る事は前々より停禁たれば、彌かたく守るべし。さきには盜賊にまぎれしにより、もしさる市人を捕ふるに於ては、賊刑に處せらるべし。すべて倡里にまかり殺害せられば、是非を論ぜず死損たるべし。典舗にて諸器財を質にとらんとき、本主の住宅姓名を糺すべし。かくしていはざるものは、とゞめをき廳へうたへ出べし。詳明に申さば人をそへ、住宅を見定めし上にてとり置べし。逋債にせまり亡命し、程へてなげくときは、其家を返したるよしなれど、今より後はかへし與ふべからず。請人なくして借屋せしめば、前々の如く其家收公せらるべし。家の主幼少なるか、あるは婦女のみ居住せる所には、一夜たりとも宿すべからず。生業をもなさず妻子もなきものには、たとへ請人ありとも借屋せしむべからずとなり。令條記。

質舗

借家

——大院殿御實紀卷五

〔附記〕上洛ニ付雇人扱方

〔附記〕來年上洛ニ付雇人扱方

來年○寛永三年。御上洛ニ依テ是月○寛永二年十二月。仰出サル、趣

覺

一、來年御上洛ニゆ之間前廉○寛永日記增補「前廉」より抱置ゆ奉公人暇を出し申間敷事。

一、請人ハ此前之ものを直ゝたてさせ自然欠落等いさしゆハ、勿論右之趣可爲曲事、但給分も此前のごとくたるゐき事。

寛永二年丑十二月　日

——東武實錄

寛永日記增補一ニハ、更ニ「一、未進方に置之ゆものは格別之間、約束のごとくたるべき事」ノ一條ヲ加フ。日本財政經濟史料第四卷。

金錢比價並撰錢布令

寛永三年丙寅○紀元二八六年閏四月十一日癸丑○癸丑、三正綜覽。復、金錢比價幷ニ撰錢ニ付令ス。○大猷院殿御實紀。

金錢比價並撰錢布令事蹟

金錢比價並撰錢布令

十一日○寛永三年閏五月。この日錢賣買の事を令せらるゝこと、前年八月廿七日の令に同じ。

人身賣買其他布令

是月○寛永三年丙寅（紀元二六六年）閏四月。復人身賣買ヲ禁ジ、犯ス者死罪以下ニ處スベキコト、口入人、宿主同罪タルベキコト、男女雇入年季ヲ十ケ年ニ限ルコトヲ令シ、雇人馬ヲ以テ通夜往來スルモノハ奉行所ノ添狀ヲ要スル事トシ、更ニ駄賃平地一里十六文ニ定メ、右規定外ノ增錢ヲ貪ル者ハ五十日ノ籠舍、其所ノ者年寄其他ノ過料ヲ定ム。○東武實錄、日本財政經濟史料

——大猷院殿御實紀卷六。東武實錄、同。

人身賣買其他布令事蹟

大猷院殿御實紀。

人身賣買其他

定

一、人賣買一圓停止ス。若濫ニ之輩ヲ有之ハ其輕重ヲ以ち或ハ死罪或ハ籠舍可ニ爲過錢事。

附、口入人宿主同罪事。

一、男女抱置年季之事可ニ限十ケ年ニ十年過は可ニ爲曲事。

一、手負ハるもの茂隱置へからさる事。

一、人馬賃ニて雇通ひ者、奉行所ゟ添狀無ニ之ハ夜通相立ル儀一切停止之事。

一、駄賃之事平地一里十六文之御定の上はし錢取もの有ニ之ハ五十日可ニ爲籠舍、幷其所之年寄過料として五貫文、其外ハ家一軒より百文宛可ニ出ニ之事。

右可ニ相ニ守此旨者也。仍執達如ニ件。

——東武實錄

寛永三年寅閏四月　日

寛永三年丙寅閏四月　日

街道宿々に御觸

定

一、男女抱置年季之事、可ニ限ニ拾ケ年ニ、拾ケ年過ば可ニ爲曲事事。原五條。

右可ニ相ニ守此旨者也。仍執達如ニ件。政柄秘記一、寛永日記增補二

寛永三年丙寅閏四月　日

街道宿々に御觸

定

一、人馬賃にて雇通ひはゞ、奉行所より添狀ゟ無ニ之ハ、夜通相立ル儀一切停止之事。

一、駄賃事、平地壹里拾六文之御定之上ハ、增錢取者有ニ之ハ、五十日可ニ爲籠舍、幷其所之年寄爲ニ過料ニ五貫文、其外ハ家壹軒より百文宛可ニ出ニ之事。原五條。

右可ニ相ニ守此旨也。仍執達如ニ件。政柄秘記一、寛永日記增補二

——日本財政經濟史料

駄賃錢

この月○寛永三年閏四月。○中略。又令せらるゝは、駄賃錢平地一里十六文の定の外、增錢貪るもの五十日繫獄せられ、其地の年寄等は過料五貫文。その他毎戸に百文づゝ出さしむべしとなり。その他は去年八月廿七日の令に同

——日本財政經濟史料

じ。

〔附記一〕上洛供奉者宿賃

〔附記一〕 上洛供奉者宿賃

寛永三年丙寅五月廿七日

御上洛御供之路次中、宿賃御定之事

一、人に四文　　一、馬に八文

但自分之薪たきゐハゞ、人に貳文馬に四文、馬屋もなし自分之薪ならば貳文、馬屋なくとも亭主の薪ならば四文たるべし。

京宿賃

一、京にては馬屋なく外につなぎ、自分之薪たきゐても四文たるべし。寛永日記増補二

——日本財政經濟史料第四卷

〔附記二〕上洛供奉者扶持方下賜

〔附記二〕 上洛供奉者へ御扶持方下賜

今度　御上洛ニ付テ供奉ノ面々其分限ニ依テ御扶持方下サルヽノ覺

覺

一、百石	七人	一、百五十石	十人
一、二百石	十人	一、二百五十石	十一人
一、三百石	十二人	一、三百五十石	十三人
一、四百石	十四人	一、四百五十石	十五人
一、五百石	十六人	一、五百五十石	十七人
一、六百石	十八人	一、六百五十石	十九人
一、七百石	二十人	一、七百五十石	二十一人
一、八百石	二十二人	一、八百五十石	二十三人
一、九百石	二十三人	一、九百五十石	二十四人
一、千石	二十四人	一、千百石	二十五人
一、千二百石	二十六人	一、千三百石	二十七人
一、千四百石	二十八人	一、千五百石	二十九人
一、千六百石	三十人	一、千七百石	三十一人
一、千八百石	三十二人	一、千九百石	三十三人
一、二千石	三十四人	一、二千百石	三十五人
一、二千二百石	三十六人	一、二千三百石	三十七人
一、二千四百石	三十八人	一、二千五百石	三十九人
一、二千六百石	四十人	一、二千七百石	四十一人
一、二千八百石	四十二人	一、二千九百石	四十三人
一、三千石	四十五人	一、三千五百石	五十二人
一、四千石	六十人	一、四千五百石	六十七人
一、五千石	七十五人	一、壹萬石	百五十人

一、二萬石　　三百人　　一、三萬石　　四百五十人

右之通御扶持方被下之者也。

寛永三年寅五月　日　　——東武實錄

芝新網町漁師白魚獻上

九月三日壬申○寛永三年丙寅（紀元二二八六年）○壬申、三正綜覽。芝浦新網町漁師將軍家ニ白魚ヲ獻上ス。○文政町方書上。

芝新網町漁師白魚獻上事蹟

芝新網町漁師白魚獻上

芝新網町

一、當町起立之義、往古ゟ一圓芝浦と唱い海邊ニゐ、御入國之頃、漁夫共多有之、日比相建、漁獵仕罷在い。東照宮○德川家康。御在世之砌、芝浦ハ被爲成い御儀有之、其後台德院樣○德川秀忠。御代、寛永三寅年九月三日町御奉行嶋田彈正忠樣ゟ御城御臺所ハ白魚奉差上い樣被仰付ニ付、則差上申い處、爲御褒美金子頂戴仕、夫ゟ引續年々御臺所ハ白魚差上、金子頂戴仕來い。

——文政町方書上

絹布丈幅定制

十二月○寛永三年丙寅（紀元二二八六年）。七日丙午○丙午、三正綜覽。絹・布ノ丈幅ヲ定ム。○東武實錄。御當家令條。大猷院殿御實紀。古事類苑。倭名類聚抄。倭訓栞。數學類聚。書言字考節用集。律原發揮。寛永板塵却記。

絹布丈幅定制事蹟

絹・布丈幅定制　本令前年ニ出ヅト爲スモノ、大猷院殿御實紀ニ云フ紀年錄然リ、又武江年表「寛永二年乙丑、○八月絹紬一端、大工のかねにて三丈二尺、幅一尺四寸、木綿一端同三丈四尺、幅一尺三寸と定らる。」ト云ヘルモノ然リ、サレド玆ニハ大猷院殿御實紀ノ據ト爲シタル東武實錄、條令、令條記ニ依リ、本年ニ收ム。

絹紬

布木綿

同○寛永三年十二月。七日仰出サルヽノ處

定

一、絹紬之事

壹端ゟ付ゐ、長、大工かねニゐ三丈二尺、ゟゞ壹尺四寸。

一、布木綿之事

壹端ニ付ゐ、長大工かねニゐ三丈四尺、ゟゞ壹尺三寸。

右織物之寸尺、如此御定之上、長、ゟゞ不足之絹紬布木綿賣いよおゐてハ、本年四月朔日より見合いもの可ゝ取ゝ之者也。

——東武實錄○寛永日記增補、憲教類典十二、改柄秘記增補、日本財政經濟史料、同。

寛永三年寅十二月七日

定

一、絹紬之事、壹端ニ付、長大工金にて三丈二尺、幅壹尺四寸。

一、布木綿之事、壹端ニ付、長大工がねにて、三丈四尺、幅壹尺三寸。

右織物之寸尺、如此御定之上ハ、長幅不足之絹布賣いに於ては、來年四月朔日より、見合いもの可ゝ取ゝ之者也。

——御當家令條○公儀御法度。德川禁令考。同。

寛永三年寅十二月七日

七日○寛永三年十二月。此日令せらるゝは、絹紬一反工尺にて長三丈二尺、幅一尺四寸、布木綿一反長三丈四尺、幅一尺三寸たるべし。かく定められしうへ、丈幅不足なるをうりひさぐものあらば、來年四月朔日よりめし

とらへらるべしとなり。（紀年錄には、此令前年に出たり。今は東武實錄、條令、令條記等によりて今年に係る。）

絹紬反物

寛永三丙寅年十二月十七日、絹紬一反ニ付、長大工のねにて三丈二尺、幅一尺四寸、布木綿一反ニ付、長大工のねにて三丈四尺、幅一尺三寸。御制法　——大猷院殿御實紀卷八

絹紬一反之長、寛永八辛未年四月より三丈四尺と改る。

寛文五乙巳年秋、結木綿布之丈、二丈六尺ニ定免らる。玉露叢

度ハ物ノ長短ヲ量ルノ謂ニテ、其器ヲ名ヅケテ尺ト云フ。後世之ヲ物指トモ云フ。指ハ即チ長短ヲ量ルノ謂ナリ。蓋シ太古ニ在リテハ、其器未ダ出デズ。故ニ兩臂ヲ伸張スルヲ尋ト云ヒ、四指ヲ以テ握ルヲ握ト云ヒテ之ヲ量リシナリ。其後度器ヲ造ルニ至リ、物ノ長短大小、始テ其正ヲ得タリ。然レドモ其制詳ナラズ。文武天皇ノ大寶制令ニ至リ、尺ニ大尺小尺アリテ、小尺ノ一尺二寸ヲ以テ、大尺ノ一尺トス。而シテ大尺ハ地ヲ量ルニノミ用ヰ、其餘ハ皆小尺ヲ用ヰシム。又銅造ノ樣式ヲ大藏省及ビ諸國司ニ給シ、官私用ヰル所ノ度器ヲシテ、每年省國ニ就キテ題印ヲ受ケシメ、然シテ後始テ用ヰルコトヲ聽ス。而ルニ元明天皇ノ和銅六年、此制ヲ改定シ、其大小尺ハ、各從前ノ大小尺ノ一尺二寸ヲ以テ一尺トシタリ。而シテ延喜式ノ制ニ、小尺ハ晷景ヲ測ルニノミ用ヰ、其餘ハ皆大尺ヲ用ヰルハ、恐ラクハ和銅ノ改定ニ出ヅルナラン。曲尺ノ稱ハ、既ニ源順ノ倭名類聚抄ニ見エタリ。造ルニ鐵ヲ以テシタレバ、金尺ト云ヒ、屈折シテ矩ノ形ヲ成シ、專ラ工匠ノ用ニ供スルヲ以テ、又大工尺トモ云ヘリ。又同抄ニ竹量アリ、竹ヲ以テ製スルニ由リ、此名アリ。後ニハ鷹計トモ書ケリ。德川幕府ニ至リテハ、竹量ノ名ハ既ニ亡ビテ、其曲尺ノ外ニ、吳服尺、鯨尺アリ。吳服尺ハ、曲尺ノ一尺二寸ニシテ、鯨尺ハ曲尺ノ一尺二寸五分ナリ。而シテ吳服尺ハ專ラ裁衣ノ用ニ供スルニ由リ吳服ヲ以テ名トシ、鯨尺ハ其初メ鯨骨ヲ以テ製セシニ由リ此稱ヲ得タルナリ。然レドモ後ニハ一尺二寸五分ノモノヲ以テ、裁衣ノ用ニ供シ、吳服尺ヲ用ヰルコトハ幾ド希ナリ。故ニ鯨尺ヲ呼テ、吳服尺ト云フ。或ハ云フ、鯨尺ハ即チ吳服尺ニシテ、後ニ分レテ二種ト爲リシナリト。右三種ノ外ニ、量地尺、裏尺、文尺等ノ數種アリ。要スルニ德川幕府ニテハ、量衡二器ノ爲ニハ、座ヲ置キテ之ヲ檢束シタレドモ、度ノ爲ニハ、別ニ其制ヲ設クルコトナカリキ。

此他寺院等ニ藏スル所ノ古尺アリ、其長短大小一ナラズ。

曲尺　辨色立成云、曲尺藏可利加纏　——古事類苑稱量部一

まがりかね　倭名抄に曲尺をよめり。矩なり。今さしがねと云。　——倭名類聚抄十五工匠

まがり　曲尺をもいへり。かねを略したるなり。　——倭訓栞中編二十四

曲尺（カネ）　圖略ス　曲尺一尺ハ、クジラ尺にては、八寸に當る也。古への吳服尺にては、八寸三分三厘三毫三糸不盡に當る。　——倭訓栞中編二十四

今番匠が家を造るに用るは此尺也。形ちは一別にこしらへて持つ也。横に曲げたる所有り、此曲る所は四角の矩に合せて拵らへたるもの也。　——數學類聚十

吳服尺（ゴフクザシ）　今按相當曲尺一尺二寸。

吳服尺者、以曲尺一尺二寸（鯨尺ノ一尺二寸二分弱）爲一尺量裁衣服用此尺故之名。　——書言字考節用集七財

きぬもんめんうりかいの事　——律原發揮

きぬもんめんの丈尺寸といふは、大くのかねに一尺二寸を、ごふく一尺といふ也。

——寛永雍劫記一板

一年季其他布令

寛永四年丁卯〇紀元二二八七年。正月十八日丙戌〇丙戌、三正綜覽。一年期ノ奴婢ヲ禁ジ、抱主、本人、請人、訴人ニツキ規定シ年期十ケ年限、人身賣買禁止、手負隱匿、浪人借屋ノ制、辻立門立禁止ニツキ令ス。〇東部實錄。寛永日記增補。政柄秘記。日本財政經濟史料。

一年季其他布令事蹟

一年期禁止其他布令

是日〇寛政四丁卯年正月十八日。仰出サル、趣

定

一、喧嘩口論之時、至其場二一切不レ可二出向一之事。

一、公儀違背之族自然有レ之ゑ、被レ行二死罪一之刻、被仰付輩之外、雖レ爲二一人一至二彼所一不レ可二懸合一之事。

一、侍屋敷火事之節、其家中之者幷親類縁者之外、至二其所一不レ可二懸集一之事。

附、町中火事有レ之時、奉公人上下ともに不レ可二出合一之事。

一、武士之面々侍之儀も勿論、至二中間小者迄一一季居一圓不レ可二相抱一。

但、有二堪忍次第一も〇寛永日記增補「む」ヲ「迄」ニ作ル。不レ苦之事。

一、一季居之者於二抱置一ニ之主人隨二其分限一可レ出二過錢一之事。

一、一季居之者、或も籠舍、或も普代ニ可二申付一之事。

奴婢之制

一、一季居之請人、或も籠舍、或も可レ爲二過錢一之事。

此御定之旨相背輩有レ之ゑ、訴人ゑ可二龍出一ゆ、急度御褒美可レ被下之事。

一、年季之事十ケ年ゑ限るゑし、十年過ば可レ爲二曲事一。

一、人賣買一圓停止たり、若違犯之輩あらは、其輕重をもつて、或は死罪、或も籠舍可レ爲二過錢一事。

附、宿主、口入人同罪事。

一、手負ゑる者を、隱れくゑからさる事。

一、主なしに宿を借す事、請人之手形を取、町奉行所へ差上裏判を取可レ借之事。

一、辻立門立をゑからす、幷顏をゑかくほゝみかくを輩ゑあらは可レ爲二曲事一。

右可レ相二守此旨一者也。仍執達如件。

寛永四年卯正月十八日

十八日〇寛永四年正月〇中略。けふ令せらるゝは、一年期の奴婢召かゝへ置ときは、主人は其分限に應じ過錢出さしめ、其奴婢ハ獄につなぐか、あるは譜代たらしむべし。保人も繫獄あるは過錢たるべし。此旨をそむく者あらば、うつたへ出べし。褒賞せらるべしとなり。其他は寛永二年八月廿七日の令に同じ。——東武實錄。日本財政經濟史料、同。

——東武實錄〇寛永日記增補、政柄秘記。日本財政經濟史料、同。

東埔寨國ト通商

八月〇寛永四年丁卯（紀元二二八七年）。東埔寨國ヨリノ書信ニ對シ、長崎代官長谷川權六藤正ヲシテ親交通商ノ返信セシム。〇大猷院殿御實紀。

——大猷院殿御實紀卷九

東埔寨國ト通商事蹟

東埔寨國ト通商

是月○寛永四年八月○中略。また東埔寨國の理諸般務事より、長崎代官長谷川權六藤正がもとへ書簡を送る。その趣は、貴邦と東埔寨と古より兄弟の國として、舟帆往來絶る事なく先代に至れり。今暹羅國と兵刄を交へ、攻戰の用意しきりなりといへども、貴邦の主一視同仁の愛、豈東埔寨を度外に置れんや。宜く普日の光へだてなく、王道の公私なからん事を希ふよしなり。よて藤正をしてこたへしめられしは、先年吾邦の下吏武富長右衛門その國に行しとき、便宜に附て送られし書簡聘物ありしが、謝せんとすれどもいまだ其便を得ざりき。今大和屋善左衛門、分部又四郎等をして、通商をおさめしむれば、信義をして永く明らけく、兩國相睦からん事を思ふとて、別に裝金屏風四張。大圓鏡一、錫鉢五。描繪盆一を送らしめらる。

——大猷院殿御實紀卷十

〔附記〕關東筋大水

〔附記〕關東筋大水。

是月○寛永四年八月○中略。又此頃東海道より關東筋大水。

——大猷院殿御實紀卷十

阿蘭陀國主ノ信書却否事蹟

九月十七日庚辰○寛永四年丁卯（紀元二二八七年）○庚辰、三正綜覽。阿蘭陀國主ノ親翰措辭無禮ナルヲ以テ之ヲ却ク。

○大猷院殿御實紀。

阿蘭陀國主ノ信書ヲ却ク

十七日○寛永四年九月。阿蘭陀國主より松浦肥前守隆信によりて書簡を奉る。酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝、藤堂和泉守高虎并に儒職林道春信勝。林永喜信澄をもて、金地院崇傳につきて議せらる。彼國主より直に書

簡を奉りし例かし。かつ其中不禮の語多をもて、其使を追かへさるべしと議定す。異國日記

——大猷院殿御實紀卷十

〔附記〕江戸大火

〔附記〕九月晦日癸巳○寛永四年丁卯。江戸大火、延燒三日ニ及ヒ死傷多シ。

三十日○寛永四年九月。横山町寺町より失火し、折節風つよく、三日が間其火消ず、吉原に至る男女燒死するもの多し。江城年錄

——大猷院殿御實紀卷十

一、九月晦日○寛永四年。横山町邊之寺町より火事出來、折節大風吹、三日三夜不ㇾ消、町四十町ほど燒、吉原邊迄燒、男女數多燒死。

——江城年錄

多加佐吳人虎皮其他獻上事蹟

十一月五日戊辰○寛永四年丁卯（紀元二二八七年）○戊辰、三正綜覽。多賀佐吳人利加、兩御所○德川秀忠、家光。ヲ拜シ虎皮其他ヲ獻ズ。○大猷院殿御實紀。

多加佐吳人虎皮其他獻上

五日○寛永四年十一月。多加佐吳人利加、兩御所を拜し奉る。虎皮五枚、毛氈二十枚。孔雀尾二十枚を獻ず。異國日記

——大猷院殿御實紀卷十

安南國ノ書翰幣物却否事蹟

六日己巳○寛永四年丁卯（紀元二二八七年）十一月、○己巳、三正綜覽。安南國書翰幣物ヲ捧グ。文辭倨傲不禮ノ故ヲ以テ聘物ヲ返ヘシ書翰ヲ却ク。○大猷院殿御實紀。

安南國ノ書翰幣物ヲ却ク

六日○寛永四年十一月。○中略。安南國より書簡幣物を捧ぐ。其文辭倨傲不禮なるをもて、聘物をおしかへし、書簡をも受

たまふまじき由、土井大炊頭利勝、酒井雅樂頭忠世に金地院崇傳を加へて議せしめらる。

——大猷院殿御實紀巻十

諸國金銀奉行及金奉行設置

是年○寛永四年丁卯（紀元二二八七年）。諸國金銀奉行及ビ金奉行ヲ設ク。○大猷院殿御實紀。大日本貨幣史。

諸國金銀奉行及金奉行設置

此年○寛永四年丁卯。書院番内藤主馬重次は、諸國金銀奉行命ぜらる。小川惣左衛門頼勝は、金奉行にかり。○下略

——大猷院殿御實紀巻十

四年○寛永丁卯。諸國金銀奉行ヲ設ク。

——大日本貨幣史巻五

是歳十二月諸國金銀奉行及ヒ金奉行ヲ置ク。徳川實紀

大猷院殿御實紀、是年七月廿九日大坂金奉行ノ事ヲ載ス、左ノ如シ。

廿九日○寛永四年七月。大坂金奉行深津彌左衛門正吉死す。長子孫左衛門正但別ま召出されしかば、二子長右衛門正信に家つがせん事請しに、三年をへて家つがしめられ、正信が蔭料は收めらる。長子正但は此年父の職つぎ、大坂金奉行たらしめらる。

——大猷院殿御實紀巻十

旗下從者制限

五年戊辰○寛永。（紀元二二八八年。）二月九日辛丑○辛丑、三正綜覽。旗下ノ士出仕並ニ江戸中往還ノ際ニ於ケル從者ヲ制限ス。○東武實錄。御内書草案。徳川禁令考。大猷院殿御實紀。

旗下從者制限事蹟

從者制限

同○寛永五年二月。九日幕下ノ諸士登營ノ時且ツ江戸中往還ノ刻召シ列ル徒者ノ員數ヲ定ラレ、仰セ出サル。

一、二百石　侍一人
一、三百石より四百石迄　同二人
一、五百石より七百石迄　同三人
但八百石ゟ上ゟ千石へ付為し。
一、千石ゟ千七百石迄　同四人
同　斷
一、二千石より二千七百石迄　同六人
同　斷
一、三千石より三千七百石迄　同七人
同　斷
一、四千石より四千七百石迄　同八人
同　斷
一、五千石　同十人

右之通出仕并江戸中往還之時、若黨召列為し。是よりもとくかき事ハくるしからず。おゝくほるゝ儀可爲無用。此御定之儀も人をも吟味いたし爲可相抱被仰出ゆ間、其旨を可存。無足又も堪忍分被下ゆとい ふとも、親之分限ゟまたらひ、若黨召列為し。諸役人ハ非制限、但御陣御上洛之時も各別也。

寛永五年辰二月九日

定 ○德川禁令考「御旗本中常式供之者御定」ナル前書アリ。

一、貳百石　侍壹人
一、三百石より四百石迄　同二人
一、五百石より七百石迄　同三人
但、八百石より上も千石へ付へし。
一、千石より石七百石迄　同四人
同　斷
一、貳千石より貳千七百石迄　同六人
同　斷
一、三千石より三千七百石迄　同七人
同　斷
一、四千石より四千七百石迄　同八人
同　斷
一、五千石　同十人

右之通出仕幷江戸中往還之時、若黨召連へし。是よりすくなき事も○德川禁令考「減少ハ」ニ作ル。不レ苦、おほくつるゝ儀○德川禁令考「召連候儀」ニ作ル。「可レ爲ニ無用」。此御定之儀も人をも吟味いたし可相抱ため、被仰出ゆ間、可レ存ニ其旨ー、無足○無

——東武實錄

旗本從者之制

無足堪忍分

又も堪忍分被下ゆといふとも、親の分限よしたがひ、若黨召列へし。諸役人も制の限よあらず。但御陣御上洛なとの刻も、各別也。

——御内書草案寛永五戊辰年。建部傳内。

寛永五年二月九日○德川禁令考「二月十一日」ニ作ル。

供廻

寛永五戊辰年二月九日、出仕幷ニ江戸往還之供立員數被仰出東武實錄此後度々御觸有之。

——國字分類雜記

九日○寛永五年二月。旗下の諸士從者の員數をさだめらる。一二百石侍壹人、三百石より四百石迄二人、五百石より七百石迄三人、八百石より千七百石迄四人、千八百石より二千七百石迄六人、二千八百石より三千七百石迄七人、三千八百石より四千七百石まで八人、四千八百石より五千石迄十人たるべし。この通り出仕幷に府内往還の時めしつるべし。是より減ぜん事はくるしからず。これより多く具すべからず。かく定めらるゝ上は、よく人を査檢して抱べし。無足あるは堪忍分（當時蔭料給はるものをいふ。）とも。親の分限に從ひ召具すべし。諸有司は制の限にあらず。はた出陣上洛のときは、各別たるべしとなり。

——大猷院殿御實紀

徒士若黨及農民ノ衣服制限

徒士若黨及農民ノ衣服制限事蹟

又同日○寛永五年二月九日。徒士若黨弓鐵炮ノ者、及百姓ノ衣服ヲ制限ス。○東武實錄。御内書草案。德川禁令考。大猷院殿御實紀。

徒士若黨及農民ノ衣服制限

定

一、歩行若黨弓鐵砲之者着物之事

絹つむきの分ハゆるさゞし其上之衣裳無用たるべし。但其主人よりあたへし着物は不苦之事。

一、百姓着物之事

百姓の分は布もめんたるゞし。但名主其外百姓之女房ハ紬之着物まてハ不苦、其上之衣類着ゆゑ曲事たるゞき者也。

寛永五年辰二月九日

——東武實錄

一、かちゞりさう弓鐵炮の者きる物のたくいの事

きぬつむきの分ハゆるすへし。其上のいしやう無用さるゞし。但その主人よりあさへさるきる物ハくるしからさる事。

一、百姓きる物の事

百姓分の者ハ、布もめんさるべし。但名主その外百ゑやうの女子ハ、つむきのきる物まてはくるしからに。其上のいしやうをきゆハゞ、曲事さるべき者也。

寛永五年二月九日

右兩通○從者制限ノ定ヲ合セ云フ。判形無之、奉行と不書、物頭衆へ書付渡し申ゆ。

——御内書草案寛永五戊辰年建部傳内。

百姓着物之事

定

一、百姓之着物之事、百姓分之者ハ布木綿たるべし。但名主其外百姓之女房ハ、紬之着物迄ハ不苦。其上之衣裳を着ゆ之者可爲曲事者也。

寛永五辰年二月九日

老中

——徳川禁令考第五帙卷四十三。

又令せらるゝは、歩行若黨弓鐵炮のもの、衣服絹紬はゆるさるべし。それより上品は着せしむべらず。されど其主より與へたるはこの限にあらず。農民は布木綿を着すべし。されど里正及農夫の妻女は、紬衣服はゆるすべし。それより上品の衣服着するものは曲事たるべしとなり。增補寛永日記。東武實錄。

十月二十八日乙卯○寛永五年戊辰(紀元二六八八年)。乙卯、三正綜覽。江戸近邊御鷹場法度ヲ仰出サル。東武實錄。

——大猷院殿御實紀卷十一

御鷹場法度

同○寛永五年十月。二十八日、江戸近邊御鷹場ノ御法度仰出サル、御代官ノ面々是ヲ奉リ村里ニ相觸ル。

村の名

一、御鷹所にてはりひゆ者は、此御判(御黑印)木札にて可有之ゆ之間、能々あらため御判無ニ相違一者ハはつのはせ可申事。

一、上下のとをを鷹ハ御鷹場之内をゝり宿次にあひ送ゞき事。

一、御判なくしてつりひ候ハゝ鷹師共をとめ置早々可ニ申上一事。

一、御制なくして鷹ほりひいを見出い者ゑは御褒美可被下、若見のらしいハゞ其者曲事に可被仰付事。
一、在々所々ゑあやしき者一切をくゐからさゝ事。
右此旨を相守ゐき者也。
寛永五年十月廿八日

此御法度書相觸ル村々ノ事

一、ゑゝや　一、小塚原
一、板むし　一、ゑゝ
一、滝くさ　一、むし場
一、をく　一、上板むし
一、さうしろや　一、品川
以上十村倉橋勝兵衛是を觸る。
一、せんしゐ　一、たけのつろ
一、そうろ村　一、わらひ
一、ゐろ川村　一、うなきさや
一、ろさ井　一、市川
一、まはと村　一、こあい
一、さゝろはゝ　一、とろさき

一、きそ郷村　一、はるろそ郷
一、むちちやう　一、むかまゝ村
一、とねり村　一、ぬまゝ
一、ひらい村　一、小松川村
一、さゝめ村　一、むやそ村（○そやせ脱。）
一、ゐろう村　一、きやうとく村
以上廿四村伊丹理右衛門是を觸る。
一、わうし村　一、いゑ洲村
一、ひら柳村　一、ほとろや（○はとか脱。）
一、小石川村
以上五村木部藤左衛門是を觸る。
一、ゑ村　一、あろ塚村
以上二村次田平左衛門是を觸る。
一、うらゐ村
中村彌左衛門是を觸る。
一、よの村　一、うゐたへ（○植田谷脱。）
以上二村脇部惣左衛門是を觸る。

一、六郷　一、かまむき村
一、はかしは村　一、かせ村
一、ゑくち村　一、おゝ井村
一、小杉村　一、池上
一、うのき村　一、ミその口村
以上十村小泉次大夫是を觸る。
右御黒印木札渡ゆ輩
壹枚　加藤伊織
壹枚　戸田久助
壹枚　小栗長右衞門
壹枚　阿部新右衞門

——東武實錄

江戸城修築用伊豆國石材搬入

十月。寛永五年戊辰（紀元二六八年）。ヨリ翌年〇寛永六年。マデ江戸城外郭石壘構造アリ、伊豆國ヨリ巨石ヲ搬送ス。大猷院殿御實紀。寛政重修諸家譜。

伊豆國産石材搬入事蹟

伊豆國産石材搬入　是ヨリ先、七月十一日江戸大震アリ。城壘多ク崩ル〇大猷院殿御實紀。亦茲ニ因シ、是時亦石材ヲ伊豆國ヨリ搬送セシム。這回ノ江戸外郭石壘構造モ

北條氏重

小笠原信盛

此月〇寛永十年十月。五より來年まで、江戸城外郭石壘構造ありて、伊豆國より巨石を搬送す。北條出羽守氏重その事をつとめ、小笠原安藝守信盛は大川口に關すへて、その石船往來を査檢す。

——大猷院殿御實紀巻十二。

氏重　北條。久太郎、出羽守、從五位下、實は保科肥後守正之直が四男、母は久松佐渡守俊勝が女多却君、東照宮異父の御妹なり。〇中略。

寛永五年十月仰をうけたまはりて、西城の石壘を築き、伊豆國より石運送等の役をつとむ。

——寛政重修諸家譜

信盛　〇小笠原。安藝、母は信通が女。〇中略。

寛永五年御城外郭石壘普請のとき、大川口を守りて船改の事を役す。

——寛政重修諸家譜

信盛　〇小笠原。安藝、母は信通が女。

慶長十六年六月はじめて台德院殿にまみえたてまつる。時に六歳。十七年九月祖父が遺跡を繼、後此事を謝するの時、祖父が遺物呂宋（るすん）の茶壺を献ず。其後大坂兩度の御陣ゆ、相摸國三崎走水等の番をつとめ、又、御上洛あるのときもしばしば走水の番を勤む。寛永五年御城外郭石壘普請のとき、大川口を守りて船改の事を役す。九年六月二十五日御船手となり、八月十四日水主同心三十九を預けらる。十三年十二月二十九日布衣を着することをゆるさる。十七年六月二十二日、これよりのち船手の輩、年毎に代る〳〵四國、九州、中國の浦々を檢視すべきむねおほせをかうぶり、十九年信盛は向井右衞門直宗とともに西國を巡見す。寛文十年四月十四日務を辭し、十一年七月二十三日死す。年六十七、法名宗因。

——寛政重修諸家譜

伊達政宗半高

諸侯助役

八日○寛永五年十二月。仙臺中納言政宗卿に奉書もて、來年江戸城石垣構造助役の事命ぜらる。されど黄門は妻子を府に住居せしむれば、半高役たるべしとかり。

——大猷院殿御實紀巻十二。

十八日○寛永五年十一月。江戸城石垣構造により、酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝、酒井讃岐守忠勝、永井信濃守尚政連署して、尾紀水駿四卿幷に仙臺中納言政宗卿、佐竹右京大夫義宣、上杉彈正大弼定勝、南部信濃守利直等に助役の事をつとふ。その餘のともがらには普請奉行加藤遠江守光直、佐久間河内守實勝、阿部四郎五郎正之、石川三右衛門勝政よりつたへしむ。江戸城惣廓の石壘、惣坪數四萬四千五百三十三坪二合八勺三才とぞ、課役の制六隊に分ち、一隊は酒井雅樂頭忠世、酒井河内守忠行、酉尾右京忠昭、細川玄蕃頭興昌、眞田伊豆守信之、眞田河内守信吉、眞田内記信政、眞田隼人正信重、大手下馬の虎口を築く。二隊は土井大炊頭利勝、堀美作守親良、佐久間日向守安長、佐久間大膳亮勝之、本多大隅守忠純、松平五郎忠憲、松平采女忠利、淺野采女正長重、玄關前内門虎口幷に西城石垣を築く。三隊は酒井讃岐守忠勝、安藤右京進重長吹上門虎口をきづく。稲葉丹後守正勝、井伊兵部少輔直勝、酒井山城守重澄、内藤伊賀守忠重、新庄駿河守直好、紅葉山間喰違をきづく。四隊は永井信濃守尚政、土屋民部少輔利直、秋元但馬守泰朝、水野左近忠善、山里丸虎口をきづく。井上河内守正利、青山大藏少輔幸成、内藤百助正勝、京極主膳正高通、月見櫓の臺裏門の石壁を築く。小笠原左衛門佐政信は、西城的場乾溝石垣を掌る。五隊は、松平民部大輔忠次、水谷伊勢守勝隆、西郷若狭守正員、秋田河内守俊季、牧野右馬允忠成、松平大膳亮忠重、日根野織部正吉明、皆川志摩守隆庸、西城石垣を築き外溝を浚利す。六隊は、奥平美作守忠昌、内藤左馬助政長、大關右衛門高增、那須美濃守資重、土方彦三郎雄次、大久保加賀守忠職、相馬虎之助義胤も同じ。又水戸中納言頼房卿、上杉彈正大弼定勝、島居伊賀守忠恒、佐竹右京大夫義宣、岩城佐兵衛宣隆、松平仙千代丸、酒井宮内少輔忠勝、酒井長門守忠重、酒井右近大夫直次、堀丹後守直寄、松平出羽守直政、本多飛驒守成重、溝口出雲守宣直、溝口伊豆守善勝、南部信濃守利直、戸澤右京政盛。（居城燒失により半にてゆるさる。）六郷兵庫頭政乗は別組とせらる。仙臺中納言政宗卿は、芝口日比谷升形石垣、松平伊豫守忠昌、松平土佐守直良は、田安雉子橋、松平大和守直基は、水曲輪、小笠原右近大夫忠眞、三丸堀石垣をきづく。分部左京亮光信、二丸南廓、寄合青木次郎助直澄も同じ。すべて出羽奥州の輩は、日比谷、數寄屋、鍛冶橋、吳服橋、大橋、神田橋、一橋、雉子橋、等をきづく。淺野但馬守長晟、加藤肥後守忠廣は、和田倉櫻田の間、兵庫橋虎口をきづく。又豆州より石を運送する制は、五畿内所領の輩半役、近江、美濃、播磨、備後の輩は本役、三河は本役八人、半役四人、遠江は本役壹人、半役壹人、伊勢は本役一人、半役一人、尾紀駿の三卿は本役なり。されど二條城構造の例により、三卿ともに本高の内十萬石づゝの役を免さる。其外久永源兵衛重勝、森川金右衛門氏信、駒井次郎左衛門昌保、池田圖書政長、小俣吉右衛門政利、石野六左衛門廣吉、中島長三郎某、天野麥右衛門重勝は江戸にて石の奉行し、佐藤勘右衛門繼成、大久保新八郎康村、長崎半右衛門元通、中澤主税助吉政、小倉忠右衛門正次は伊豆にまかりて石の奉行をつとめ、向井將監忠勝、石川八左衛門政次、今村傳四郎正長は運送船の奉行とし、間宮虎之助長澄、青木太兵衛吉永、山田市兵衛某は本目の地にまかり栗石の奉行し、小濱右京守隆、石川與次右衛門重正、前田五左衛門定良、安房上總栗石の奉行命ぜらる。（東武實錄、江城年錄、紀年錄に、翌年正月三日にかくる。いま伊達家貞享書上によりてこゝに收む。）

——大猷院殿御實紀巻十二。

十九日○寛永五年十二月。加賀中納言利常卿封地の染絹五拾端、魚物壹箱献じければ、御内書を賜ふ。二十一日太田采女正資宗、上總下總兩國の内に高貳千石加恩あり、すべて四千百石になさる。東武實錄には氏秋とす。今は重修譜に從ふ。

——大猷院殿御實紀

寛永六年江戸城修築ノ項ニ合セ載ス。就キテ見ル可シ。

道奉行任命

十一月十六日癸酉○寛永五年(紀元二二八八年)。○癸酉、三正綜覽。渡邊勝綱○半兵衛。荒川忠吉○又六ヲ郎。道奉行ニ任ス。○大猷院殿御實紀。寛政呈譜。

道奉行任命事蹟

道奉行　相傳フ。

十六日○寛永五年十一月。渡邊半兵衛勝綱・荒川又六郎忠吉道奉行となる。重修譜渡邊が傳には、道奉行の事所見なしといへども荒川が傳には、始大番にて、後道奉行となりしよし記すゆへ、今は江城年錄にしたがひ、此日にかく。

——大猷院殿御實紀

忠吉○荒川又六郎。○中略。年月日不レ知大御番に御番入被二仰付一、在番之譯并年月日不レ知、其後道奉行被二仰付一相勤申ゆ。年齢不レ知寛永六巳年四月廿一日病死仕ゆ。

——寛政呈譜

問曰、右の伍の字の差物の義は、御使番衆計りにかぎりたる事の様に相心得罷在ゆ所に、御道奉行衆四人の義なり。指物は伍の字同筆に有レ之と申にも、子細有レ之ゆ事や。答曰、我等承り及たるは、道奉行と有レ之御役の義は、小田原御陣の節迄は御家に無二之處に、慶長五年關がはら御陣前、御備先道はし見積りの御役人無レ之てはと有レ之、御評議を以て、御使番衆の中より庄田小左衛門殿を以て御道奉行役を被二仰付一所に、小左衛門殿被申るゝは、御奉公の道は何事を相勤申も同然の義なれば奉レ畏ゆ。乍レ去人には病煩ひと申義も無くて叶ひ不レ申處に、一人役と申しては迷惑仕ゆ間、同役を可レ被二仰付一との事にゆへ共、御陣先差當御入用の御使番衆を被二仰付一義も罷成がたく有レ之ゆへ、大御番衆の中より武功の人を御ゑらみ有レ之、小左衛門殿の御役被二仰付一るゝを以て、右の仁も伍の字の指物にて被二相勤一、御陣相濟ゆ以後、庄田殿には元の御役御使番へ歸役被二仰付一ゆ得共、御道奉行と有るは永々共に無二之ては相叶申間敷と有レ之義にて、又大御番衆の中より被二仰付一、此仁も先役に準じ伍の字の指物にて大坂兩度の御陣をも相勤被申ゆより、以來道奉行衆も伍の字の指物に有レ之となり。

——落穗集追加

道奉行若年寄支配。御扶持方六十人扶持。

荒井八郎兵衛。小笠原久左衛門。美濃部勘兵衛。大久保新六郎。

萬治二年己亥月日始置二四人一。○新御番、大御番出役。

元祿六年癸酉七月十日上水方支配。

正德二年壬辰二月廿六日與力二騎、同心十人附す。

享保五年庚子八月廿七日廢。四人。

同年十月廿日再置二二人一。御小姓組出役。二年宛可レ勤旨。各三十人扶持。

同六年辛丑五月廢二同心一。

同年閏七月十六日各六十人扶持。

元文四年己未八月二日神田玉川兩上水支配。

小笠原權九郎、久能猪兵衛、各賜二時服三一。

明和五年戊子九月五日廢。

道奉行二人　兩番組之出役。而掌東都府内道路事也。

道奉行　寛文七未二月廿四日新規四人被仰付。享保五子九月廿七日道中奉行四人御免。以後兩御番ヨリ二年代出役二人被仰付。明和五子九月五日道中奉行出役相止、自今上水方御用掛り町奉行加役勤御免、御普請奉行上水方道方共掛リ相成、新規上水道方下奉行御徒目付二人、同假役、幷御勘定表火ノ番御徒押御留守居與力ヨリ都合四人被仰付、御普請奉行支配ニ成ル也。

〔附記〕錢藏番頭・勘定頭・大工頭

——諸役順巨細記

〔附記〕錢藏番頭・勘定頭・大工頭

十二日○寛永五年十二月。錢藏番頭高谷十太夫盛政が子太兵衛盛道、父が家をつぎその職たらしめらる。重修譜には盛政が卒せし年月幷に子盛道が家つぎし事みえず。よりて家譜にしたがひ此日におさむ。

——大猷院殿御實紀巻十二。

此年○寛永五年。勘定頭伊丹播磨守康勝加恩有て九千石になる。其子小姓藏人勝長別に采邑千石給はり。

——大猷院殿御實紀巻十二。

大工頭木原杢允義久桔梗間に詰て奥の事奉り、作事の勤は故の如し。（重修譜には所見なし、よりて家譜の説に從ふ。）

——大猷院殿御實紀巻十二。

安南國書翰幣物奉獻

是月○寛永五年戊辰十二月。安南國書翰ヲ捧ゲ、幣物ヲ獻ズ。○大猷院殿御實紀。

安南國書翰幣物奉獻事蹟

安南國信書幣物奉獻

是月○寛永五年十二月。又安南國より書簡を捧げ、手鏡二口、奇楠香、沈香、白領花、大緞子五疋、白緝廿疋獻じ、

茶屋四郎次郎へも書簡ををくり、奇楠香、白緝十疋ををくる。その書簡の趣は、貴邦と安南隣好を修る事既に久し。此ころ外姪不義の擧動し兵をおこし國境を侵す。されど天命の歸する所賊徒敗走せり。竊にきけば貴國廣仁の恩意を以て、東京の通商を停禁有しよし傳聞せり。もしその聞所違ひなくば、ふかく感佩するものなりとぞ。

——大猷院殿御實紀巻十二。

江戸近海不漁ニ備ヘ鯛簗設置

是年○寛永五年戊辰、（紀元二二八八年）。幕府江戸近海不漁ニ際シ庖厨所用魚類補給ニ備ヘンガ爲メ、駿河國駿東郡江ノ浦ニ鯛簗ヲ設ケシム。○大日本産業事蹟。日本産業資料大系(4)。大猷院殿御實紀。

鯛簗設置事蹟

鯛簗設置　事ハ江戸ニ屬サザレモ、江戸近海不漁ノ對策タルヲ以テ、茲ニ錄ス。

駿、豆、相、武國鯛簗の沿革

本邦鯛簗の起原は今得て考ふべからずと雖ども、蓋し支那古代の製に由りし者との説較や信を措くに足るものゝ如し。而して駿、豆、相、武國の沿革は次記の如し。即ち傳へ謂ふ、今を距る二百數十年前寛永三年將軍德川家光公上洛に際し、豆州三島驛及駿州蒲原驛に旅泊の時、偶ゝ駿州沼津及獅子濱兩村の漁民其蓄養する所の活鯛若干尾を獻上し、大に公の賞譽を得しことあり。其後同○寛永。五年幕府右兩村に命じて駿豆兩州に於て獲る所の鯛魚を集養せしめ、以て江戸近海不漁にして、庖厨所用の鮒魚缺乏の時に備へしめ、且地を駿東郡江の浦に賜ひ、新に鯛簗を設けしめしと。其後元文五年に至り、幕府時に臨て駿州より廻漕せしむるの不便を覺り、更に都下の魚商人に命じて相州浦賀、釵形、横須賀及び武州神奈川青木町、洲崎浦等の數箇所に鯛簗を新設せしめたり。故に駿、豆兩州内浦に於て捕獲せしものは一たび之を駿州江

の浦に集養し、次で豆州須崎村に輸し、更に其近傍のものを合せて順次浦賀以下數所の籔場に廻漕したりと云ふ。是れ東都近傍に於て鯛籔設置の起原とす。爾後幕府は籔營業者をして鯛魚缺乏のときは遠州或は房州、總州、常州等の漁村に就て廣く之を買收せしめ、籔中常に巨多の鯛魚を蓄養したり。又三州佐久島、尾州日間加島、龜島、志州奈切村、讃州千島、本島、清島、浦兒島等の鯛籔は皆江戸近傍籔營業者の從憑に由て開設したるものなりと。之に由て考ふれば當時幕府が鯛魚を消費せしこと甚だ盛なりしが爲め、隨て之を籔中に蓄養し以て不時の需めに應ずるの必要なりしを知るべし。

——大日本産業事蹟漁業及水産○日本産業資料大系(4)、同。

大猷院殿御實紀ニ據レバ、將軍家光寛永三年七月十二日江戸城ヲ發シ上洛ス。途次同月十六七日豆州三島驛ニ滯留ス。活鯛献上ハ此時ノ事歟。

十六日○寛永三年七月。三島にやどらせ給ふ。

十七日○同上。三島御滯留。

——大猷院殿御實紀卷七。

寛永六年江戸城修築

寛永六年江戸城修築事蹟

寛永六年己巳○紀元二六八九年。幕府江戸城修築ノ工ヲ起シ、諸侯ニ助役ヲ課ス。江戸復大土木ニ依リ伊豆○相模國。其他ヨリ石材伐出シ輸送ノ爲メ運送船舶出入繁劇ヲ加ヘ、助役諸侯ノ役夫多數入市ス。皇城篇第一參照。○東武實錄。御當家紀年錄。新選御家譜。寛政重修諸家譜。寛政呈譜。敬公實錄。譜牒餘錄。侯爵松平家回答。伊達治家記錄。上杉年譜。子爵相馬家回答。江城年錄。寛明日記。

寛永六年江戸城修築始末

前年十一月十八日乙亥○寛永五年○紀元二六八八年○乙亥○三正綜覽。幕府將ニ明年○寛永六年。ヲ以テ江戸城ヲ修築セムトシ、老中酒井忠世○雍樂。土井利勝○大炊。酒井忠勝○讃岐。永井尚政○信濃ヲシテ、命ヲ諸大名ニ傳ヘテ工ヲ助ケシム。又直ニ普請奉行ヨリ命ヲ傳ヘタルモ有リ。

是時命ヲ受ケタルハ、名古屋○尾張國。城主德川義直○權大納言。和歌山○紀伊國。城主德川頼宣○權大納言。府中○駿河國。城主德川忠長○大納言。水戸○常陸國。城主德川頼房○權中納言。仙臺○陸奥國。城主伊達政宗○中納言。久保田○出羽國。城主佐竹義宣○右京大夫。米澤○出羽國。城主上杉定勝○彈正大弼。三戸○陸奥國。城主南部利直○信濃守。以下ニシテ、六年己巳○寛永。○紀元二六八九年。正月十日丁卯○丁卯、三正綜覽。三繩張ヲ爲ス。

工事ノ箇所ハ、石垣及塹壕ノ浚渫其他也。石垣延長千七百五十間、坪數四萬四千五百三十三坪二合八勺三才。之ヲ七組ニ分課ス。

厩橋○上野國。城主酒井忠世○雍樂。同忠行○忠世子。土浦○常陸國。城主西尾忠昭○右京。茂木○下總國。邑主細川興昌○左兵衛頭。松代○信濃國。城主眞田信之○伊豆守。沼田○上野國。城主眞田信吉○河內守。同信政○大內記。信之子。同信重○隼人正。信之子。之ヲ一組トス。

佐倉○下總國。城主土井利勝○大炊頭。烏山○下野國。城主堀親良○雲作守。飯山○信濃國。城主佐久間安長○日向守。長沼○信濃國。城主佐久間勝之○大膳亮。榎本○下野國。城主本多忠純○大隈守。吉田○三河國。城主松平忠利ノ子忠房○五郎八。小諸○信濃國。城主松平憲良庶兄忠利○松平采女正。笠間○常陸國。城主淺野長重○采女正。一組タリ。

河越○武藏國。城主酒井忠勝○讃岐守。高崎○上野國。城主安藤重長○右京亮。眞岡○下野國。邑主稲葉正勝○丹後守。安中○上野國。城主井伊直勝○兵部少輔。生實○下總國。邑主酒井重澄○山城守。內藤忠重○內藤清成弟。麻生○常陸國。邑主新庄直好○駿河守。一組タリ。

古河○下總國。城主永井尚政○信濃守。久留里○上總國。城主土屋利直○民部少輔。牧社○上野國。城主秋元泰朝○但馬守。山川○下總國。邑主水野忠善○左近將監。横須賀○遠江國。城主井上正利○河內守。青山幸成○大藏少輔。內藤正勝○百助。峯山○丹後國。邑主京極高通○主膳正。關宿○下總國。城主小笠原政信○左衛門佐。一組タリ。

館林國。上野城主榊原忠次部大輔。松平式下館國。常陸城主水谷勝隆守。伊勢東條國。安房邑主西郷正員守。若狭宍戸國。常陸城主秋田俊季守。河内長岡國。越後城主牧野忠成九。石馬佐賀國。上總城主松平忠重亮。大膳壬生國。下野城主日根野吉明正。織部府中國。常陸城主皆川隆庸國。志摩一組タリ。

宇都宮國。下野城主奥平忠昌亮。養作岩城平國。陸奥城主内藤政長助。左馬黒羽國。下野城主大關高増門。石衛福原國。下野邑主那須資重國。養濃菰野國。伊勢邑主土方雄氏郎。斉三大久保忠任守。加賀中村國。陸奥城主相馬義胤亮。大膳一組タリ。

伊達政宗言。中納上杉定勝少弾。正山形國。出羽城主鳥居忠恒守。伊賀佐竹義宣天夫。石京龜田國。出羽邑主岩城宣隆リ。東武實錄忠次郎ト有忠次郎直隆ハ元和六年死ス。高田國。越後城主松平仙千代長。光庄内國。出羽城主酒井忠勝少輔。宮内同忠重馬門守。同直次近。石村上國。越後城主堀直寄守。丹後福井國。越前城主松平忠昌伊豫守。大野國。越前城主松平直政守。勝山國。越前邑主松平直基天和守。松平直良土佐守。直政弟。丸岡國。越後城主本多成重飛驒守。水戸國。常陸城主德川頼房言。中納熊本國。肥後城主加藤忠廣守。肥後廣島國。安藝城主淺野長晟出羽守。新發田國。越後城主溝口宣直出雲守。同政一伊豆守。南部利直信濃守。新庄國。出羽城主戸澤政盛亮。石京本庄國。出羽城主六郷政乗兵庫頭。寄合組タリ。以テ修築ニ任ズ。

德川義直大納言。德川頼房言。中納言。德川忠長大納言等ハ、伊豆ノ石材ヲ伐採ス。

久能國。駿河城主北條氏重守。出羽膳所國。近江城主菅沼定芳佐。越部等、亦石材伐採ヲ助役シ、明石國。播磨城主小笠原忠政石近大夫。龍野國。播磨城主小笠原長次信濃守。ハ石垣修築ヲ手傳フ。

是時加藤光直遠江守。佐久間實勝河内守。阿倍正之四郎五郎。石河勝政三右衛門。普請奉行タリ。久永重知濃兵衛。森川氏信金右衛門。駒井昌保二郎左衛門。池田政長圖書。小俣政利吉左衛門。ハ、江戸石奉行假役ト爲リ、石野廣吉六左衛門。中島盛利長三郎。天野重勝奥右衛門。ハ木石奉行、佐藤繼成勘右衛門。大久保康村新八郎。長崎元通半左衛門。中澤吉政主殿助。小倉正次忠右衛門。ハ伊豆石奉行假役、白井忠勝濃監。石川政次八左衛門。今村正長傳四郎。ハ、伊豆船奉行、間宮長澄虎之助。青木吉長大兵衛。山田直勝市兵衛。ハ、木目武藏國。栗石奉行、小濱守隆石京。石川重正與次右衛門。前田定良五左衛門。ハ、安房上總栗石奉行ト爲ル。

六月二日寛永六年。丙辰西丸所々ノ升形石垣築營ニ着手シ、酒井忠世雍樂頭。大手ノ升形ヲ築キ、土井利勝大炊頭。玄關前ノ石垣ヲ築キ、永井尚政信濃守。ハ吹上及山里ノ升形、稲葉正勝丹後守。ハ紅葉山東照宮下ノ升形、井上正利河内守。ハ月見櫓臺裏門ノ升形ヲ築ク。

外郭虎口石壁日比谷門・數寄屋橋・鍛冶橋・呉服橋・大橋常盤橋。神田橋・一橋・雉子橋等ハ、概シテ出羽奥州大名ノ受持也。中ニモ伊達政宗ハ、芝口、日比谷口兩門升形石垣等ヲ負擔ス。又西丸石垣竣工後ハ、之ニ從事シタル諸侯外濠ノ浚渫ニ當ル。此外西丸庭園ノ築造有リ。

六月二日寛永六年。命ヲ下シ、老中永井尚政信濃守。及伏見奉行小堀政一遠江守。之ヲ奉行シ、岡山備前守。城主池田忠雄宮内少輔。久留米筑後國。城主有馬豊氏左兵衛。工ヲ助ク。内石垣ノ修築ハ、七月寛永六年。中略成リ、八月八日庚申寛永六年。幕府助役大名ヲ賞ス。皇城篇第一參照。

諸侯助役ノ狀況

諸侯助役ノ狀況　(一)助役諸侯中一部ヲ以テ伊豆ニ石材ヲ伐出シ、是ヲ江戸ニ運搬セシメ、(二)一部諸侯ニハ右石材ヲ江戸ニ於テ供與シテ石垣構築ニ任ゼシメ、幕府ハ是等工事ヲ監スル諸奉行ヲ任命セシ事上記ノ如クナルガ、諸侯中、築方即チ構築ヲ任命セラレシハ主トシテ關東ニ於ケル諸侯ニシテ、寄方即チ豆州ヨリ石材ノ伐出輸送ヲ任命セラレシハ尾張紀伊其他西國ノ諸侯ナリシ事、東武實錄ニ

築方

築方

一、關八州、關東

一、水戸、越後

寄方

三州、遠州、五畿内、播磨、近江、伊勢、美濃、尾張、紀伊、駿河。

加藤肥後守（忠廣。）

淺野但馬守（長晟。）

——東武實錄

伊豆石伐出并輸送

トアリ、又御當家紀年錄ニ

寛永六年己巳（紀元二二八九年。）是年（寛永六年（紀元二二八九）年。）築ニ江戸城六石壁ニ、尾張・紀伊兩亜相（德川義直。德川賴宣。）并西筋御譜代御家人、從ニ豆州運ル石。關東中名等、築西諸口升形及平石壁ニ。下馬之門虎口、酒井雅樂頭忠世、内之橋虎口、土井大炊頭利勝、吹上之門虎口、酒井讃岐守忠勝、山里丸虎口、永井信濃守尙政、紅葉山間喰違、稻葉丹後守正勝、裏門虎口、井上河内守正利各築之、出羽奥州大名築ニ外曲輪虎口石壁ニ。

——御當家紀年錄

伊豆石伐出方擔當

トアリ。

伊豆石伐出并輸送　是工事ノ準備トシテハ前年（寛永五年。）十一月十八日巳ニ諸侯ニ助役ヲ命ジ、伊豆石伐出并轉送方擔當諸侯ニ左ノ如ク達シタリ。

來年（寛永六年（紀元二二八九年。））御普請之儀、去時分江戸ニ被仰聞ル之趣、達上聽ル之處、於ニ伊豆ニ石を割、御上ル樣ニと被ニ仰出ル間、可ニ被成ニ其御心得ル。石之寸尺員數之儀ハ、加藤遠江守（光直。）安倍四郎五郎（正之。）佐久間河内守（實勝。）石河三右衞門（政勝。）より可ニ被ニ申達ル。此旨宜ニ被ニ仰上ル。恐々。

運賃幕府負擔

知行所百石以上ノ運船伊豆へ廻漕

十一月十八日（寛永六年（紀元二二八九年。））

竹腰山城守殿（正富。尾張老臣。）

成瀨隼人正殿（正成。尾張老臣。）

安藤帶刀殿（直次。紀伊老臣。）

水野淡路守殿（重良。紀伊老臣。）

追ㄱ伊豆江戸迄之海上、從ニ公儀ニ運賃被ニ仰付ル間、御知行所ニ㊀、百石より上之荷物舟、不ニ殘伊豆ヘ被ニ廻ル之、於ニ彼地ニ向井將監（忠勝。）石川八左衞門（政次。）今村傳四郎（正長。）差圖次第、石を積ル樣尤ニ也。舟之儀年内（寛永五年（紀元二二八八）年。）より伊豆ヘ可ニ被ニ廻ル。御知行所に有ニ之舟之員數書立、三人（向井。石川。今村。）衆迄、先樣可ニ有ニ御差越ニ。以上。

——東武實錄

右ニ依レバ、尾張、紀伊兩侯ニ對シテハ伊豆石伐出シ方ト同時ニ、伐出石材ヲ江戸ヘ運搬セムガタメ、其知行所ニ於ケル百石以上ノ荷物船ヲ悉ク伊豆ヘ廻漕シ來リテ海上輸送ノ任務ニ就カシメム事ヲ命ジタル者ニシテ、伊豆江戸間ノ海上轉送ニ對シテハ幕府ヨリ運賃ヲ支拂フㇷトシ、石材積込ハ向井將監、石川八左衞門、今村傳四郎ノ指揮ヲ受クルㇷト定メ、年内（寛永五年中。）ニ伊豆ヘ廻航スベキ船舶員數ヲ書出サシメタル者ニシテ、同日又府中（駿河國。）城主德川忠長ニ對シテモ伊豆石伐出方ヲ命ジタリ。

永信（永井信濃守尙政。）

酒讃（酒井讃岐守忠勝。）

土大（土井大炊頭利勝。）

酒雅（酒井雅樂頭忠世。）

來年（寛永六年）江戸御普請、從三月朝日一（寛永六年）相初い。然ゝ於伊豆石を割、御上い様ニと、被仰出い間、可被成其御心得い。委細加藤遠江守（光直）安倍四郎五郎（正之）佐久間河内守（實勝）石河三右衛門（政勝）より、可被申達い。此旨宜被仰上い。恐々。

十一月十八日（寛永五年紀元二六八八年）

鳥居土佐守殿（成次駿河老臣）
朝倉筑後守殿（宣正駿河老臣）

追而書、右之書狀ニ同。

同時ニ水戸（常陸國）城主徳川頼房ニ對シテモ同様助役ノ命アリ。

來年（寛永六年紀元二六九年）江戸御普請之儀、去時分被仰聞由之趣、達上聽い之處、左様ニいの者、關東並御普請被有之様ニと、被仰出い。委細加藤遠江守（光直）安倍四郎五郎（正之）佐久間河内守（實勝）石河三右衛門（政勝）より可被申達い。此旨可被仰上い。恐々。

十一月十八日（寛永五年紀元二六八八年）

永信（永井信濃守尚政）
酒讃（酒井讃岐守忠勝）
土大（土井大炊頭利勝）
酒雅（酒井雅樂頭忠世）

——東武實錄

運送船役下命

中山備前守殿（信吉水戸老臣）
村瀨左馬助殿（重治水戸老臣）

追而書、右之書狀ニ同。

此役細川氏（小倉）亦船役ヲ命ゼラレタル者ノ如キモ其就役ノ實否明カナラズ。寛永五年十二月廿一日、細川三齋（忠興）ヨリ同忠利ヘ與ヘタル書翰中左ノ記事アリ。

一、十二月（寛永五年）來春（寛永六年）公儀御普請御船役之儀ニ付、忠利（細川）君ゟ之御書。

已上

十二月七日（寛永五年）の日付ニ而、小倉（豐前國）奉行共迄之一ツ書、具ニ披見い。

一、來春（寛永六年）伊豆ゟ江戸ヘ御石積廻ス船、諸國ヘ就被仰出、公儀御奉行衆ゟ、貴方（細川忠利）ニ參い觸狀一覽い。其ニ付我ら藏納之舟も、付立い様ニと被申越い。我等無役ニ被下い三萬七千石之分ハ、今迄卒度も役不仕い。今度之船役計可仕わけニて無之と存い間、可被得其意い。但如此ニいゟ、其方（細川忠利）手前之障ニ成いハヾ、此由大炊殿（土井利勝）ヘ可被申い。其上ニゟ替様子ニい者可被申越事。

一、但、不入事ながら、我ら知行分之舟數も書立進い事。

一、三月（寛永六年）御普請始ニい間、其以前ニ伊豆ゟ江戸ヘ石つみ廻しい程ニ、船廻いへとの御觸狀ニい。惣並と申ながら俄之事ニゟ、笑止ニ存い。（中略）

十二月廿一日（寛永五年）

酒雅（酒井雅樂頭忠世）

北條氏重
菅沼定芳
助役

越　中殿○細川忠利。進い。

北條氏重、菅沼定芳亦伊豆より石運送ノ役ニ從フ。

氏重○北條。寛永五年○紀元二二八八年。十月仰をうけたまはりて、西城の石壘を築き、伊豆より石運送等の役をつとむ。

——寛政重修諸家譜

定芳○菅沼。同○寛永。六乙巳年○紀元二二八九年。江戸城御城石垣御普請ニ付、伊豆より石差出申い。○寛政重修諸家譜ニハ「御城石壘の普請をつとむ」ト有リ。

——寛政呈譜

是役尾張侯德川義直、役ヲ助ケタルコト既記ノ如クナルガ、敬公實錄ニ據レバ、其課役ハ單ニ五百石ニ止マル如キモ、江城年錄ニハ、六十一萬九千五百石中、十萬石堤分ニ引ケ、一萬六千石木曾定役ニ引ケ、實ニ五十萬石餘ナリシガ如シ。未ダ孰カ是ナルヲ知ラズ。而シテ義直○德川。ハ此時寛永五年○紀元二二八八年。中ニ夫々役人ヲ命ジ成瀨隼人正○正成。ヲ名代トシ、山下豊後ヲ惣奉行ニ、星野又八、安部勘兵衛ヲ普請奉行トシ、其外夫々任命スル所有リタリ。

一、今年○寛永五年。江戸御城御普請ニ付、伊豆國ゟ石を運送、御國高五万石之御役被仰出、御國○尾張。より御役人被遣之。

後年伊豆御普請と云、是也。

御名代　成瀨隼人正。惣奉行　山下豊後。

御普請奉行　星野又八、安部勘兵衛。

御足輕頭　飯島土佐、富永大學、松井六左衛門、岩瀨權左衛門、小澤次郎左衛門、大澤五郎太夫。

——新撰御家譜

用材私販者下獄

御目付　小野澤五郎兵衛、平岩又右衛門。

奥御目付　松井主殿、兼松丹三郎。

御醫師三人内本道兩人。金瘡一人。松岡快庵、町醫ニゐ御屋ニ罷越、罷歸被召出。

右之外、小役人被仰付、同心一組〳〵より裁許之爲罷越、五十人御目付組々之御差副。

成瀨隼人正同心ゟ四人。竹腰山城守同心ゟ貳人石川官右衛門。村井次郎太夫。家來竹腰善右衛門、井石野作兵衛。

瀧川豊前守同心壹人。家來壹人。阿部河内守同心壹人。家來壹人。

渡邊半藏右同。寺尾左馬同。百色權太夫同。長野數馬同。平岩彌右衛門同。志水甲斐同。

翌巳年○寛永六年。迄滯留之間、折々御近習丹羽次郎左衛門等を始メ、御使ニ被遣由。

竹腰組、五十人御目付相原戸大夫、朝日惣兵衛被遣云々。

——敬公實錄

是役私ニ用材ヲ賣リテ罪ヲ護タル者有リ。

今年○寛永六年。原田右衛門父子七人御預ケ。

原田右衛門渡邊半藏へ。原田九右衛門志水甲斐へ。

五男子一人宛御預。

石川市正、兼松源兵衛、中村又藏、生駒因幡、横井伊折。

右御科ハ、江戸御城御臺所御作事ニ付、虹梁之大材御尋之處、右衛門儀材木や惣兵衛と申合、木曾谷より樫木之大材木口四尺。長十七間。引出、江戸へ遣、賣上ケゆニ付、希有之大材故、御旗本衆許有之、御賞議之處、賣主惣兵衛ニゐ、原田が造意ニ付、右之通也。惣兵衛上畑住、牢舍被仰付。

——敬公實錄

而シテ役ハ六年○寛永中ヲ以テ畢リ、役夫皆國ニ歸ル、

今年月日不知。○寛永六年。伊豆御普請役人歸國。

——敬公實錄

松平忠利忠房助役

松平氏○三河國。吉田城主。忠利○主殿頭。○初忠俊。忠房○五郎八。父子ガ、此役ニ服シ、伊豆ヨリ石材輸送ニ當リシコト左ノ如シ。

一、寛永六己巳年○紀元二三八九年。江戸御城石垣普請之時、忠利○松平。伊豆山より石を運ぶ。

——譜牒餘錄

忠利○松平。六年○寛永。江戸城惣廓普請あり。忠利○松平。家人をして人夫を役し、伊豆山より石をはこばせければ、七月十一日其家人等に呉服を賜ふ。

——寛政重修諸家譜

石輸送船奉行任命

其時ニ於ケル伊豆石材伐出ノ狀況、運送船數、運賃、役夫員數等ニ就キテ詳細ナル記錄ヲ見ザルヲ遺憾トス。

石垣構築御堀開鑿狀況

石垣構築御堀開鑿下命幕府石材支給

石輸送船奉行任命　白井右衞門○忠宗。・小笠原安藝○信盛。・小濱新太郎等ニ伊豆ヨリ石材ヲ輸送スル石船ノ奉行ヲ任命シタルモ亦是時ニアリ。寛永五年十月伊豆國產石材搬入ノ項參照

來年○寛永六年。江戸ノ城外曲輪石壁ヲ築カルベキニ依テ、是年○寛永五年。ヨリ向井右衞門○忠宗。小笠原安藝○信盛。・小濱新太郎等河口ノ番ヲ勤テ、石船往來ノ事ヲ改ム。

——東武實錄

石垣構築・御堀開鑿狀況　石垣構築・御堀開鑿助役ノ諸侯ニ對シテモ、前年○寛永五年。十一月十八日ニ下命アリ。

來年○寛永六年。江戸御普請從ニ三月朔日○寛永六年。相初ゆ。石垣を築、御堀をほりゆ、御役にゆ。石之儀を、於ニ江戸ニ可レ被ニ相渡ゆ間、可レ有ニ其心得ゆ。委細加藤遠江守○光直。安倍四郎五郎○正之。佐久間河內守○實勝。石河三右衞門○勝政。より可ニ申達ゆ。

十一月十八日○寛永五年(紀元二三八八年)。

永信○永井信濃守尙政。

仙臺中納言殿○伊達政宗。

佐竹右京大夫殿○義宣。

上杉彈正少弼殿○定勝。

南部信濃守殿○利直。

右ノ四人○伊達。佐竹。上杉。南部。ニ、同文書ヲ以テ別紙ニ遣ス。

——東武實錄

而シテ石垣構築及ビ御堀開鑿御手傳諸侯中助役狀況ニ就キテ、參考トナルベキ記錄ノ存スルモノヲ擧ゲレバ左ノ如シ。

酒讃○酒井讃岐守忠勝。

土大○土井大炊頭利勝。

酒雅○酒井雅樂頭忠世。

松平忠昌助役

松平忠昌○越前國福井城主。ノ助役。

伊豫守忠昌○松平。寛永六年己巳○紀元二三八九年。松平家譜十二月ト有リ。雉橋御門。○松平家譜。此四字ナシ。田安御門御普請手傳被ニ仰付。

——譜牒餘錄○松平家譜同。

役夫派遣

寛永五年戊辰○紀元二三八八年。

一、月日、江戸御城御普請御手傳被ニ蒙仰、右ニ付本多伊豆守○富正。杉田權之助○三正。ニ御普請惣奉行被ニ仰付。

一、十二月十二日○寛永五年(紀元二三八八年)。右同斷ニ付、杉田權之助○三正。小倉左馬助幷小奉行等江戸表ニ被ニ指遣之。

一、十二月廿八日○寛永五年。江戸御普請御手傳御用ニ付、江戸表ニ出立の者共。來正月十一日○寛永六年。ゟ十三日迄ニ

三組宛、人足共召連、可致出立旨、被仰出之。

寛永六年己巳（紀元二二八九年。）

一、正月五日（寛永六年。）田安御門御普請御手傳御用ニ付、本多伊豆守（富正。）江戸表ニ出立、爲御普請目付、秋田内藏丞（光勝。）も指遣ハ二付、左ノ通御直書を以、御法令被仰出之。

覺

一、公儀御普請油斷有間鋪事。

一、金銀入ハ事不レ苦ハ之間、御普請之手廻油斷有間敷ハ事。

一、伊豆守（本多富正。）申付ハ儀、少も違背申間敷ハ。權之助（杉田三正。）儀同前之事。

一、他所之ものといひと仕間敷、若手前より仕懸ハ者、徒類共に成敗可申付ハ。あひてゟ仕懸之義ま

けハはゞ、右同罪可申付ハ事。

一、才覺だていたし、伊豆守（本多富正。）權之助（杉田三正。）ニ申聞せず、御はた本衆と付合申間敷ハ。自然見廻申方ハ

共、兩人ハことはらずて參間敷事。

正月五日（寛永六年（紀元二二八九年）。）

（花押）

金銀入ハ事不レ苦ハ之間

宰相（花押）

金銀入用構無

「金銀入ハ事不レ苦ハ之間」ト云ヒ、助役諸侯ガ「御普請油斷」無ク、金銀ノ失費ヲ辭セザリシ一班ヲ察知スベシ、尋イデ、

一、正月八日（寛永六年。）田安御門御普請場ハ、公方樣（家光。）被レ爲成、御用掛之者共一同、御目見被仰付。

一、同月（寛永六年。）七日。江戸田安御門御普請御用ニ付、被指出ハ人足之内九人、同（寛永六年正月。）九日於近江國中

河内、雪頽ニ逢、壓死有レ之。

一、同月（寛永六年正月。）廿三日、田安御門御普請御用掛之者共ハ、左之通り御書被成。

一筆申遣ハ。然は去八日（寛永六年正月。）將軍樣（家光。）我等（忠昌。）御普請場ハ被爲成、御機嫌能何もハ被掛御詞ハ由、大慶不レ過レ之ハ。則爲御禮、年寄中迄、以書狀申上ハ。其元之儀、萬事伊豆守（本多富正。）權之助（杉田三正。）相談ニ

ゟ、入念可レ申ハ。謹言。

正月二十三日（寛永六年。）

宰相（花押）

筑治大膳との、牧野丹後守との、松原右衞門との、岩上左兵衞との、水谷織部との、本多主馬との、

堀多面との、野村權大夫との、秋田内藏丞との、武曾權右衞門との、小倉左馬之助との。

一、九月（日不詳（寛永六年。））田安御門御普請御手傳相濟ハニ付、本多伊豆守（富正。）於御城御暇被下、御馬時服拜領被仰付。（中略。）

ト、更ニ別記ニ曰、

伊豫守忠昌

一、寛永五年（紀元二二八八年。）田安御門石垣御普請御手傳被仰出、人夫三千五百人被遣處、正月十八日（寛永六年。）於江州中河内、八百人雪にうたれ死す。（中略。）

人夫三千五百

江戸中材木買上加藤肥後守材木ニ困ス

一、田安御門石垣御手傳之節、大石爲御引被成ニゟ、江戸中の材木を被召上敷渡し、其上を引申により、各別はか取り、人夫も少く懸りよし。加藤肥後守殿も御一所に御勤之處、同事に可致由、材木調ハ樣被申付ハへ共、御家へすき迄買上ハて材木無之、不及是非、人夫大勢懸りハへ共、はか取不申、自身采

伊達政宗助役

を取り、木遣を被致ゐと也。依之人夫あやまち致し、死人も在之、町屋も多く破損致ゐ。然所此方御場所は、七八分も出來申に、肥後殿場所は、漸く石一かゞ通りならべ申體にゐ處、惣而出來申處ハ、遲速も無之由、是ハ此方にてハ、築立ゐて、石のつらを作りゐに付、肥後殿にては、一つ宛石面を作り築立ゐ由。かやう之事にて肥後殿身上御潰之節、澁谷與五左衞門も肥後殿に相勤ゐ者故與五左衞門に被仰付、肥後は普請功者之役人可在ゐ間、其方存次第四五人呼よせ申やうにとの事にて、野田、笹川甲斐、中村被召出ゐよし。別井も此類か。

——侯爵松平家〇舊福井藩。回答

右に據レバ松平忠昌此役出ス處ノ人夫三千五百人ニシテ中正月十八日江州中河内ニ於テ雪崩ニ打タレ死者八百人ト有レモ、既掲本記中「同月〇寛永六年正月。七日、江戸田安御門御普請御用ニ付、被指出ゐ人足之内九人、同〇寛永六年正月。九日於近江國中河内、雪頽ニ逢、壓死有之」日附前後アリ、同事カ別事カ、眞否亦詳ナラズ。田安御門石垣御手傳之節、大石を爲御引被成ニか、江戸中の材木を被召上敷渡し」ト云ヒ、江戸中ノ材木ヲ買締メ使用シタルヲ以テ、同樣工事ヲ擔當セシ加藤肥後守ハ、買入ルベキ材木無キニ困セリト云ヘルハ、江戸材木商ニ關スル傍證トスベシ。

伊達氏〇奥國仙臺城主。助役、是役幕府ノ閣臣ガ、寛永五年〇紀元二六八八年。三十一月十八日ヲ以テ助役ヲ伊達政宗ニ命ジタルコトハ、已ニ之ヲ記ス。然ルニ政宗〇伊達。ハ是ヨリ先九月廿四日〇寛永五年。江戸ニ在リテ課役ノ風説ヲ耳ニシ、書ヲ在國老臣茂庭良綱・奥山大學ニ與ヘテ、私ニ之ガ準備ヲナサシム。

一、書申遣ゐ。爰元江戸ニ來年〇寛永六年。石垣之御普請有之事にゐ。手前を元和六年〇紀元二六八〇年。ニ申請ゐる御普請仕ゐ。漸成九年にゐ歟と覺ゐ。來年〇寛永六年。を申請ゐる迄可仕ゐ處ニ、可被仰付樣子慥聞屆ゐ。石ヲ從上樣被相出、手傳計ヲ可被仰付ゐ。綱棒其外手傳ニ可入道具共、内々用意、萬事御普請之支度、親類衆、一家一族衆、諸奉公人に、唯今より慥可申觸ゐ。恐々謹言。

九月廿四日〇寛永五年〇紀元二六八八年。政宗〇伊達。御書判

茂庭周防殿〇良綱。

奥山大學殿

——伊達治家記錄

右ニ據レバ構築・開鑿等ノ助役諸侯ハ人夫ヲ出シ工事ニ從事スルモ、是ニ用フル處ノ石材ハ幕府ノ供給スル處タリシヿ、「石ヲ從上樣被相出、手傳計ヲ可被仰付ゐ」ト云ヘルニ推知スベク、其助役ガ既ニ專ラ構築ニアリシヲ察スルヤ政宗〇伊達。ハ「綱棒其外手傳ニ可入道具共、内々用意、万事御普請之支度」ニ努メタリキ。既ニシテ政宗〇伊達。國ニ就クヤ、十一月十六日〇寛永五年。即チ發令ノ前二日、嚮ニ委囑シ置キタル幕吏加々爪忠澄〇民部少輔。ヨリ、助役ノ内定ヲ通ジ來リ、同時ニ在府ノ嗣子忠宗〇伊達。ヨリモ同ク報ジ來ル所有リ。書同月二十日〇寛永五年。ヲ以テ仙臺〇伊達。ニ達ス。政宗〇伊達。即日〇寛永五年十一月廿日。之ニ復書スルト同時ニ、鱈ヲ前將軍秀忠ニ獻ジ、之ガ披露ヲ幕吏内藤正重ニ賴ミ併セテ助役ノ事ヲ言フ。事伊達治家記錄ニ詳悉ス。

十一月廿日丁丑〇寛永五年〇紀元二六八八年。巳刻、加々爪民部少輔殿〇忠澄。ヨリ去ル十六日〇寛永五年十一月。ノ書到來ス。來年〇寛永六年。江戸石壁御普請ノ義公〇伊達政宗。御下向前内々民部少輔殿〇忠澄。ヘ仰置カルノ處ニ、其ニ御内意書付ケ來ル。即チ御返書進セラル。左ニ載ス。〇民部少輔〇加々爪忠澄。殿書狀不傳。

今月〇寛永五年十一月。十六日之御狀、今月廿日〇寛永五年十一月。巳之刻令披見ゐ。内々申置ゐ御普請之義に付ゐ、且書付預ゐ。萬々得其意ニ忝ゐ。其元罷立ゐ以前ニ用意申付ゐ通、

棒綱等手傳用具

一、石持棒。
一、カシノ木テコ木。
一、カナクサリ。
一、ケンヨウ。
一、ツルノハシ。
一、スリ木。
一、シキ木。
一、ヲツナ。
一、カナテコ。
一、ツヽサヒ。

此通之分を、澤山ニ用意申付罷下ゆ。點ヲ懸申通を、國ヨリ正月○寛永六年。中ニ皆爲ニ相上一可レ申ゆ間。少モ油斷無ニ御座一ゆ。可ニ御心安一ゆ。萬々期後音ゆ。恐惶謹言。

霜廿日○寛永五年。　　松○伊達。陸奥守政宗御書判。

加　民部少輔樣○加々爪忠澄。御報

御普請ノ義御内意有ルニ就テ、嗣君ヨリ御飛脚ヲ以テ御書差上ケラル。因テ御返書進セラル。左ニ載ス。

加々民部少○加々爪忠澄。内外記殿○内藤正重。ヨリ、御普請之義ニ付ゐ、御内儀承ゆ。依レ之早々飛脚令ニ祝着一ゆ。御普請道具、其元○江戸。ヨリ下向ノ十日モ以前ニ申付ゆ通、

一、石持棒。
一、カシノ木ノテコ木。
一、カナクサリ。
一、ケンヨウ。
一、ツルノハシ。
一、スリ木。
一、シキ木。
一、ヲツナ。
一、カナテコ。
一、ツヽサヒ。

此通早疾ニ申付ゆ條、可ニ御心安一由、外記○内藤正重。殿・民部○加々爪忠澄。殿へ、能々可レ申ゆ。右之内、スリ木ハ

先無用之由、得ニ其意一ゆ。御普請下奉行之面々も大形申付ゆ。如何樣之御普請被ニ仰付一ゆ共、手ツカヒ申事有間敷ゆ。其段可レ申ゆ。恐々謹言。

追而外記○内藤正重。殿ヨリノ御狀ハ、相返ゆ。以上。

霜月廿日○寛永五年。　　松○伊達。越前守殿○忠宗。

大御所○秀忠。ヘ鱈敷不知。御献上、因テ内藤外記殿○正重。ヘ御書ヲ以テ御披露賴マセラル旨、仰進セラル。來年○寛永六年。石壁御普請ニ御入用ノ道具等ヲモ用意シ玉フノ義、仰進セラル。御書左ニ載ス。

急度申入ゆ。鱈到來仕ゆ。相國樣○秀忠。ハ進上申ゆ。各御相談御披露賴入ゆ。當年○寛永五年。ヲ暖氣故、于レ今一切取不レ申ゆ。併追々進上可レ仕ゆ。我等事、去十二日○寛永五年十一月。下着、可ニ御心安一ゆ。十六日○寛永五年十二月。ニ彼屋敷ハ罷移ゆ。如形作事出來、滿足仕ゆ。然ヲ來年○寛永六年。御普請可レ有ニ御座一之由、内々承ニ付ゐ、石垣之諸道具、石持棒、シキ木、カシノキテコ、カナテコ、ツナ、スリ木、ケンヨウ、ツヽサヒ、ツルノハシ、カナクサリ。

右之通、其元罷下十日以前ニ、悉用意申付、罷下ゆ。右之内、此方ヨリ爲レ上申道具モ御座ゆ。於ニ樣子一ヲ、可ニ御心安一ゆ。恐惶謹言。

追ゐ相國樣○秀忠。彌御機嫌能、近日忍○武藏國北埼玉郡。筋ハ御鷹野御出被レ成之由、珍重ゆ。尙退ゐ可ニ申伸一ゆ。以上。

霜月廿日○寛永五年。　　松平○伊達。陸奥守政宗御書判。

政宗○伊達。御書判。

御知行高半役

内藤外記様○正重。人々御中

——伊達治家記錄

然リ而シテ幕府ヨリ、十一月十八日○寛永五年。ヲ以テ發シタル助役奉書、同年○寛永五年。十二月二日仙臺ニ達シ、三日○寛永五年十二年。政宗之ガ請書ヲ出ス。同時ニ幕府ノ普請奉行ヘモ返書スル所有リ。

十二月二日○寛永五年。厩橋侍從忠世朝臣○酒井。佐倉侍從利勝朝臣○土井。酒井讃岐守殿○忠勝。永井信濃守殿○尚政。ヨリ、去月○寛永五年十一月。十八日ノ奉書幷ニ御普請奉行加藤遠江守殿○光直。阿部四郎五郎殿○正久。佐久間河内守殿○實勝。石河三右衛門殿○勝政。連署ノ書狀相添ヘ到來ス。來月○寛永六年。江戸御城石垣堀御普請、公○政宗。ヘ仰付ラル。江戸ニ北御方・嗣君○忠宗。相詰ラルニ就テ、御知行高半役ニ仰付ラル。右奉書左ニ載ス。御普請奉行連署ノ書狀不レ得。○是中ノ書。但記東武實錄ニ同ジケレバ略ス。三日庚寅○寛永五年十二月。到着ノ奉書ノ御請、今日○寛永五年十二月三日。差上ラル。左ニ載ス。

去月○寛永五年十二月。十八日之御折紙、昨日二日○寛永五年十二月。參着、披見い。來年○寛永六年。江戸之御普請被仰付之旨、殊御普請之樣子、具被仰越い。從三月朔日。○寛永六年。始申之旨、奉得其意い。江戸ニ妻子指置申ニ付ゐ、知行高半役ニ被仰付之由、從御普請御奉行衆申來い。御○マヽ。顯味之所、忝御事ニい。先以御禮各奉ノ賴い。恐々謹言。

極月三日○寛永五年。

酒井雅樂頭殿○忠世。

土井大炊頭殿○利勝。

酒井讃岐守殿○忠勝。

松平○伊達。陸奥守政宗御書判。

永井信濃守殿○尚政。御報

從來年○寛永六年。三月朔日、江戸石垣築申事、幷堀御普請被仰付之由、御書面之通、奉得其意い。妻子在江戸仕ニ付ゐ、知行高半役ニ被仰付之由、忝御事ニい。下奉行先爲御上可レ申之旨、相心得存い。近日中爲上可レ申い。不レ存油斷い。恐々謹言。

極月三日○寛永五年。

安部四郎五郎殿○正之。

佐久間河内守殿○實勝。

石河三右衛門殿○勝政。

加藤遠江守殿○光直。御報

——伊達治家記錄

是役伊達氏ハ、江戸ニ妻子ヲ指置クノ故ヲ以テ助役ハ知行高半役ニ輕減セラレタル事上記文書載スル所ノ如シト雖モ、事實ハ其負擔知行高半役ニ止マラザリシハ、言フ迄モナク、「度々增御普請共相重リ、御本役ヨリ上ニ相當リ」タリト云フ。

○晦日壬申○寛永六年八月。御書付ヲ以テ、石母田大膳宗賴、石田織部與純ニ仰付ラル義アリ。其趣、當年○寛永六年。江戸ノ御普請內々半役ニ仰付ラルノ由、御普請奉行衆ヨリ最前申來ルノ所ニ、度々增御普請共相重リ、御本役ヨリ上ヘニ相當ル。依テ御藏入給人分マテ一同ニ相積リ、京都・江戸ノ八千兩ニ餘ル御借金共、連々返辨シ玉フ樣ニ、役等ノ義申付ベシ、上方衆ハ大形二年ニ一度充御普請仰付ラル。公○伊達政宗。ハ九年トテ仰付ラレタリ。此段各分別スベキノ由、申渡スベキ旨、著サル。

度々增普請ニテ本役以上トナル

京都江戸借財八千兩

——伊達治家記錄

六年○寛永。紀元二二八九年。一月廿六日。政宗○伊達。書ヲ土井利勝及内藤正重ニ贈リテ、工事分擔ノ箇所ニ關シ、屋敷ニ近キ便宜ノ處ヲ擇フ可シトノ優命有リタルヲ謝ス。伊達治家記錄ニ

○廿六日壬子○寛永六年二月。今度江戸御城廻リ所々石壁等ノ御普請御町場相渡サレ、殊ニ公ノ御屋敷近所御勝手能所ト仰出サルニ就テ、御禮トシテ、佐倉侍從利勝朝臣○土井。ヘ御書進セラル。左ニ載ス。○利勝朝臣ヘノ御書ハ不レ傳。

態申入い。御普請所被二相渡一之由、殊更屋敷近所勝手能所と被二仰出一之由、外聞實義過分至極い。依レ之先爲御禮大炊殿○土井利勝。へ書狀進い。慥ニ御屆可レ預い。三月朝日寛永六年。ヨリ御普請之義ニい得共名代之者人足以下、近日中爲二相上一可レ申いと存い。万事期二後音一い。恐惶謹言。

松平陸奥守　政宗御書判

二月廿六日○寛永六年（紀元二二八九年）。

内藤外記様○正重。人々御中

而シテ政宗○伊達。ハ、伊達定宗ヲ名代トシ、茂庭良綱ヲ之ニ副トシ、一月○寛永六年。ヲ以テ出府セシメ、其外之ニ關スル役人ヲ定メ、又定宗等ノ出府ニ際シ、閣老普請奉行其他ニ贈遺スル所有リタリ。○泉城寫第一。伊達治家記錄。參照。

而シテ是役政宗ノ受持チタル箇所ハ、芝口○市内麹町區。日比谷○市内麹町區。兩門ノ升形、山ノ手ノ堀石垣、大橋○市内麹町區。四股去除、山下橋○市内麹町區。附近ノ石垣等ナリキ。○泉城譜。伊達治家記錄。參照。○今常盤橋。

上杉定勝○出羽國米澤城主。助役　是時上杉定勝ノ御手傳モ亦構築ニ在リ、則チ役夫ヲ出シ江戸ニ於テ石材ノ供給ヲ受ケテ石垣構築ニ從事セシコト、上杉年譜○定勝譜。載スル所左ノ書翰ニ之ヲ窺フベシ。

上杉定勝助役

貴札披見、仍來年○寛永六年。石垣堀御普請被二仰付一い由、相心得奉存い。石之儀ゑ、於二其御地一。○江戸。可二相渡一之由、奉二得其意一い。猶重而可レ得二御意一い。恐々謹言。

十二月四日○寛永五年。

上杉彈正大弼定勝

酒井雅樂頭殿○忠世。
土井大炊頭殿○利勝。
酒井讃岐守殿○忠勝。
永井信濃守殿○尚政。

先月○寛永五年十一月。廿八日之御狀令二披見一い。然ゑ來年○寛永六年。三月朝日ヨリ、其許○江戸。石垣御隍御普請可レ被二仰付一由、奉二得其意一い。大石浪石ゑ、於二其地一○江戸。可レ被相渡由、人數之儀、是又相心得存い。下奉行之儀モ可二申付一い。可レ爲二差登一い。猶重而可レ得二御意一い。恐惶謹言。

十二月四日○寛永五年。

上杉彈正大弼定勝

加藤遠江守殿○光寛。
石河三右衞門殿○勝政。
佐久間河内守殿○實勝。

六年○寛永。二月廿七日、定勝普請惣奉行黑金泰忠以下諸役人ヲ任命シテ出府セシメ、仍閣老及普請奉行ニ書ヲ呈シ、又普請場ノ諸士ニ條令ヲ出ス。

——上杉年譜○定勝譜。

二月二十七日○寛永六年。今年江城ノ隍壘御普請御手傳ニ付、惣監黑金上野泰忠、及ヒ諸役吏人夫等ヲ江府ニ遣サ

役吏人夫派遣

ル。仍老中及ヒ御普請奉行ヘ書札ヲ呈シ玉フ。其御書ニ曰、

其御地ニ。江御普請就被仰付、彼者相副、人足爲相登い。可然様被仰付可被下い。隨ては御手前も御普請被成い由、御太儀存い。猶期後音い付、不詳い。恐惶謹言。

二月廿七日○寛永六年。　上杉彈正大弼定勝

土井大炊頭様　人々御中

酒井雅樂頭忠世ヘモ御書ヲ遣サル。御文詞同斷。

其御地ニ。江御普請就被仰付人足爲相登い。萬端可然様御差圖いるゝ、可被仰付い。賴存い。委細黑金上野介○奉忠。可得御意い條、不能細書い。恐々謹言。

二月廿七日○寛永六年。　上杉彈正大弼定勝

佐久間河内守殿○定勝。

安部四郎五郎殿○正之。

石河三右衞門殿○勝政。

加藤遠江守殿○光直。

人々御中

御普請場ノ諸士ニ命令アリ、其條書ニ曰、

一、公儀御法度之旨相聞、少モ背申間敷い事。

一、御普請中如何樣成儀有之共申分仕間鋪い事。

一、小屋ニ於テモ、大酒、賭ノ遊、堅令停止い事。

一、徒黨タテ、贔負偏頗致間鋪い事。

一、他家之者無用出入申ヘカラスい事。

右之旨可相聞者也。

寛永六年二月廿七日○紀元二二八九年。

而シテ工事ハ二月廿五日○寛永六年。ヲ以テ着手シ、八月○寛永六年。ニハ功成リシ者ノ如シ。

——上杉年譜○定勝譜。

相馬義胤○陸奥國。中村城主。○大膳亮。助役ハ、東武實錄記ス所ノ如シ。

大膳亮義胤公○相馬。御代

寛永六巳年○紀元二二八九年。正月、江戸西丸石垣御手傳、其節又六万石ノ訟上達、自今六万石ノ高被仰付い間、今度ノ御普請本役高ニテ可被相勤旨、御達有之、六萬石之御知行ニ定リ、右御普請出人六百人。

——子爵相馬家回答

課役大名ノ部署及ビ幕府諸奉行ノ任命等ハ江城年錄其他ニ詳カナリ。

正月三日○寛永六年紀元二二八九年。江戸御城惣外曲輪御堀石垣、諸大名ニ被仰付。右之石垣坪都合四萬四千五百三拾三坪二合八勺三才。

御普請組之次第

一組　酒井雅樂頭○忠世。　酒井阿波守○忠行。　西尾右京○忠昭。

細川玄蕃頭○興長。　眞田伊豆守○信之。　眞田河内守○信吉。

眞田内記（大内記信政。）

〆二十萬八千三百石

一組　土井大炊頭（利勝。）　堀美作守（親良。）　佐久間日向守（安長。）

佐久間大膳（大膳亮勝之。）　本多大隅（大隅守忠純。）　松平五郎（五郎八忠房。）

松平采女（采女正忠利。）　淺野采女（采女正長重。）

〆二十二萬八千八百石

一組　酒井讃岐守（忠勝。）　安藤右京（右京進重長。）　稲葉丹波守（正勝。）

井伊兵部少輔（直勝。）　酒井山城守（重澄。）　内藤伊賀守（忠重。）

新庄駿河守（直好。）

〆十七萬四千四百石

一組　永井信濃守（尚政。）　土屋民部少輔（利直。）　秋元但馬守（泰朝。）

水野左近（忠善。）　井上河内守（正利。）　青山大藏（大藏少輔幸成。）

内藤百助（正勝。）　京極主膳（高通正。）　小笠原左衛門佐（政信。）

〆十二萬六千石

一組　松平式部大輔（榊原忠次。）　水谷伊勢守（勝隆。）　西郷若狭守（正員。）

秋田河内守（俊季。）　牧野右馬允（忠成。）　松平大膳（大膳亮忠重。）

日根野織部（織部正吉明。）　皆川志摩守（隆庸。）

〆十六萬千九百五十石

一組　奥平美作守（忠昌。）　内藤左馬助（政長。）　大關左衛門（右衛門高增。）

那須美濃守（資長。）　土方彦三郎（雄氏。）　大久保加賀守（忠仟。）

相馬長門守（大膳亮義鳳歟。）

〆二十四萬三千二百十石

寄合組　仙臺中納言（伊達政宗。）　上杉彈正（彈正少弼定勝。）　鳥居伊賀守（忠恒。）

佐竹右京大夫（義宣。）　岩城忠次郎（宣隆歟。）　仙千代殿（松平光長。）

酒井宮内少輔（忠勝。）　酒井長門守（忠重。）　酒井右近（直次。）

堀丹後守（直寄。）　松平伊豫守（忠昌。）　同出羽守（松平直政。）

同大和守（松平直基。）　同土佐守（松平直良。）　本多飛驒守（成重。）

水戸中納言（德川頼房。）　加藤肥後守（忠廣。）　淺野但馬守（長晟。）

溝口出雲守（宣直。）　溝口伊豆守（政一。）　南部信濃守（利直。）

戸澤右京（政盛。）　六郷兵庫頭（政乘。）

以上

江戸石奉行（かり役。）　久永源兵衛（重知。）　森川金右衛門（氏信。）　駒井二郎左衛門（昌保。）

池田圖書（政長。）　小俣吉左衛門（政利。）

木石奉行。　石野六左衛門（政利。）

伊豆石奉行

伊豆船奉行

本目栗石奉行

安房上總栗石奉行

本役・半役

中島長三郎○盛利。　天野麥右衛門○重勝。

伊豆ノ石奉行役。かり

長崎半左衛門○元通。　佐藤勘右衛門○繼成。

伊豆ノ船奉行　向井將監○忠勝。　中澤主税○主税助吉政。

本目ノ栗石奉行　山田市兵衛○直勝。　石川八左衛門○政次。

安房上總ノ栗石奉行　前田五左衛門○定良。　間宮虎之助○長澄。

一、三河大名之内本役八人、半役四人。

一、遠州衆之内本役一人、半役一人。

一、伊勢衆之内本役一人、半役壹人。

一、播磨衆備後衆本役也。

一、五幾内衆ハ半役。

一、近江衆本役。

一、美濃衆本役。

又本役之分

一、六拾一萬九千五百石　尾張大納言殿○義直。　小濱右京○守隆。　石川與次右衛門○重正。

内　十萬石は堤分ニ引。但、二條御普請先例也。壹萬六千石は木曾定役ニ引。

一、五拾五萬五千石　紀伊大納言殿○頼宣。

内　十萬石は引。但、二條御普請之先例也。

一、五拾五萬石　駿河大納言殿○忠長。

内　十萬石は尾州紀州、之例に而御免。

本高三百四拾二萬四千三百九拾六石六斗。

此内　三拾萬九千四百五十石ハ半役ニ引。
壹萬千石ハ御番役ニ引。
參拾參萬參千石ハ色々ニ引。

——江城年錄

正月三日○寛永六年紀元二二八九年。命ニ諸大小名ニ、令ニ江戸城外郭築ニ石壁ニ、凡一千七百五十間一萬三十坪八方(分歟)也。

——寛明日記○萬年記同。

卽チ課役大小名中、酒井忠世外七人ヲ一組、土井利勝外七人ヲ一組、酒井忠勝外六人ヲ一組、永井尙政外八人ヲ一組、榊原忠次外七人ヲ一組、奥平忠昌外六人ヲ一組トシ、伊達政宗外廿二人ヲ寄合組トシ、阿部正之・石河勝政・加藤光直・佐久間實勝○家乘略ニ據レバ、阿部、石河ハ秀忠ヨリノ奉行、加藤、佐久間ハ家光ヨリノ奉行ナル如シ。奉行タルノ外、石奉行・木石奉行・伊豆ノ石奉行・同船奉行・本目○武藏國久良岐郡本牧。ノ栗石奉行・安房上總ノ栗石奉行等ヲモ定メタルヲ見ル可シ。而シテ其工事ハ石垣ノ修築及堀浚ニシテ、修築石垣延長千七百五十間、坪數四萬四千五百三十三坪二合八勺三才ナリシコト江城年錄、寛明日記、萬年記等ノ記事ヲ以テ之ヲ察ス可シ。

是月○寛永六年四月。去年命ぜられし諸大名、この月より人夫を出し、江戸城廓石垣等をきづく事七月に至る。

是春○寛永六年。命ヲ奉テ諸大名江戸總曲輪ノ石壁ヲ築ク。

——大猷院殿御實紀卷十三。

同○寛永六年六月。二月、西ノ丸新山里ノ御露路山本道勺ニ仰付ラル。奉行永井信濃守尚政是ヲ勤ム。同所ノ石壇長サ十八間。手傳備前宰相忠雄是ヲ築ク。持筒ノ者百人其外數百人ノ人夫ヲ以テ此日午ノ尅ニ事成ル。藤堂高虎御手水鉢ヲ獻ス。京師四條古田織部正露路ニ是アル石ナリ。京都古田織部正屋敷今ハ高虎ガ宅地トナル故也。江戸古田織部正カ古宅今坂部三十郎是ニ住居ス。是ニ依テ古田カ露路ノ飛石ヲ取テ三十郎西ノ丸ニ是ヲ獻ズ。

——東武實錄

是月ヨリ西ノ丸所々ノ舛形石壁ヲ築ク。大手ノ舛形ハ酒井雅樂頭忠世御玄關前ノ石垣ハ土井大炊頭利勝吹上口及ヒ山里ノ舛形ハ永井信濃守尚政、御宮下ノ舛形ハ稲葉丹後守正勝、月見ノ御櫓臺御重御門ノ舛形ハ井上河内守正利等手傳トシテ是ヲ築ク。此年其事成ル。

——東武實錄

二日○寛永六年六月。永井信濃守尚政仰を奉りて、西城的場曲輪及び山里口の石垣普請を助く、又山里の御茶室の露地を改造せらる。尚政奉行し、松平宮内少輔忠雄は助役す。山本道勺に其事つかさどらしめ、持筒組百人、其他數百人をあつめ經營す。

——大猷院殿御實紀卷十三。

是年○寛永六年。江戸總曲輪ノ堀石壁ノ普請諸大名是ヲ勤ム。芝口日比谷口兩所御門ノ舛形石垣松平陸奥守正宗是ヲ築ク。

——東武實錄

寛永六年己巳　月　日

命を奉りて諸大名總曲輪の堀石垣を築く、芝口、日比谷兩所御門舛形石垣、松平陸奥守正宗之を築くとあり。蠹餘一得第四卷。

——日本財政經濟史料第四卷。

府内治安維持ノ爲辻番設置

辻番設置事蹟

寛永六年己巳三月○紀元二二八九年。去年○寛永五年(紀元二二八八年)以來、府内街巷路人ヲ刄傷スル者多シ。乃チ命シテ辻番所ヲ設ケテ之ヲ取締ラシメ、後增置スル所有リ。大猷院殿御實紀。玉露叢。伊藤姓記錄。○寛永日記。日本財政經濟史料。國字分類雜記。東武實錄。憲教類典。

——日本財政經濟史料第四卷。

辻番設置

三月○寛永六年○中略。

去年ヨリ當年ニ至テ、江戸辻々ニ於テ、往來ノ者ヲ故ナク殺害ス。是ニ依テ此春江戸中辻々ニ番所ヲ建テ、是ヲ守ラシム。是ヨリ後猥リニ人ヲ殺ス事ナシ。

——寛永日記

寛永六年己巳三月　日

去年より江戸辻々にて、往來の者を故なく殺害す。依之此春江戸中辻々に番所を建て守らしむ。此後猥りに人を殺さず。今年より武家方辻番を置く、端々に於て辻斬ありし故とぞ。寛永日記增補三四五、武江年表一

——日本財政經濟史料第四卷

辻番

寛永五戊辰年、始めて江戸武家屋敷小路辻番所。寛明日記万年記まハ、寛永六己巳年春とぞ。

慶迎略記まハ、甲斐庄喜右衞門火事ニ付て辻番所出來とあり、玉露叢まハ大小名之小路ゝゝまで辻番所、其外町中端ゝまで木戸を仰せ付らるゝと記せ。

万治二己亥年三月、辻番所之控を定らる。山本日記。

寛文三癸卯年三月、辻番所の控を示さる。高天日錄。

正保五乙未年四月二十八日、万石以上以下辻番所ゟ條目を渡さる。年錄。

享保八癸卯年二月、江戸中辻番所惣請負之もの廿人ニ相渡、江戸とゟ本所深川まで辻番數六百七十六ケ所、此度改めて請負となる。累年錄。

享保十二丁未年二月。

武士方組合辻番所只今迄之受負相止い。前々之通組合相對ゟて受負、辻番人可被申付い。年番月番之義ハ、組合之申合次第可爲、唯今迄之通い。向後組合之内頭取所壹人可相定い。但頭取之面々ハ年番月番仕ゟ不及候。御觸留。

寶暦十二壬午年十二月廿日、

辻番所廻り場之内、異變有之い節、取扱之義、唯今までハ屋敷雨ふきとゟ内軒下まゝハ門地覆きハ幷屋敷長屋出格子ゟと異變有之或ハ屋敷前駒寄矢來之内ニ捨物等有之候節ハ、屋敷一人ゟて取扱來い得共、以來ハ右之分も辻番廻り場へ附取扱い事。令條錄。

——國字分類雜記卷三十九

六月廿日○寛永六年。

江城年錄

一、當巳年春の半ゟり、江戸中端々にて白晝にも人を切申事幾むくといふ數をしらず。日暮方ゟは町中ニても人を切、其體さらに物とりゟきるゟもならに。大形切捨也。老若をいもに。是も千人切といふものゟていい哉、後ニも御城之内北之丸之御門先ゟても切申い。諸人往來待合大勢ゟて通り申い。依之御法度書出云々。

東武實錄。江城年錄。令條記。寛明事跡錄同。

一、仰出サル、趣

覺

○德川禁令考引書公儀御法度ニハ「人を切候者有之時之覺」ノ前書アリ。

人殘切い者有之ゝ、其近き屋敷之もの出合、何方迄も追懸留置、刀脇差を取、子細を相尋、奉行所へ注進をべし。若刀脇差を不出をまひいもゝ、うち殺いをも不苦敷。右之もの追かけい時、其さき〳〵の屋敷よりも急度出合、可留置者也。然も晝夜ゟよらに、屋敷之前ゟて人を切い事不知ゟおゐては、其屋敷の番の者可爲油斷者也。

寛永六年六月廿日　　秋山修理亮

此兩人被申渡　　宮城甚右衞門

御斷

——寛永日記○德川禁令考引書公儀御法度略同。

不知年月日

江戸中辻番所從公儀被仰付所々、幷手形差出い名寄

甲賀町　百人組坂部三十郎組より手形出レ之。

下谷　青山丹後守組より手形出レ之。
高井村　天澤寺ゟ。
淺草寺町　青松院、龍王寺ゟ。行安寺、圓福寺
田畑村　天澤寺ゟ。
本郷追分　岡野權左衛門組ゟ。
柏木村　天澤寺ゟ。
駒込　天澤寺ゟ。
御藥園　池田常陸ゟ。
三田寺町　隨應寺ゟ。
傳通院三ケ所　當院納所ニ而。

寛永六己巳年六月廿日

覺

人を切い者有ゝ之ゝ、其屋敷之者出合、○中略。上文ニ同シ。
已○寛永六年。六月廿日

寛永十癸酉年六月廿九日

覺

頃日辻番油斷ニ相見ゆい。端々ニ而人を切い間、辻番之儀、入念急度可ゝ被申付ゝい。已來御歩行目付衆、

毎月まゝし、惡敷いゝゝ可ゝ致言上ニ之旨い間、晝夜無ニ油斷一可ニ申付一事。　酉六月廿九日

湯島天神切通　當社別當より。
增上寺切通　當寺中月光院ゟ。
千駄木原　東漸寺ゟ。
今里村　伊奈半十郎手代ゟ。
兩國橋　同斷。
小塚原　同斷。
元吉祥寺　野村彦太夫手代ゟ。
本所廿六ケ所　同斷。
江戸橋　町年寄三人より。

右辻番一ケ所之人數六人ツヽ、一人ニ付給分扶持共ニ金貳兩ツヽ、外爲ニ油料一金壹兩、合金拾參兩ツヽ、也。此金子受取い刻、手形寺社奉行、町奉行、御勘定奉行、御徒目付裏判之事。

——憲教類典

西六月廿九日

此月○寛永六年三月。○中略。去年以來、府内街巷に於てみだりに往還の路人を刄傷する者多し。因て毎處に番所を置て守らしむ。これ辻番の起本なり。

廿日○寛永六年六月。この春より道路にてみたりに往還の路人を殺害する事若干なり。其さま盜賊のものを侵掠する類にもあらず。近日郭内北丸の門前にても路人を斬りし者あり。よて嚴重に制令を下さる。其令は人を殺カ殘

害するものあらば、近隣の邸宅よりもはせ參り、何地迄も追かけとらへをき、兩刀を奪ひ、子細を糺問し、奉行廳に注進すべし、もし刀脇指を渡すまじといなむものは、うち殺すともくるしからず、其者追かくる時は、近邊の邸宅よりも人を出しめてとらふべし。もし晝夜となく宅邊にて人を害する事をしらさらば、其邸宅の番の者の怠慢たるべしとなり。

廿九日〇寛永十年六月〇中略。書院番池田帶刀長賢・朽木民部少輔稙綱二人は、稲垣若狭守重太と共に、頃日辻番の事つかさとるべしと命せらる。けふ命せらるゝは、弓矢鳥銃人怠慢のさましるく、僻地にて人を刄傷するものあり、辻番人心いるへき旨きびしく命ずべし。この後歩行目付毎月巡行せしめ、もし怠慢の所爲あらば、聞えあぐべきにより、晝夜おこたらざるやう曉諭すべしとなり。

——大猷院殿御實紀

高割辻番

寛永年中に、江戸中の大小名の小路に辻番、其外町中端々迄巷門を被仰付。

——玉露叢

寛永六年〇紀元二千二百八九年。

此年始て江戸武家屋敷小路番所置。

——泰平年表

寛永六年己巳

今年より武家かた辻番を置る。端々に於て辻斬ありし故とぞ。

寛永十三年丙子

高割辻番始る。或は五年ともいふ。

——武江年表

一、高割辻番は何頃ヨリ始リしや哉。

答　高割辻番所ハ、寛永十二年ニ初テ大小名共ニ小路々々ニ辻番所ヲ建テ、其外町中端々木戸ヲ拵ヘ、番人差置へき旨被仰出しゆ事、前撰集ニ見エタリ。定テ萬石以下ノ分ハ、此節諸懸高割ニ成ゆ事ト被存ゆ。

——瀬田問答

〔附記〕木戸及自身番

御目付支配

一、江戸中辻番所。但、武家之屋敷辻番廻り場、寺社並町屋敷之儀は除ゆ。

——柳營秘鑑

六年〇寛永。の春令して辻々は番所を置、町々はハ木戸門を設けしめ以て盜賊に備へらる。正保二年六月に江戸外端々未ニ辻番の設けなきは之を設けしめら。

東武實錄に去年寛永五年。より當年は至て江戸辻々に於て往來の者を故なく殺害せ。是は依て此春江戸辻々は番所を建て是を守らしむ。玉露叢神田久右衛門藪記等之を十二年に係け且町々に木戸を設けしも同時の事なりとす。今之に從ふ。元文元年五月の調に武家小路辻番所の數八千八百七十一ヶ所あり、一說に九百三十ヶ所ありとも云り。嘉永六年の調に町中木戸番の數八千七十四ヶ所自身番屋八千十六ヶ所ありと云り。按に宮衛令に凡京路分街立舗衛府持時行夜々鼓聲巡禁行者曉鼓聲動聽行者と町木戸も夜中は閉置ものなれは令の制に近きものなり。されど毎町に木戸を設くることは武家の制なり。故に京都の町々には木戸あることなし。

——東京地志料

寛永七年庚午、從ニ十月江戸辻番上り始。

——伊藤姓記錄

〔附記〕木戸及自身番

木戸及自身番ノ設置ハ、辻番ト同時ナルヤ否ヤヲ知ラズ。一話一言、

寛永年中、江戸中の大小名の小路々々に辻番、其外町中にて巷門を仰付らる。

ト云ヘハ、辻番ト同時ニ市街ニ木戸ノ設有リタル者ニ似タリ。果シテ然ラハ自身番亦同シ頃ノ設置ニ係ル

者ナル可シ。比田氏諸留○古事類苑收。「八拾五年以前寛永十一甲戌年七月、大猷院様○德川家光京都より大坂に御下向刻、○中略。御上洛之日より大坂町中へ自身番仕ゆ」ト見エ、大坂式目○古事類苑收。

自身番之事

一、惣年寄并所之年寄、如有來、自身番可致用捨事。

一、老人幼少之もの名代可爲赦免、并後家勿論之事。

一、醫師其外法體之輩可爲名代、但其身覺悟次第自身も可致事。

一、居住之外他町に家有之ば、其家の名代可致自身事。

一、當番之者病人并他行之輩、勿論可爲名代事。

右毎年極月朔日ゟ正月十五日迄之儀ニゆ間、此書付之外、名代可爲無用、但當番之刻、急度於有之は、年寄五人組に相斷、親子兄弟其外親類之間、又は手代にても可差置、此旨令違背者、可爲或過料或籠舍者也。

慶安元年子十二月十六日　　孫太夫　丹波

三郷町中

ト載ス。

江戸ニ於テハ、已ニ慶長十四年九月上總國夷隅郡岸和田浦田尻ニ漂着セル西班牙船ニ乘リ來レル前フイリツピン諸島長官ドン・ロドリゴガ日本見聞錄○異國叢書所收。中ニ「此市街○江戸。及び街路ゟは觀るべき物甚だ多く、市政も亦大に見るべき所あり。ローマ人の政治と競ふことを得べし。市街は互に優劣なく、皆一様に幅廣く又長くして直なること西班牙の市街に勝れり。家は木造にして二階建なるものあり、而して外觀に於ては我が家屋優良なれども、内部の美は彼遙に勝れり。又街路は清潔にして何人も之を蹈まずと思はるゝ程なり。市街は皆門○木戸。を有し、人と職とに依りて區劃し、一街には大工居住し、他職の者は一人も雜居せず。他街には靴工あり、鐵工あり、縫工あり、商家あり、云々」ト記シ、市街皆門（木戸）ヲ有スルコトヲ記載セリ。而シテ慶安ノ初木戸有リ番屋有リタルコトハ、正寶事錄ニ、左ノ如ク見ユ。

○前略。

一、御城近邊ニ火事ゆむゞ、其町之者火消人足支度仕置、御觸次第ニ九ツより六ツ迄之間も、月行事自身罷出、時替之番、店借借屋の者迄急度念を入可申事。書も慥成手代月行事より出、町々番所ニ附置可申事。

一、町之番行燈之事、門脇ニ貳ツ宛、中ニ行燈二ツ以上六ツ置可申事。

一、町中之門、日暮四ツ迄大門を開、往行之者通可申ゆ。四時過ゆむゝ、大門を打、通ゆ者之先を改、町送ニ仕、通可申ゆ。夜更ゆ迚、往來之者留置申間敷ゆ事。

附、不審なる者通ゆむゝ、其所ニ留置、早々御番所へ可申上事。中略。

子○正保五年。卯月

右ゝ四月十日○正保五年。御觸、町中連判。

十枚作黃金奉獻

四月廿六日辛巳○寛永六年己巳（紀元二六九年）、○辛巳、三正綜覽。前田利常、將軍家光ニ十枚作リノ黃金ヲ獻ズ。大猷院殿

十枚作黃金奉獻事蹟

御實紀。大日本貨幣史。

十枚作り黃金奉獻

四月廿六日○寛永六年。將軍家光、加賀中納言利常卿が上野の別墅にならせ給ふ。利常卿に二字國俊の御太刀、秋田正宗の御脇差、銀三千枚、時服三百、夜着二十、羅紗三十間、長子筑前守光高に眞長の御太刀、貞宗の御脇差、銀千枚、時服百、千勝利次に守家の刀、銀三百枚、時服五十、宮松利治に長光の御刀、銀三百枚、時服五十、万姫富姫に銀百枚、紅糸廿斤づつ、黃門の母に銀三百枚、卷物三十、紅糸五十斤、森右近大夫忠廣妻に銀二百枚、卷物二十給ひ、家司本多安房守、横山山城守に銀三百枚、時服二十づゝ、前田對馬守、長九郎左衞門、奥村因幡守、横山大膳、小幡宮内に銀百枚、時服十づつ、富田下總、神谷丹波、今枝民部、津田勘兵衞、生駒内膳、脇田帶刀に銀五十枚、時服五づゝ下さる。黃門より友成の太刀、大原眞守の刀、無銘正宗の脇差、黑毛鞍馬一疋、十枚作の黃金三十枚（常の金十枚をもて一枚に作る。之を十枚作といふ。）小袖百、袷百、加賀染絹五百反、綿二千把、猩々緋三十間献じ、光高は正恒の太刀、包永の刀、當麻の脇差、鞍馬一疋、銀五百枚、小袖五十、綿千把、千勝利次は恒宗の太刀、銀二百枚、小袖五十、万姫、富姫は小袖三づゝ、老母は金廿枚小袖十、右近大夫忠廣妻は小袖三なり、安房守、山城守袷二十づゝ、對馬守、九郎左衞門、因幡守、大膳、宮内袷十づゝ、下總、丹波、民部、内膳、勘兵衞、帶刀袷五づゝさゝぐ。御茶奉り饗し進らせて猿樂あり、舞臺に要脚五百貫をつみ、猿樂大夫に唐織纏頭す。かへらせ給ひて後利常光高當城にまうのぼり謝し奉る。寛永系圖、東武實錄。

——大猷院殿御實紀卷十

武家法度

武家法度事蹟

六年○寛永前田利常十枚作ノ黃金ヲ幕府ニ贈ル。

是歲四月前田利常十枚作ノ黃金三十枚ヲ幕府ニ贈ル。十枚作トハ金十枚ヲ一枚ニ作リタルナリ。

——大日本貨幣史

九月六日戊子○寛永六年己巳（紀元二二八九年）○戊子、三正綜覽。武家法令タル諸法度ヲ仰出サル。內ニ徒黨、衣裳、乘輿、儉約ニツキテ嚴令ス。○東武實錄。大猷院殿御實紀。

武家諸法度　武家法令十一條ヲ出ス。卽チ文武兼備ノ要ヲ說キ、而モ兵ヲ號シテ凶器ト爲ス、已ム事ヲ得ザル場合ニ於テ之ヲ用フベキ也トシ、群飲佚遊ヲ戒メ、好色ニ耽リ博奕ヲ業トスルヲ亡國ノ基ト爲シ、法ヲ犯ス者ヲ藏匿スルヿヲ禁ジ、法ヲ理ヨリモ重シトナシ、國々大小名諸給人ノ叛逆殺人等ノ聞エアル者ヲ抱置クヿヲ禁ジ、野心ヲ國家顚覆ノ原因トシテ假借セズ、諸國居城ノ修補ト雖モ必ズ屆出ヲ要シ、新儀構營ヲ嚴禁シ、隣國ノ新儀ヲ企テ徒黨ヲ結ブ者アラバ速ニ訴出デシメ、私ニ婚姻ヲ結ブヿヲ禁ジ、衣裳ノ品等ヲ亂ルヿヲ禁ジ、乘輿ノ制ヲ布キテハ雜人猥ニ乘輿スルヿヲ禁ジ、諸國諸侍ニ儉約ヲ命ジ、富メル者彌誇リ、貧シキ者及バザルヲ恥ジ、風俗ノ凋弊是ヨリ甚シキハナシトテ、之ガ矯正ヲ嚴令シ、國主ハ施政ノ善美ニ努ムベキヿヲ令セリ。

同○寛永六年九月。六日　武家諸法度仰出サル。

武家諸法度

一文武弓馬之道專可相嗜事。

左ノ文右ノ武古之法也。不ノ可ノ不ニ兼備ヘ矣。弓馬是武家之要樞也、號ノ兵爲ニ凶器ト不ノ得ニ已而用ノ之、治ニ不ノ忘レ亂ヲ何不ノ勵ニ修錬ヲ乎。

一可ノ制ニ幷飲佚遊ヲ事

令條所ノ載嚴制殊ニ重玩ニ好色ニ業ニ博奕ニ是亡國之基也。

一背ニ法度ヲ輩不ノ可ノ隱ニ置於國々ニ事

法是禮節之ノ本也。以ノ法破ノ理ヲ以ノ理ヲ不ノ破ノ法背ノ法之類其科不ノ輕矣。

一國々大名小名幷ニ諸給人各相抱士卒有ニ爲ニ叛逆殺害人ニ告者ニ速ニ可ニ追出ニ事

夫挾ニ野心ヲ之者爲ニ覆ニ國家ニ之利器ニ絕ニ人民之○鋒鋒ノ劍ニ豈足ニ允容ニ乎。

一諸國居城雖ノ爲ニ修補ニ必可ニ言上ニ況新儀之構營堅令ニ停止ニ事

城過ニ百雉ニ國之害也、峻ノ壘浚ノ隍大亂之本也。

一於ニ隣國ニ企ニ新儀ニ結ニ徒黨ニ者在ノ之者、早可ノ致ニ言上ニ事

人皆有ニ黨亦少ニ達者ニ是以或不ノ順ニ君父ニ乍ノ違ニ于隣里ニ不ノ守ニ舊制ニ何企ニ新儀ニ乎。

一私ニ不ノ可ノ締ニ婚姻ニ事

夫婚合者陰陽和同之道也。不ノ可ニ容易ニ。易睽曰匪ノ寇婚媾、志將ノ通、寇則失ノ時、桃夭曰、男女以ノ正婚姻以ノ時國無ニ鰥民ニ也、以ノ緣成ノ黨是姦謀ノ○基本也。

一衣裳之品不ノ可ノ混雜ニ事

君臣上下可ノ爲ニ各別ニ、白綾白小袖、紫給、紫裏、練無紋之小袖、無ニ御免ニ衆猥ニ不ノ可ノ有ニ着用ニ、近代郎從諸卒、綾羅錦繡等之飾服、非ニ古法ニ甚制ノ焉。

一雜人恣ニ不ノ可ノ乘ニ輿ニ事

古來依ニ其人ニ無ニ御免ニ乘ニ家在ノ之、御免以後乘家在之、然近來及ニ家老諸卒ニ乘輿誠ニ濫吹之至也。於ニ向後者國大名、同子息、一門之歷々幷ニ一城被ニ仰付ニ衆、付ノ五万石以上或五十以上之人、醫陰之兩道、病人等者不ノ及ニ御免ニ可ノ乘、其外之輩者、御免以後可ノ乘、至ニ國々諸大名之家中ニ、於ニ其國ニ者、其主人撰ニ仁體ニ遂ニ吟味ニ可ノ免之、○叨。濫令ノ乘者可ノ爲ニ越度ニ也。但公家、門跡、○諸出家出世之衆者、非ニ制限ニ。

一諸國諸侍可ノ被ニ用ニ儉約ニ事

富者彌誇、貧者恥ノ不ノ及、俗之凋弊無甚於ニ此、所ノ令ノ嚴制也。

一國主可ノ撰ニ政務之器用ニ事

凡治國道在ノ得ニ人明察ニ功過賞罰必當國有ニ善人ニ則其國彌殷國無ニ善人ニ則其國必亡、是先哲之明誡也。右可ノ相ニ守ニ此旨ニ者也。

寛永六巳年九月六日

一自今以後國人之外不ノ可ノ交ニ置他國者ニ事。

一諸大名參覲作法之事。

此二ケ條ハ元和元年○壽長十年。七月ノ御制法ニ相載ラルヽト云ヘ𪜈此度損益ヲ御評儀有テ右ノ二ケ條ヲ除カレ如ノ此治定セラルヽ者也。

——東武實錄

傍註ハ、大猷院殿御實紀ニ依ル、尙同書○大猷院殿御實紀。ハ右法度ニ附記スルコト左ノ如シ。

先令の中、自今以後國人之外不可交置他國者、諸大名參覲作法の事といへる二條を除かれ、乘輿國大名之子、城主五万石以上、年五十以上、被免之、同至國々諸大名之家中於其國も、其主人撰仁體遂吟味可免之とある條は、改て文儀を潤飾せられしとぞ。

遅羅國聘使國書幷幣物奉獻

九月十三日乙未（○寛永六年己巳（紀元二二八九年）、○乙未、三正綜覽。）遅羅國聘使參着、超エテ同十九日辛丑（○辛丑、三正綜覽。）同國使三名入朝、將軍ニ謁シ、信書幣物ヲ捧ゲ、國主代替ニツキ更ニ舊好ヲ修メ通商許可ヲ請フ。十月二日癸丑（○癸丑、三正綜覽。）遅羅國聘使ニ通商交易許可ノ返簡ヲ授ケ遅羅國主ヘ贈物ヲ賜フ。（○大猷院殿御實紀。大日本貨幣史。）

遅羅國聘使國書幷幣物奉獻事蹟

十三日（○寛永六年九月。）またこの日遅羅國聘使參着せしかば、弘德寺を旅館とし、小十人頭中根傳七郎正成饗應奉行たらしめらる。（異國日記。）

——大猷院殿御實紀卷十四

十九日（○寛永六年九月辛丑。）遅羅の國使三人入朝して拜し奉る。金地院崇傳をして其書簡（泥金紙）を讀しむ。その旨趣は、遅羅の先主すでに薨じ、新主嗣立せしにより、舊好を修めんがため、こたび使を奉れり。國家一視同仁の恩を得て、ます〳〵兩國通商をゆるし給ふ事を希ふよしなり。貢物は上奇楠香。次奇楠香。上氷片。次氷片。西洋緞四端。西洋花緞五條。花毯二條。象牙五擔。また大御所（○德川秀忠。）にも奇楠香。氷片。西洋緞二反。茄花色八絲緞四反。金銀柳條四反。西洋花緞四反。また其國宰臣より酒井雅樂頭忠世にも書簡を贈り、かの國主より象牙二擔。烏綱五端。西洋花緞五條を贈り、宰臣より花緞一條。八絲緞三反を贈り、儒臣林永喜信澄へ茄花色八絲緞二疋、烏綱二疋、長崎役人高木作右衞門へ茄花色八絲緞四疋、末次平藏へもおなじ品を贈れり。（異國日記。）

——大猷院殿御實紀卷十四

廿三日（○寛永六年九月乙巳。）遅羅國への御返簡を、金地院崇傳作進す。（異國日記。）

——大猷院殿御實紀卷十四

廿五日（○寛永六年九月丁丑。）遅羅國の御返簡を大御所（○德川秀忠。）御覽に備ふ。（異國日記。）

——大猷院殿御實紀卷十四

二日（○寛永六年十月癸丑。）遅羅の國使にいとまたまはり、御返簡を授らる。その旨趣、國家善隣の意をむねとせらるれば、いよ〳〵舊盟を變ぜず、商船の通交をゆるし給ふ事とぞ聞えし。よて國主へ泥金屏風三雙。鎧三領。太刀二振。鞍馬三疋つかはされ、大御所よりも鞍馬二疋つかはさる。酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝の二大老よりも、かの宰臣に返簡を贈り、國主に鞍馬二疋づゝ、宰臣に晒白布二十疋をくる。かの正使に銀二百枚、小袖十、副使に銀百枚、小袖十、三使に銀五十枚、小袖六、譯官に銀二十枚、小袖一襲たまはり、大御所より正使に銀百枚、副使に銀五十枚、三使に三十枚、譯官に二十枚下さる。（異國日記。）

——大猷院殿御實紀卷十四

六年（○寛永己巳。）遅羅國使來ル、正使等ニ銀幷物ヲ與フ。

十月遅羅國使來ル、幕府ヨリ正副使等ニ銀幷其他ノ物ヲ與フ、銀數合五百七拾枚ナリ。（德川實紀。）

——大日本貨幣史

三日（○寛永六年十月甲寅。）遅羅國に居住する山田仁左衞門長政より、その國使來聘につきて、紅縐紗十端、花氈二枚獻じ、書狀をもて渡海の御朱印たまはらん事を懇願す。よて酒井雅樂頭忠世より晒白布二疋を贈り、通商異議なき旨をつたふ。土井大炊頭利勝よりもおなじ。（國師日記。異國日記。）

——大猷院殿御實紀卷十四

是月○寛永六年十月。暹羅國宰臣より、京職板倉周防守重宗へ書簡を贈り、國主より象牙二擔、烏綢四端、西洋綾四條、宰臣より華緩一條、八絲緞二反そへて贈りしかば、金屏風一双をもて酬となし、返簡は儒臣林道春信勝に代撰してをくらしめらる。

——大猷院殿御實紀卷十四

質屋典物取扱方規定

質屋典物取扱方規定事蹟

十月十八日己巳（寛永六年己巳（紀元二二八九年）○己巳、三正綜覽。）質屋典物取扱方ヲ令ス。○日本財政經濟史料。

質屋典物取扱方規定

寛永六年己巳十月十八日○己巳。

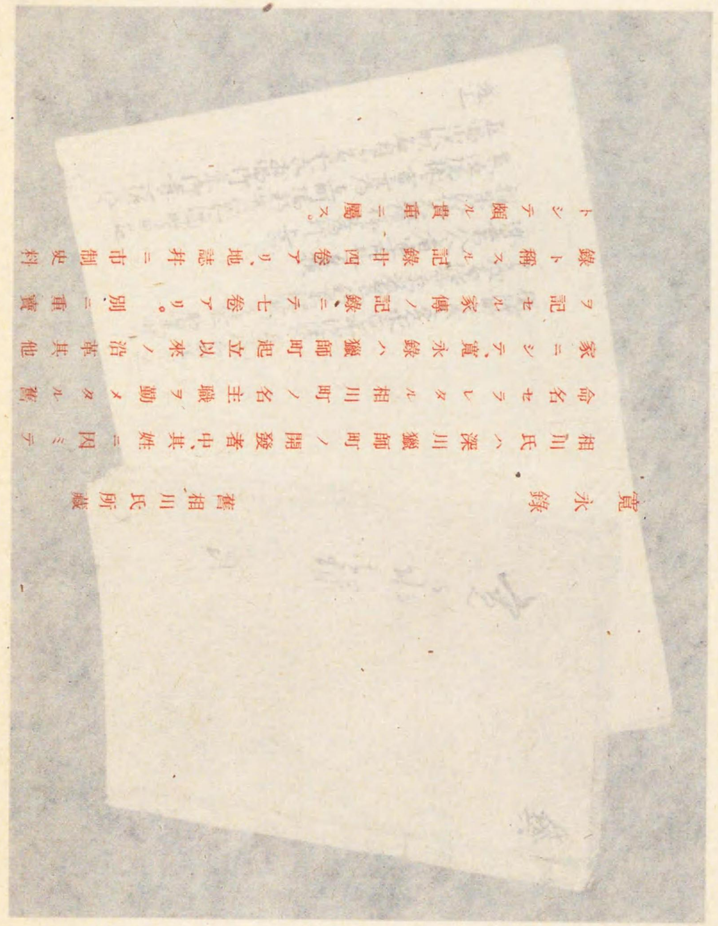
覺

一、質屋中諸道具質に取ゆ時、置ゆ者之町所同宿主をも能聞屆、難澁仕名宿を不申においては、留置、奉行所へ可申來、慥に名乘ゆゝゞ、則人を添、宿を見屆置、可賣取事。（原五條、令書要文十三、將軍家令條三。）

——日本財政經濟史料

深川獵師獵師町埋築

是年○寛永六年己巳。（紀元二二八九年）深川邊海上漁業ニ從事セシ獵師等深川西部干潟ノ地ヲ幕府ニ請ヒ之ヲ埋築シテ獵師町ヲ起立ス。獵師町○深川區。ハ新築地ノ總名ニシテ彌兵衛町○元祿八年改、清住町。次郎兵衛町・藤左衛門町○同、兩町ヲ合セ、佐賀町。・新兵衛町○同、相川町。利左衛門町○同、熊井町。・彦左衛門町○同諸町・助十郎町○同、富吉町。・大島町○起立以來同名。・助左衛門町○元祿八年改、黑江町。ヲ惣稱セリ、而シテ同地居住ノ獵師等ハ冥加トシテ翌七年○寛永。ヨリ幕府ヘ御菜魚獻上其他ノ公役ニ服スルニ至ル。○寛



寛永錄ヲ家命相永トシテ記ニ名川錄シテ稱セシ氏。

頗スルテ、寛永錄ルヲ家傳永ヲ川記錄ノ錄ヲ貴重ニ、中記錄獵ニ四卷ハ相師町屬ス。ニ川町ノ

アテ七卷立職中、開ノ地、起主以來其姓名ノ發者舊相

誌ノ地ア主ヲ姓川

井ニ市別ノ沿メ氏所

刊ニ市別ニ革ノ勤ニ氏所

史重其ル料寶他寶テ

是月○寛永六年十月。暹羅國宰臣より、京職板倉周防守重宗へ書簡を贈り、國主より象牙二擔、烏綢四端、西洋縵四條、宰臣より華縵一條、八絲緞二反そへて贈りしかば、金屏風一双をもて酬となし、返簡は儒臣林道春信勝に代撰してをくらしめらる。

——大猷院殿御實紀卷十四

質屋典物取扱方規定

質屋典物取扱方規定事蹟

十月十八日己巳寛永六年己巳（紀元二二八九年）○己巳、三正綜覽。質屋典物取扱方ヲ令ス。○日本財政經濟史料。

質屋典物取扱方規定

寛永六年己巳十月十八日○己巳。

覺

一、質屋中諸道具質に取ゆ時、置ゆ者之町所同宿主をも能聞屆、難澁仕名宿を不申においては、留置、奉行所へ可申來、慥に名乘ゆハヾ、則人を添、宿を見屆置、可質取事。原五條、合書要文十三、將軍家令條三。

——日本財政經濟史料

深川獵師獵師町埋築

是年○寛永六年己巳。（紀元二二八九年）深川邊海上漁業ニ從事セシ獵師等深川西部干潟ノ地ヲ幕府ニ請ヒ之ヲ埋築シテ獵師町ヲ起立ス。獵師町○深川區。ハ新築地ノ總名ニシテ彌兵衛町○元祿八年改、清住町。次郎兵衛町・藤左衛門町○同、兩町ヲ合セ、佐賀町。・新兵衛町○同、相川町。利左衛門町○同、熊井町。・彦左衛門町○同諸町・助十郎町○同、富吉町。・大島町○起立以來同名。・助左衛門町○元祿八年改、黑江町。ヲ惣稱セリ、而シテ同地居住ノ獵師等ハ冥加トシテ翌七年○寛永。ヨリ幕府ヘ御菜魚獻上其他ノ公役ニ服スルニ至ル。○寛

寛永錄

寛永錄ニ家命相川名ト記シ名ト稱セシ氏ハ頗ル家覺ラ深川貴重ナル記傳永ノ錄獵師町ノ開發地主者舊相川氏所藏

深川獵師、獵師町埋築事蹟

冥加御菜看献上御成御役船

獵船無年貢

永錄。文政町方書上。御府内備考。

深川獵師、獵師町埋築

顚末左ニ具記ス。

武州葛飾郡西葛西領
深川獵師町起立
南受東北ニ凡長拾町程
南西ニ四拾間ゟ貳拾間餘迄

台德院様〇德川秀忠。御代獵師町起立之儀、獵師共酒井雅樂頭様濱御屋敷被差置、深川海上之獵業致、海手潮除堤外干潟之所、町場ニ取立申度、右場所被下置ゆゑ、爲冥加御菜御看差上、幷川通御成之節御役船相勤可申段、寛永六巳年伊奈半十郎様ニ奉願ゆ處、酒井雅樂頭様・土井大炊頭様ニ被仰立、言上之上、右願所被下ゟ之築立、町銘獵師町ゟ唱、寛永七年ゟ御菜御看壹ヶ月三度宛御本丸ニ差上、御成之節御役船五拾艘宛、當所ニ附置、御用人足相勤、獵船無年貢之儀も、御菜御看差上ゆ故、船役永御免、獵船數不定獵業致ゆ。其節永代島浦々ゟ中川迄御鳥見方御廻り之節、八月ゟ翌三月迄毎日船貳艘宛差出所、起立ゟ獵師町之内渡場當時永代橋之所、大渡場ゟ唱壹ヶ所、富吉町地先大川通ニ壹ヶ所、都合貳ヶ所有之、大渡場之儀、靈岸島ニ渡ゆ場所ニ而、渡錢之義も、往來武家方相除、壹人ニ付貳文宛、馬も六文宛可取旨、於御評定所被仰付、所之者稼ニいたし、深川御薪藏御煎栽物日々持送り有之、右渡船御役相勤、其上諸浦ゟ廻船入津之場所ニ而、御成之節、船留御役船差出。

一、寛永十三子年大猷院様〇德川家光。御代、日光御社參平柳領川口通御賄御道具積送り積返し御用御役船相勤、隅田川御成之節、御殿下御用御役船相勤、同所幷當所御菜屋有之候節、御膳所ニ大蠣大蛤笹澪大蜆等御用次第差上、其砌ゟ御好御菜御城ニも差上、投網船是又御用次第相勤、當所御茶屋御賄人足掃除人足とも相

勤、行德通御成之節、深川元御番所、當時万年橋北之詰ゟ大川通之間船見御番所跡有之、右之儀ニも可有之、近邊に船橋貳ヶ所相懸ケ御用相勤、起立ゟ獵師町續玄信寺・法乘院寺築立い處、寛永八巳年右場所被召上、長九拾三間横六拾三間之所、獵師町に地形土持運人足被仰付、御船手方天野孫左衞門御役屋敷ニ渡、當時永代橋際御船手御組屋敷之場所。

一、寛永貳拾未年朝鮮人來朝ニ付、淺草觀音堂前馬溜小屋迄人馬差出、川崎宿迄繼立、御用相勤。

一、正保三戌年ゟ兩國橋出來前、葛西筋御成之節御儻勢方大川渡越船御用次第差上。

一、慶安貳丑年中、日光御社參同公家衆御通之節、千住宿迄御賄御道具積送返御用相勤。

一、承應元辰年御鷹野御成先御賦仕立御用、本所龜戸羅漢寺御膳所罷出い名主拾三人之内、獵師町名主貳人御賦御用相勤。

一、明暦元未年朝鮮人來朝ニ付、六鄕渡場迄浦加子相勤。

一、明暦三酉年江戸大火、橋ゝ燒失之刻、錢瓶橋・一石橋兩所に御役附置、御登城之御役人方渡越相勤、右大火ニ付、江戸町ゝに御金拜領被仰付いニ付、獵師町之儀も、百姓地故、御金不被下置哉、依多分之役相勤い譯書を以、御評定所に御訴證申上い處、家數御吟味之上、爲御褒美、明暦三酉年三月十五日傳馬町・芝金杉町幷獵師町間數八百六拾間ニゐ御米四百八拾俵被下置之。但三斗六升入、其上町ゝ同樣、明暦三酉年九月四日於御評定所、伊豆守樣・豐後守樣御列座ニゐ、御銀子千六百九十枚、但此貫目七拾貳貫六百七拾匁拜領之。右御銀紅葉山御藏ゟ相渡い旨ニ付、人足拾四五人差出い處、御銀も伊奈半十郎樣御役所ゟ相渡り、高合千六百九十枚小間壹間ニ付銀子貳枚宛拜領之。

一、万治貳亥年、兩國橋掛替出來ニ付、近邊出火之節橋防人足、幷出水之節水防人足御役船、御用次第差出、御成之節も、兩國橋洗人足御役船相勤、天草御城米積送り、百俵積大茶船度ゝ相勤、中川御番所破損之節、御役船御用次第差出、御用木浦ゝ次立、幷御國廻り之船入津之刻、引船御役船差出、於增上寺御法事有之節も、御賄御道具積送り相勤、同寺鐘之撞木平柳領ゟ積送御用相勤、諸國御城米入津之節、大風出水又も破船之節、御役船差出、右多御役相勤い地所ニ付、四拾壹ヶ年之間無年貢地ニい處、寛文十戌年獵師町伊奈半十郎樣ゟ本家御繩入ニ相成、七月廿五日御檢地、屋敷高九町六反八畝廿一歩ゟ相定、同年十一月御年貢上納被仰付い間、多分之御役相勤い上、御年貢被仰付いニ付、同十二月十二日御年貢上納御免之義度ゝ奉願上い處、御免無之、其砌ゟ御年貢金永廿壹貫五百三十八文、夏秋冬三度ニ上納致い。其節ゟ御割附相渡り、

一、延寶貳寅年二月廿四日高役御免之儀諸役書を以半十郎樣に奉願い處、同十一月十七日高役御免願之通被仰付い。

一、延寶三卯年增上寺土手御普請ニ付、芝戸田筰目ゟ土積送り御役船相勤。

一、延寶四辰年獵師町小譯九ヶ町町銘、名主名前之町銘ニゐ御割付相渡り。

一、延寶八申年御鷹場御法度證文、御鳥見方矢野九郎兵衞樣・中村六右衞門樣宛名ニテ初ゐ差出。

一、天和元酉年上野御寶塔石來い節、引船相勤、同年朝鮮人來朝ニ付、六鄕浦加子相勤。

一、天和二戌年十二月廿八日黑江町之内淨土宗眞光寺類火ニゐ燒失致い處、新寺故寺建い義不相成、屋敷地壹反七畝歩被召上い。

一、貞享元子年九月二日相川町飛地角屋敷之内河岸地面に、御鳥見方組頭幡野市郎兵衛殿・松下安兵衛殿其外御立合之上、鐵炮打い者訴人之御高札被建之。

——寛永錄二相川藏書

深川獵師町黑江川助右衞門町年數書上

一、深川潮除堤之内獵師町ニ取立申度古半十郎様に御訴訟仕い得ム、雅樂頭様に被仰上五拾六年已前巳年○寛永六巳年。獵師町ニ取立、御菜御成之節御賄御役船人足其外御役等只今ニ至獵師町中申い御事。

○中略

貞享元年子五月

御代官様

名主　助之丞

乍恐口上書を以御訴訟申上い

——寛永錄二相川藏書。

一、獵師町之儀、七拾四年已前巳年○寛永六巳年。ニ汐除堤之外干潟之所、古半十郎○伊奈。様に獵師町ニ取立申度旨奉願い得ム、古雅樂頭様、大炊守様に被仰立い處ニ、台德院殿様に被爲遊言上、獵師町被爲仰付、水之上を築立、町屋ニ取立、其砌ゟ御城様に御菜之御肴壹つ月ニ三度宛、爾今無差上ケ申い。御年貢之儀も所○マヽ起立ゟ四拾年余相納不申、當所繁昌ニ付三十三年已前ゟ町並御年貢上納仕い。從古來田畑等一切作不申町屋敷ニ而、其外町役等江戸町同所○マヽニ相勤申い。尤當所之内ニも町御支配之場所ム家作等勝手次第ニ仕い處ニ、獵師町之義家作御改之場所故、作事等奉願い得ム、御吟味之上、早速被爲仰付い得共、乍恐當所町々之義ム江戸町續故、諸町御用其外出入等も多き場所ニ而御座いニ付、家主共方ゟ拙者共方に家作願之義申來い刻ム、願之筋坪數等吟味、其上繪圖口上書を以仕立申い義ニ御座い故、御用等差支い節ハ願之者延引罷成迷惑ニ奉存い。御慈悲ニ家作御免之町屋同前ニ被爲仰付被下置いはゞ難有可奉存い。尤所ニ而相勤申い御役書別紙書付を以差上申い。以上。

獵師町公役

元祿十五壬午年九月

獵師町　名主之者

御奉行様

獵師町ニ而相勤申い御役之品々

一、七十四年已前○寛永六巳年。漁師町ニ取立、其砌ゟ御城様に御菜御肴壹ケ月三度宛差上申い御事。

一、從先規川通御成之節、御役船五拾艘宛當所ニ着ケ置、諸事御用等相勤申い御事。

一、隅田川御成之刻、品川迄御賄御道具積送り之御役船相勤申い御事。

一、從先年玖橋之御用ニ芝品川筋に御役船御用次第出し申い御支。

一、日光御社參之刻、平柳領川口迄御賄道具積送り之船相勤申い御事。

一、惣而公家衆御通之時分、千住迄御賄道具積送之船相勤申い事。

一、增上寺御法事之刻、御賄道具積送之御役船相勤申い御事。

一、惣而中川御番所御破損之刻、御役船御用次第出し申い御事。

一、惣而御用木浦次所ニい刻、引舟出申い御事。

一、御國廻之御船乘りい刻、引船出申い御事。

一、大水之時分、兩國橋、新大橋、永代橋に人足幷御役船每度大分相勤申い御事。

一、諸國御城米船入津之砌滿水風雨之時分助船、若破船之節ム御役舟御用次第出申い御事。

一、四十六年巳前（明暦三酉年。）大火事ニ橋々焼落ゆニ付、錢瓶橋、一石橋両所ニ御役船着ケ置、御城様ニ御用之業御假橋出來仕ゆ内、晝夜相渡申ゆ。尤當所之義も類火ニ逢申ゆニ付、右相勤申ゆ御役品々書付、御評定所ニ御訴訟申上ゆ得も、大分之御役相勤ゆ段、御褒美被爲成下ゆ、江戸傳馬町、芝金杉、當獵師町ニ御燒米拜領仕、其上江戸町同前御銀拜領仕ゆ御事。

一、十八年巳前丑年（貞享二丑年。）迄唐船造之船參ゆ節、淺草御藏ゟ品川海面迄銅幷天草御城米積送之御用ニ百俵積之大茶船毎度大分相勤申ゆ御事。

右ケ條之外、降リ來ル御役儀、幷御年貢等之義も、宿賃（ママ）可然様ニゟ相勤申ゆ場所ニ御座ゆ。已上

元祿十五年壬午九月

御奉行様

名主　獵師町清住町彌兵衛
名主　同所佐賀町藤右衛門
同代　同所清左衛門
名主　同所相川町新兵衛
名主　同所熊井町理左衛門
名主　同所富吉町助十郎
名主　同所諸町彦左衛門
同所　黒江町大嶋町
名主　右衛門

——寛永錄（武相川藏）

獵師町之義も、寛永六巳年汐除堤之外干潟之處、町場ニ取立申度旨、治郎兵衛、藤右衛門、新兵衛、理左衛門、彦左衛門、助右衛門、助十郎、彌兵衛八人之者、半十郎（母奈。）様ニ奉願、雅樂頭様、大炊頭様ニ被爲仰上ゆ處、台德院様（德川秀忠。）ニ言上被爲在、町場新開致ゆ處漁師町と惣名相唱、小譯町名自分名前を以相唱、御菜御肴三拾六度ツヽ差上。

一、寛文十一庚戌年初ゟ御縄入、七月（廿六日廿五日。）御年貢被仰付ゆ。

永田九郎兵衛殿
牛込彌三郎殿
石母才兵衛殿
永田八兵衛殿

一、本家家作御免元祿拾五壬子年九月

新地御奉行
赤井六兵衛様
瀧川清右衛門様

一、川岸屋鋪同斷寶永元申年十一月九日

新地御奉行
赤井六兵衛様
河部甚三郎様

一、永代賣御免　元祿元辰年四月廿八日

一、高役延寶二寅年被仰付ゆニ付、御免被仰付ゆ處、元祿二年被仰付ゆ。

一、清光寺稲荷、西念寺、正源寺、富吉町稲荷、是ハ寛永六年出來、同八卯年古跡地ニ成。

元祿八年町銘改

開發ゟ六拾七年之間、右朱書町銘相唱申ゟ。

大館彌兵衛　福地次郎兵衛　松本藤（一三左）右衛門　相川親兵衛（一三新）　熊井利左衛門　福島助十郎　諸　彦左衛門

齋藤助右衛門

○朱書元祿八年五月苗字之町銘ニ改清住町ニ安房之清澄之縁、佐賀之湊之縁を以唱、富吉を元福島之生國ゟ。之由、親兵衛、利左衛門ハ新之字、理之字ニ改ゆハ享保度之旨申傳ゆ。

——寛永錄一相川藏書。

○朱書元彌兵衛町　清住町
○同次郎兵衛町　佐賀町
藤左衛門町
○同新兵衛町　相川町
○同利左衛門町　熊井町
彦左衛門町　諸　町
○同助十郎町　富吉町
○同起立ゟ大島町　大嶋町
○同助右衛門町　黑江町

寛永六巳年新開ゟ四十一ヶ年之間無年貢之處、伊奈半十郎様ゟ寛文十庚戌年本家繩入七月廿五日廿六日永田九郎兵衛殿、牛込彌三郎殿、石母才兵衛殿、永田八兵衛殿屋鋪高九町六反八畝廿壹歩御年貢金永廿壹貫五百三十八文夏秋冬三度ニ納。

——寛永錄一

武藏國葛飾郡獵師町檢地水帳

獵師町

清住町　本屋鋪八反四畝廿歩　河岸同四畝九歩
○小譯略。佐賀町　本屋鋪三丁五畝廿三歩　河岸同八反五畝廿歩
○小譯略。相川町　本屋鋪七反六畝十九歩　河岸同三反四畝十九歩
○小譯略。熊井町　本屋鋪五反四歩　河岸同貳反壹畝十五歩
○同上。富吉町　屋鋪七反五畝廿三歩
○同上。諸　町　屋鋪三反六畝十壹歩
○同上。大嶋町　本屋鋪壹町貳畝廿壹歩　河岸同三反壹畝十三歩
○同上。黑江町　屋鋪貳町八反八畝八歩
○同上。右之寄　〃八反八畝廿九歩
〃三町九反壹畝十三歩
〃壹町壹反壹畝八歩
〃七反壹畝十九歩
〃壹町三反四畝五歩

屋敷都合拾壹町九反七畝廿六歩　石盛壹石貳斗。

高都合百四拾三石七斗四升四合

右之外除地

五間半　北十間七寸
十六間半　南四間　西拾七間三尺七寸　東拾五間四尺二寸　境内三畝壹歩

廿七間　北三拾六間壹尺二寸
廿六間半小　南拾八間　西三拾三間　東廿間半　境内貳反四畝貳歩

四間小　西七間壹尺
七間　東七間壹尺　北四間壹尺　南四間半　稲荷大明神社地壹畝歩

本寺京都西本願寺　浄土眞宗　西念寺
本寺増上寺　浄土宗　正源寺
別當　清光寺

右境内幷社地遂吟味ニゆ處舊地ニ無紛從前々無年貢地故奉窺御勘定所に御證文相除之處如斯。以上、
元祿十丁丑年十二月

酒井河内守家來御檢地惣奉行
大河内勘兵衛死去仕ゆニ付跡役故如斯
同御檢地本ノ　内藤半左衛門印
同　西松又左衛門印
同　大山○ヶ。笠太夫印
同御檢地奉行　青木彌惣右衛門印
同　川崎善右衛門印
同　細井久太夫印
同竿奉行　八森七兵衛印
同　高須十左衛門印
同　梶木彈助印
同竿手目付　宇野十郎兵衛印
同竿取　花岡喜左衛門印
同　久保田彌五左衛門印
同　神田彌右衛門印
同　山口權右衛門印
御檢地案内　名主　彌兵衛
同　名主　次郎兵衛
同　名主　藤左衛門
同　名主　新兵衛
同　名主　理左衛門
同　名主　助十郎
同　名主　彦左衛門
同　名主　助右衛門

——寛永錄一相川藏書。

一、寛水六己巳年、深川地方に市街を拓き大島、黑江、相川、熊井、諸町、富吉、清住、佐賀の八ケ町を漁師町と總稱し、漁夫等是に移住し、蛤町、奥川、中島の三ケ町へ地小買等轉住して、其地方の魚物を買集め、之を幕府肴役所へ納め專ら石蟹手長海老蛤等の類。其殘魚を日本橋市場に送り販賣せり。東京諸問屋沿革志。

深川熊井町○市内深川區。

一、町内起立之儀ハ、當町名主理左衛門ゟ六代以前利左衛門幷彌兵衛・次郎兵衛・藤左衛門・新兵衛・助十郎・助右衛門・彦左衛門右八人儀、先年酒井雅樂頭様御屋鋪内ニ罷在、此屋敷當時里俗とうかん堀御中屋敷ニ御座候由。貳百壹ケ年以前寛永六巳年中、深川海手潮除堤之外干潟之所町場ニ取立申度旨、御代官伊奈半十郎様ニ願出ゆ處、酒井雅樂頭様・土井大炊頭様ニ被仰立、言上之上、願之通被仰付、同年○寛永六巳年。右場所築立出來、漁師共住居致ゆニ付、町銘深川獵師町ゟ唱、右町之内境ヲ相立、八人之者互ひニ申合、名主役相勤、銘々住居之最寄を自分名前之町銘相付、當町之儀ハ則利左衛門町ゟ唱、爲冥加翌午年壹ケ月三度宛きす・ふつこ・せいこ等之御菜御肴差上、其外臨時御肴蜆蛤御用被仰付相勤、川筋御成之節、御賄御道具積送御役船、御用次第差出ゆニ付、右地所無年貢ニ有之、其後も品々御役船人足等被仰付相勤ゆ處、追々住居人相增ゆニ付、寛文十戌年伊奈半十郎様ゟ地先河岸屋鋪之外、本家之方御縄入有之、右御手附永田九郎兵衛殿、牛込彌三郎殿、石母才兵衛殿、永田八兵衛殿出役有之、獵師町屋敷高九町六反八畝貳拾壹歩ニ相定リ、同年○寛文十ゟ戌年。始ゟ御年貢永貳拾壹貫五百三拾八文上納被仰付、其後貞享五辰年四月廿八日、御年貢町屋鋪永代賣御免、元祿貳巳年高役被仰付ゆ所、同八亥年六月四日酒井河内守様、安藤對馬守様再御檢地但御檢地御水帳之儀ハ河内守様御一名ニ而相渡リ申ゆ。獵師町地面幷河岸鋪とも石高百四拾三石七斗四升四合、此反別拾壹町九反七畝貳拾六歩、内當町分高八石五斗九升六合、此反別七反壹畝拾九歩ニ御定有之、右御檢地ゟ石高相增、且又獵師町小譯町銘、名主共名前ヲ以唱來ゆ處、當町之儀ハ、利左衛門苗字熊井ゟ唱ゆニ付、熊井町ゟ改、同十一寅年三月中御檢地御奉行御連印御水帳相渡リ、其後元祿十五年年十一月中家作御改、御免之町並屋鋪ニ仕度段、屋敷御改赤井六兵衛様、瀧川清右衛門様ニ願出ゆ處、同十一月十日河岸屋敷之外、不殘家作御免ニ相成、同十七申年十一月中、猶又河岸家作御改御免之儀、赤井六兵衛様、阿部甚三郎様ニ願出、同月九日願之通被仰付ゆ。其後正德三巳年閏五月中、右町不殘町御奉行所御支配ニ相成、地方ハ前々之通御代官所ニ有之、當時兩御支配ニ御座ゆ。

但、前書御菜御肴上納之儀、寛政四子年三月中町入用減方之節、正錢ニ而六拾六貫七百文、獵師町八ケ町ゟ年々上納仕、尤活手長海老百疋宛御用之儀ハ、今以相勤メ、毎年七月十五日相納、幷御成之節御賄御道具積送御役船共、是又獵師町一統ニ而相勤申ゆ。

獵師町之内小譯町銘、

深川熊井町。　同所佐賀町。
同所相川町。　同所清住町。
同所諸町。　同所大島町。
同所富吉町。　同所黑江町。

一、町内幷外拾貳ケ所獵師共住居之所、里俗惣名濱拾三町ゟ唱ゆ。右町名左之通、

大嶋町。　蛤町分（横壹丁目。店。）
中嶋町。　（貳丁目。）
熊井町。　相川町分（上貳丁目。）
（半相川町。）

奥川町。　永代寺門前町〔門前町。
黒江町分〔黒江町。〔東黒江町。

かき店
蠣商住居

北之方相川町向合之所、里俗かき店ゟ唱來い儀ニゐ、當時ゟ右渡世之者無御座いゝ。右ゟ先年蠣商ひいたしゆ者共住居仕いゝニ付、其砌ゟ里俗かき店ゟ唱來い儀ニゐ、當時ゟ右渡世之者無御座いゝ。

一、町内地方ゟ、古來ゟ御代官御支配ニ付、武州葛飾郡西葛西領深川獵師町之内熊井町ゟ唱、當時山田茂左衛門様御代官所ニ御座いゝ。

一、元祿八亥年御檢地御役人左之通、

酒井河内守様御家來
御檢地惣奉行
大河内勘兵衛殿死去ニ付

跡役
内藤半左衛門殿
同檢地元〆
西郷又左衛門殿
同斷
大山兵太夫殿
同竿奉行
八森七兵衛殿
同斷
高須重左衛門殿
同斷
梶木彈助殿
同竿手目付
宇野七郎兵衛殿
同御檢地奉行
青木彌三右衛門殿
同斷
川崎吉右衛門殿
同斷
細井久太夫殿
同竿取
花岡喜左衛門殿
同斷
神田彌右衛門殿
同斷
山口權右衛門殿

右御水帳之義ゟ、當時獵師町名主共方ニ御渡し有之い。

町内地先河岸ニ有之、
一、浦御高札　壹枚。

高サ壹尺五寸五分。横七尺九寸。厚壹寸六分。

定

一、公儀之船ゟいふに不及、諸廻船ともに難風ゟ逢時ゟ助船出し、船破損せざる様、成程精を出すべき事。

一、船破損之時、其所近き浦之者、精を出し荷物船具等取揚へし。其取上所之荷物之内、浮荷物ゟ貳拾分一、沈荷物ゟ拾分一、但川舟ゟ、浮荷物ゟ三拾分一、沈荷物ゟ貳拾分一、取揚い者ニ遣にへき事。

一、沖にて荷物ゟぬる時ゟ、着船の湊ゟおゐて、其所之代官手代庄屋出合穿鑿をとけ、船ゟ相殘荷物船具等之分、證文ヲ出すべき事。

附り、船頭浦之者と申合、荷物ぬすミ取、ゟ紛ゐると僞り申ニおゐても、後日ニ聞といふとも、船頭ゟいふゟ不及、申合する輩に至るまて、其罪重かるへき事。

一、港ゟ永ゝ船を懸置輩あらゟ、子細を所之者相尋、日和次第早ゝ出船いたすへし。其上ニゐも難澁仕らゟ、何方之船ゟ承屆、近邊ゟ其地頭御代官、遠方ゟ御勘定奉行所迄、急度申達へき事。

一、御城米廻之刻、船具水主不足之惡船ニ是を積へからに、幷日和能節船破損ゟおゐても、船主船頭曲事ゐるへし。物ゐ理不盡成義申掛、又ゟ私曲こゝをゐるゟおゐても、申出へし。縱同類といふとも其科ゆるされ、御褒美を下さるへき事。

一、自然寄船幷荷物流來るおゐても、取揚へし。半年過迄荷主あれなきるおゐても、揚置之輩これを取へし。若右之日數過荷主出來ゐるといふともこれをかへにへからに。然りといふとも、其所之地頭代官差圖受へき事。

一、博奕惣ゐ賭之勝負堅停止たるへき事。

右之條ゝ可相守之。若於相背も、可被行罪科もの也。

正德元年五月　日　　奉　行

右も先年深川中嶋町ニ建有之ゆ處、元祿七戌年川口攝津守樣、能勢出雲守樣御懸りニゐ、町內河岸先石垣際より出幅九尺七寸此坪數四坪、御入用を以御高札場に御築立有之、當町幷同所富吉町、相川町ゐ見守被仰付、當時御修復等御入用ニ御座ゆ。

一、同所ニ有之添御高札　壹枚。

高サ壹尺六寸三分。橫四尺九寸。厚壹寸七分。

前ゝより浦ゝ高札相建。

公儀之船も不及申、諸廻船とも、猥成義無之樣ニ被仰付ゆ處、遭難風ゆ節も、所之者共船之助ニも不相成、却ゐ破船ゆ樣ニいたし、懸荷物を刎させ、或も上乘船頭ゑ申合、不法之義共有之樣ニ相聞不屆ニゆ。御料も御代官、私領も地頭ゑ常ゝ遂吟味、毛頭不埒不仕樣ニ急度可被申付ゆ。若此上不埒之義於有之も、後日相聞ゆ共、其ものもいふよ及ばず、所之者迄、可被行罪科、其上其所之御代官地頭まで可爲越度事。

一、御城米近年破船多くゆニ付、今般諸事相改、別ゐ大切ニ可仕旨申渡し、船足之儀も深く不入樣ゑ、大坂船も大坂奉行、其外國々も其所支配之御代官より、船足定之通極印を打、船頭水主之人數を不減少樣ゑ急度申付、令運漕啓ゆ。依之湊ニ寄ゆ船之分も、船頭水主人數幷船足極印之通無相違哉、送り狀に引合、急度相改、帳面ニ記し置、上乘船頭印形致させ、右書物其所ニ留置、御料も御代官、私領も地頭ニ差出之、御代官幷地頭より御勘定奉行まて可被差出ゆ。且又極印ゑ船足深く入ゆ船有之ゆ俵數委細ゑ改之、御城米之外、船頭私之運賃を取、他之米穀或も商賣之荷物等積入ゆ歟、又も水主人數定之內令減少ゆ荷物も、其所ニ取揚置、水主人數不足之分も、其所ニて慥成水主雇せ爲出船、其上ニゐ右之譯早速御勘定奉行ニ可訴事。

一、破船有之節、浦之者出會、荷物船具等取上ゆ刻、盜取ゆ歟、又も不屆之仕方於有之も、船頭より不隱置有躰ゑ早速可訴之事。

右之條ゝ、急度可相守。若違犯之輩於有之も、詮儀之上、可被行罪科、不吟味之子細もゆも、其所之支配之御代官又も地頭迄、可爲越度ゝその也。辰八月。

右も、正德貳辰年松野壹岐守樣、坪內能登守樣御掛りニゐ、浦御高札際ニ御建有之、是又御修復等御入用ニ有之、當町幷同所富吉町、相川町ニ見守被仰付ゆ。

一、舊家

右先祖之儀、舊記も天明六午年中類火之節燒失いたし、相譯り不申ゆ得共、本家之義も、往古ゑ紀伊國ニ住居致ゆ由。本家苗字熊井ゑ申、名前も相譯り不申ゆ得共、紀州家ニ仕ゆ由。私ゑ六代以前理左衞門義も、

名主　當町理左衞門

相川町

其節本家之次男ニ而、御當地ニ罷出、本家之名を名乗、酒井雅樂頭様、御屋敷内ニ罷在い得共、御家來ニも無之、寛永六巳年當町開發いたし、名主役相勤い處、實子無之いニ付、國許本家之實甥引取養子相續人ニいたし、則二代目理左衛門ニ而、同人義國許實家之弟名前不知呼寄、同居爲致置い處、右之者西御丸表御坊主ニ被召出、子孫當時熊井宗甫ゟ申相勤罷仕い旨、先ゝより申傳い得共、祖ゝ父之代より國元通路不致、當時本家相續人之有無相譯り兼申い。

深川相川町（○市内深川區。）

一、町内起立之儀も、熊井町同様、寛永六巳年當名主新兵衛ゟ拾三代以前開發人新兵衛外七人、地所築立之儀、御代官伊奈半十郎様ニ奉願い處、願之通被仰付、同年築立出來之上、惣名獵師町ゟ唱、當町之儀、右新兵衛名主役相勤罷在、住居之最寄を以、自分名之町銘相附、新兵衛町ゟ唱、御菜御用其外諸役相勤、無年貢地ニ御座い處、寛文十戌年伊奈半十郎様御縄入有之、御年貢上納被仰付、元祿八亥年六月四日酒井河内守様、安藤對馬守様再檢地有之い砌、當町之分、高拾三石三斗五升四合、此反別壹反壹畝八歩ニ御定有之、其砌町銘之儀ゟ相川町ゟ申ニ付相唱い儀ニ御座い。其後正德三巳年町御奉所御支配ニ相成、地方も前ゝ之通御代官所ニ而、當時兩御支配ニ御座い。此餘之儀も、委細熊井町ゟ申上い通ニ御座い。

一、熊井町續飛地之儀も、起立ゟ飛地ニ有之、諸町之内ニ有之い。飛地之儀も、熊井町續飛地之方、地先道式貳拾間幅四間此坪數九拾坪之地所、先年町内町屋敷ニ而、家作川岸迄建續有之、諸町表通往還袋地ニ相成居い而不辨利ニ付、相對を以諸町ニ讓渡、右町内道式ニ致し、西之方ニ往來相附、右代り地面、諸町之中程ニ而、間口三間三尺九寸裏行拾八間貳尺壹寸此坪數六十六坪貳合之地面壹ケ所、諸町ゟ讓請申い。尤右年月之儀も、書留燒失仕、委細之儀も相分り不申い。

濱十三ケ町　ゑさば

一、右飛地河岸通、長貳間四尺貳寸、奥行貳間此坪數五坪四合之場所、土藏建有之、去ル文政七申年中ゟ月ゝ壹坪ニ付銀壹分宛上納仕い。

一、里俗之唱、町内并外拾貳ケ所漁師共住居之處、濱拾三ケ町ゟ相唱い。且町内蠣渡世之者住居致居い場所ニ付、蠣店ゟ唱い。又漁師共方ニ而も ゑさばとも申唱い。熊井町續飛地之分、里俗相川半町ゟ唱申い。右も間數三拾間餘之場所ニ付、相唱申い儀ニ御座い。

一、川之儀も、東之方諸町ゟ町内飛地地先を西之方大川通ニ流落申い。幅六間有之、名目無御座、堀割年月之儀も相分り兼い得共、寛永六巳年地所起立之節ゟ堀割有之い旨申傳ニ御座い。

一、熊井町續飛地ゟ中嶋町ニ渡ル橋壹ケ所、

長四間。　幅九尺。

右橋名目無之、前之川ニ懸渡有之、起立年月等相分り不申い得共、寛文元丑年御入用を以御掛替有之い旨申傳、其後寛永貳酉年十二月中假橋御懸渡、同六丑年八月中本橋御懸替有之、并當時町内中嶋町、熊井町、富吉町右四ケ所ニ而見守被仰付い。

一、地方も御代官御支配ニ而、武州葛飾郡西葛西領深川獵師町之内相川町ゟ相唱、當時山田茂左衛門様御代官所ニ御座い。

一、元祿八亥年御檢地御役人御姓名、委細熊井町ゟ申上い。

佐賀町

深川佐賀町〇市内深川區。

一、町内起立之儀ハ、同所熊井町同様、貳百壹ヶ年以前寛永六巳年、開發人藤左衛門、次郎兵衛外六人ゟ地所築立之儀御代官伊奈半十郎様ニ願出ゆ處、願之通被仰付、同年築立出來、惣名深川獵師町ゟ唱、右藤左衛門、次郎兵衛儀名主役相勤、住居之最寄を以、自分名前之町銘相付、上之橋之方を次郎兵衛町、中之橋ゟ下之方を藤左衛門町ゟ唱、尤御用等ハ右小譯ニ不ㇾ拘開發人共互ニ申合、御菜御用、其外諸役相勤、無年貢地ニ御座ゆ所、寛文十戌年伊奈半十郎様御縄入有ㇾ之、御年貢上納被仰付、元祿八亥年六月四日酒井河内守様、安藤對馬守様再御檢地有ㇾ之ゆ砌、當町高四拾六石九斗七升貳合此反別三丁五畝廿三歩ニ御定有ㇾ之其砌獵師町銘改ゆ節、當町之儀ハ、肥前國佐賀之湊ニ形チ似寄ゆゟ申儀ヲ以、佐賀町ゟ相改申ゆ。其後次郎兵衛義ハ名主役御免ニ相成ゆ得共、年數相立書留無ㇾ之、相譯り不ㇾ申ゆ。夫ゟ佐賀町ハ藤左衛門壹人ニ付支配致罷在ゆ處、元祿十一寅年十二月中、町内北之方松平陸奥守様町並御抱屋敷八百四拾貳坪御用地ニ被召上、陸奥守様御屋敷地ニ讓り當時上之橋向松平陸奥守様御藏屋敷地所之内大川通之分。右代地無ㇾ之、高潰ニ相成申ゆ。且又同年八月中伊奈半左衛門様御懸りニ付、永代橋御掛渡之節、當町河岸地面之内貳百十七坪橋臺御用地ニ被召上、同十二卯年四月中御普請御奉行深津八郎右衛門様御懸りニ付、上之橋川筋新規堀割、中之橋下之橋川幅堀廣ヶ之砌、當町地面千七百四十四坪御用地ニ被召上ゆ處、右川筋堀割幷堀廣御用地之分ハ、同十三辰年十一月元木置場之内堀川町續ニ付千百七拾坪、今川町續ニ付四百九十坪、蛤町續ニ付八十五坪、黑江町續ニ付百三十一坪九合、代地被下置、永代橋際御用地之分ハ、同十五午年海手石垣通入船町續ニ付貳百十七坪、代地被下置ゆ。尤右之内今川町續堀川町續貳ヶ所代地之儀ハ、當町續合之地所ニ付、其砌ゟ代地ゟ相唱不ㇾ申、當町之内ニ籠罷在、黑江町續蛤町續入船町續右三ヶ所之分共、佐賀町三代地ゟ相唱申ゆ。且又元祿十三辰年中、當町續當時稲荷小路南側之内元神田佐久間町外三十四ヶ町材木置場拜領屋敷御取拂跡百六十五坪御拂地ニ相成ゆニ付、當町町人御買受奉願ゆ所、享保十七子年九月中、筧播摩守様御檢地見取町屋敷ニ被仰付、同年新高入ニ相成、御年貢上納致、尤町内續合之地所ニ付、當町之内ニ籠り申ゆ。其後正德三巳年町奉行所御支配ニ相成、地方ハ先ヶ之通御代官所ニ付、兩御支配ニ相成申ゆ。尤右入船町續代地之儀ハ、寛政三亥年中高波之節家作押流レ荒地ニ相成ゆニ付、同六寅年右貳百十七坪之場所御買上ニ相成申ゆ。右之通高反別增減有ㇾ之、當時ハ高四十三石貳斗八升、此反別三丁六反廿歩ニ相成申ゆ。尤此外當所起立委細之儀ハ、熊井町ゟ申上ゆ通りニ御座ゆ。

但し、開發人藤左衛門跡藤右衛門義子孫相續仕、名主役相勤罷在ゆ所、八ヶ年以前巳年中御仕置後、月行事持ニ相成、翌午年七月四日地主ハ私ニ支配付被仰付、同十二月廿四日町方之儀ハ、當分私ニ御預支配被仰付ゆ。且又入船町續代地跡之儀、藥草御植付場ニ相成ゆゟ、差障り無ㇾ之哉之趣、御代官大貫治右衛門様ゟ御尋有ㇾ之ゆ所、右地所外々ニ相渡りゆ儀ニ御座ゆハヽ、元當町地内之儀ニ付、町内ゟ手入仕、見取場ニ被仰付ゆ様、右御役所ニ願出、文政五午年中ゟ土地相應之見取永上納仕ゆ儀ニ御座ゆ。

一、南之方相川町續飛地之儀ハ、起立ゟ右場所ニ有ㇾ之、右ハ町内續當時御船手古屋平左衛門様御組屋敷有ㇾ之場所、先年ハ淨土宗玄信寺、眞言宗法乘院右貳ヶ寺共、獵師町起立ゟ相建有ㇾ之、此分當町之地所ニ付、右飛地先年ハ町内ニ續合ゆ場所ニ有ㇾ之所、寛永十八巳年中玄信寺、法乘院之地所御用地ニ被召上、其節之御船手方天野孫左衛門様御役屋敷ニ相渡りゆ由申傳ゆ。右故當時飛地ニ相成申ゆ。尤右貳ヶ寺之儀ハ、深

川寺町ニ茂替地被下置、當時同所ニ罷在い。

一、當町（深川佐賀町。）之内高野山金剛三昧院末眞言宗清光寺義も、町内起立之節ゟ當所ニ罷在、元祿八亥年御檢地之砌、一畝歩境内除地ニ被仰付、同十六未年中寺社御奉行永井伊賀守様ニ同寺ゟ奉願、屋敷御改赤井六兵衛様、瀧川清右衛門様、伊奈半左衛門様双方御掛ニ茂、六歩之所猶亦右清光寺拜領地ニ相成申い。尤右替地同所續明地ニ茂被下置いニ付反別増減無之い。且亦先年ゟ當町之内拾貳歩同寺持添地ニいたし、御年貢上納、町並之諸役相勤申い。

一、町内里俗之唱

中之橋川筋を中之堀と唱い。

下之橋左右河岸通り油堀と唱い。

上之橋際ゟ中之橋迄　上佐賀町。

中之橋ゟ下之橋迄。　中佐賀町。

下之橋ゟ南木戸際迄。　下佐賀町。

右中佐賀町中程横町を稲荷小路と相唱い義も、右横町ニ佐賀稲荷有之いニ付、右之通相唱申い。中之橋南河岸通東之方を八戸（ヤト）前（マヘ）と唱い。右も先ゝゟ右場所ニ土藏八戸前建有之い義を以相唱申い。

一、北之方上之橋川筋之儀も、東之方今川町ゟ地先を流レ、西之方大川通ニ落、川幅貳拾間有之、里俗仙臺堀と唱い儀も、右川北之方ニ陸奥守様御藏屋敷有之い故、右之通相唱申い、尤川筋之義一躰も、先年清住町南之方ニ有之、當時川筋之場所も町内續合之町並地ニ茂、右地面後ロ東之方地境も元木置物入堀有之い所、元祿十二卯年深津八郎右衛門御掛りニ茂、當町之内地面被召上、右木置場跡入堀ニ續當地面幷往還共横堀割ニ相成、右入堀ゟ大川通ニ流落い儀ニ相成申い。

一、中之橋川筋之儀も、東之方中川町ゟ地先を流、西之方大川通ニ落、川幅拾間有之、堀割之儀も、年月等相譯り不申い得共、寛永六巳年地所起立ゟ堀割有之旨申傳ニ茂、其後元祿十二卯年前書深津八郎右衛門様御掛りニ茂、町人所持屋敷御用地ニ被召上、川幅十間ニ御堀廣ケ在之い。

一、下之橋川筋之儀も、東之方堀川町ゟ地先を流、西之方大川通ニ落、川幅拾五間有之。堀割年月等相譯り不申い得共、前書中之橋川筋同様ニ茂、元祿十二卯年川幅十五間ニ御堀廣ケ在之、里俗油堀と唱い儀も同所南河岸通東之方當時松平備中守様御屋敷續深川松賀町町屋ニ地油商人會所有之、右川通油荷物出入運送致いニ付、右名目を付い義ニ御座い。

一、上之橋　長貳十間。　幅三間。

但、兩橋臺無之、川幅ニ相掛申い。

一、中之橋　長六間。　幅三間。

但、兩橋臺開板　幅五間。　長貳間宛。

一、下之橋　長十壹間。　幅三間。

但、兩橋臺石垣　幅四間。　長貳間宛。

右三橋之内、上之橋も元清住町南之方ニ先年有之い川筋ニ相掛、中之橋下之橋も、當時之川筋ニ掛りい處、寛永十八巳年大火之節、諸材木等燒失致、御用御差支ニ相成、其上所ゝ町中ニ材木類高積仕置い由ニ茂、

河岸附ニ而諸材木炭薪等商賣仕ル者共致ニ住居ニ神田佐久間町、同所久右衛門町、日本橋邊本材木町、三十間堀、本八町堀邊、都合三拾五ヶ町之町人共、深川木置場ニおいて揚場屋敷被下置ル。右屋敷之儀も、當町東之方ニ續合ル場所ニ有之、川筋通船幷材木筏等乗込ル砌、右橋下狹ク差支ル哉、三橋共右三十五ヶ町材木問屋共入用を以、通路差支無ニ之樣兩橋臺築上ケ、其砌ゟ材木問屋共ニ而懸來ル處、元祿十二卯年右木置場屋敷之分御用地ニ被召上ルニ付、同年築地御奉行深津八郎右衛門樣御掛ニ而、上之橋川筋も町内地面内ニ御堀替有之、同年右堀割之場所新規橋御掛渡、當町上之橋ゟ相唱、幷中之橋之儀も、築地方御入用を以御懸替ニ有之ル儀ニ御座ル。其後正德三巳年町御奉行所御掛ニ相成、當時御入用以出來仕ル。

一、地方之儀も、御代官御支配ニ而、武州葛飾郡西葛西領深川獵師町之内佐賀町ゟ相唱、當時山田茂左衛門樣御代官所ニ御座ル。

一、元祿八亥年御檢地御役人御姓名、委細熊井町ゟ申上。

一、町内西側河岸地面續永代橋際ニ有之御高札場壹ヶ所。

一、切支丹宗門之御高札　壹枚。

高サ壹尺九寸。横貳尺一寸五分。厚サ壹寸三分。

一、火事出來ル節之御高札　壹枚。

高サ壹尺壹寸。横貳尺。厚サ壹寸三分。

一、火戌付ルもの之御高札　壹枚。

高サ壹尺壹寸。横貳尺壹寸。厚壹寸三分。

右も正德三巳年中、御代官伊奈半左衛門樣御掛ニ而、御支配内ニ相建ル筈之所、同年閏五月中、獵師町之儀町御奉行所御支配ニ相成ルニ付、坪内能登守樣御懸りニ而、當所地先御見分有之ル所、荷物揚場之障ニ相成ル間、場所替相願、右永代橋付地所ニ相建、獵師町小譯ヶ八ヶ町幷越中島町ニ見守被仰付、當時修復之節、御高札同雨覆駒寄とも一式右九ヶ町ゟ入用差出、御書替奉願ル儀ニ御座ル。

一、右場所ニ建添有之ル。

在々ニて鐵炮打ル者訴人之御高札壹枚。

高サ壹尺壹寸。横貳尺壹寸。厚サ壹寸三分。

右も貞享元子年九月二日伊奈半左衛門樣御懸りニ而、相川町之内里俗相川半町角屋敷河岸地面ニ初而相建、其後享保六丑年二月中大岡越前守樣御懸り相成、御文言御書替之上、當時之場所ニ御建添ニ相成、獵師町小譯ヶ八ヶ町幷越中島町ニ見守被仰付、當時御修復之節も、御高札同雨覆駒寄共一式、右九ヶ町ゟ入用差出、御書替奉願ル儀ニ御座ル。

切支丹宗門之儀御高札御文言寫

定

きりしたん宗門も累年御制禁ゟり、自然不審成者これあらむ申出へし。御ほうひとして、

もてきんの訴人　銀五百枚。

いはまんの訴人　銀三百枚。

立かへる者訴人　同斷

同宿宗門の訴人　　銀百枚。

右之通下さるへし。たとひ同宿宗門之内たりといふとも、申出る品より銀五百枚下さるへし。かくし置他所よりあらはるゝまおゐても、其所之名主幷五人組迄一類共より、可被行罪科者也。

正德元年五月　日　　奉　行

火事出來之節御高札御文言寫

定

一、火事出來之時、みさりより馳集はへらす。

但、役人差圖之者も各別さるへき事。

一、火事場へ下々相越、理不盡ニ通まおゐても、御法度之旨申きかせ、通すへからに。承引かきものも搦捕へし。萬一異儀及もゝ討捨たるへき事。

一、火事場其外いつきの所よても金銀諸色ひろいとらも、奉行所まて持參すへし。若隱置他所よりあらはるゝまおゐても、其罪重のはへし。ゑとひ同類さりといふとも申出る輩も其罪をゆるされ、御褒美下さるへき事。

右條々可相守之。若於相背も、可被行罪科者也。

正德元年五月　日　　奉　行

火を付ゆその之御高札御文言寫

定

一、火付る者をしらも早々申出へし。若かくし置まおゐても其罪重るへし。たとへ同類さりといふとも、申出まおいても其罪をゆるされ、急度御褒美下さるへき事。

一、火を付る者を見付はこれを捕へ、早々申出へし。見のがしますへからさる事。

一、あやしきものあらばせんさくをとけて早々奉行所に召連來るへき事。

一、火事之節地車たいもち車まて荷物をつゝのくへからも。鑓、長刀、刀、脇差等ぬき身にもへからさる事。

一、車長持停止す。たとひあつらへいものありとも造るへからも。一切に商賣すへからさる事。

右條々可相守之。若於相背も、可被行罪科者也。

正德元年五月　日　　奉　行

在々ニ而鐵炮打ゆ者訴人之御高札御文言之寫

在々まて若鐵炮打ゆ者有之ゆもゝ、申出へし。幷御留場之内まて鳥を取申者、捕ゆ歟見出しゆもゝ、早々申出へし。急度御褒美可被下置者也。

享保六年二月　日

一、町内下橋十間川入口ニ有之

御高札　　壹枚。

右も町内下之橋里俗油堀入口ニ有之。建始之儀も、正德三巳年七月中木場町ゟ願出、同年右之場所に相建、當時修復見守等之儀も、右町材木問屋方ニ而取計申ゆ。

御文言寫

定

一、深川御材木幷商人之諸材木等外ニハ流出る時、大川ゟ外之内堀ニ而一切ひろハ取へからす。御用木も いふニ及もハス、商人之材木ゟりといふ共、斷次第返へき事。

一、大川筋又も海邊ニハ流出る木も、うきしつみ其品ニより、とをるくる材木之内、浮木も三十分一、沈木も二十分一、御定のことく取揚る者ニハ遣へき事。

一、深川材木積置所ゟ堀入ハ川口ニ、猥ニ舟ヲ繫、船路ヲとるへからさる事。

右可ニ相守一、此旨若於ニ相背一も、可レ爲ニ曲事一そのもの也。

正徳元年五月　日　　奉　行

佐賀町代地

深川佐賀町代地〇市内深川區。

右代地之儀も、元祿十二卯年四月中築地御普請御奉行深津八郎右衛門様御懸りニ而、元地上之橋川筋新規御堀割有レ之、中之橋下之橋兩川幅御堀廣ケ有之ハ節、元地町屋敷合千七百六十四坪御用地ニ被ニ召上一ハ所、同十三辰年中、右貳ケ所之代地被ニ下置一、佐賀町代地ゟ相唱申ハ。其外委細之儀も元地ゟ申上ハ通ニ御座ハ。

一、間數六間壹尺。

東西ハ間口六間壹尺。裏幅六間三尺。南北ハ裏行廿間。此坪數百三十一坪九合

黑江町續代地

清住町

一、北之方地先を相流ハ川筋之儀も、寛永年中ゟ堀割有レ之旨申傳、幅六間半有レ之、東之方黑江町ゟ西之方ハ流落申ハ。

一、間口六間

東西ハ間口六間。裏幅五間三尺貳寸。

南北ハ東裏行八間五尺貳寸。西裏行八間三尺七寸。　此坪數八十五坪。

蛤町續代地

一、當所東之方蛤町之内干鰯場有レ之ハニ付、右場所幷當所を里俗江川場ゟ唱ハ。尤右之譯相譯り不レ申ハ得共、川向黑江橋通を黑江川ゟ申、右川筋迄汐流入ハニ付、江川場ゟ唱ハ儀ニも有レ之哉、委細も蛤町ゟ可ニ申上一ハ。

一、北之方入堀之儀、先年も幅三間程有レ之ハ處、享保年中干鰯問屋共東之方蛤町之内ヲ干鰯置場ニ相願、入堀之儀も右問屋方ニ而左右道式之地所を堀廣ケ、當時幅十間餘有レ之、幷同所ニ懸りハ橋之儀も、是亦其砌ゟ蛤町一手ニ而懸渡ハニ付、掛始等委細之儀も蛤町ゟ可ニ申上一ハ。

深川清住町〇市内深川區。

一、町内起立之儀も、熊井町同様、寛永六巳年開發人彌兵衛外七人地所築立之儀御代官伊奈半十郎様ニ奉願ハ處、願之通り被ニ仰付一、同年築立出來之上、惣名深川獵師町ゟ唱、當町之儀も、右彌兵衛名主役相勤、住居之最寄を以自分名前之町名相付、彌兵衛町ゟ唱、御菜御用其外諸役相勤、無年貢地ニ御座ハ處、寛永十戌年伊奈半十郎様御縄入有レ之、御年貢上納被ニ仰付一、元祿八亥年六月四日酒井河内守様・安藤對馬

守様再御檢地有之、其砌當町分高拾石六斗七升六合、此反別八反八畝廿九歩ニ御定有之、町名之儀も清住町与相改申ハ。尤何故右様相唱ハ哉相分不申ハ。其後元祿十丑年十一月中、町内北ノ方榊原式部大輔様御所持之町屋敷貳反八畝八歩、同町町人所持之屋敷貳畝二十四歩、都合三反壹畝貳歩、此高三石七斗貳升七合、御用地ニ被召上、小笠原彦太夫様御屋敷ニ相渡、同十一寅年十二月中町人所持屋敷六畝二歩、此高七斗貳升八合、御用地ニ被召上、松平陸奥守様御屋敷ニ相渡申ハ。其後元祿十四巳年右町人所持屋敷御用地之分、扇橋町西側ニ而元坪ハ貳歩増貳畝貳十六歩代地被下置、式部大輔様御所持町屋敷御用地之分、寶永三戌年中元木置場之内永堀町續ニ而元坪ハ壹歩増貳反八畝九歩代地被下置ハ。右貳ヶ所之分清住町代地与相唱、陸奥守様御屋敷御用地之分ハ潰地高引ニ相成申ハ。其後彌兵衛義ハ、名主役御免被仰付、月行事持ニ相成申ハ。尤年月相知不申、其後正德三巳年町御奉行所御支配ニ被仰付、地方ハ前々之通り御代官所ニ而、兩御支配ニ相成申ハ。且又安永九子年六月、町内北之方榊原式部大輔様御所持町屋敷五畝廿五歩此高七斗之地所、猶亦御用地ニ被召上、靈運院境内ニ相渡ハニ付、此分高引、當町高五石五斗貳升二合反別四反六畝壹歩ニ相成申ハ。其後天明八申年同所中島町名主忠太郎ハ支配付被仰付ハ處、右忠太郎儀、文化八未年名主役御免ニ付、其節ゟ組合持ニ相成申ハ。其餘之義ハ、委細熊井町ゟ申上ハ通りニ御座ハ。

但、右彌兵衛子孫之儀ハ、相知不申ハ。

一、町内地方之義ハ、御代官所ニ付、武州葛飾郡西葛西領深川獵師町之内清住町与相唱、當時御代官山田茂左衛門様御支配ニ御座ハ。

清住町代地

一、元祿八亥年御檢地御役人御姓名、委細熊井町ゟ申上ハ。

一、町並抱屋敷壹ヶ所　　松平越中守様御家來　内藤彌藤左衛門

表間口田舍間拾九間三尺。裏幅同貳十間。南北奥行拾八間。此坪數三百五十五坪五合。

右ハ文化十二亥年八月中町人所持之屋敷、右同人被讓請、抱屋敷ニ相成、住居被致ハ。

一、町内地先川岸之内長四十五間、幅壹間三尺、此坪數六十七坪五合之處、御公儀地ニ有之物揚場幷物置場等相建、格別之辨利ニも御座ハ間、爲冥加五ヶ年以前文政七申年中ゟ壹ヶ月壹坪ニ付壹分宛上納仕ハ。

一、町内川岸長七十五間貳尺八寸之處、石垣。右ハ地先銘々自分修覆ニ御座ハ。
深川永堀町續深川清住町代地○市内深川區。

一、町内起立之儀ハ、元地之内榊原式部大輔様御所持町屋敷、元祿十丑年十一月中御用地ニ被召上ハ分、寛永三戌年當所元木置場之内ニ而、右代地貳反八畝九歩被下置、見取場ニ有之ハ處、享保十七子年九月中筧播磨守様御檢地有之、町並屋敷ニ被仰付、高入ニ相成、三石三斗九升六合之高ニ御定有之ハ。

一、町内前通り川之儀ハ、廿間川横川ニ御座ハ。川幅拾間。
深川扇橋町續深川清住町代地

但し、川岸通り長四拾五間之處、石垣。地先銘々自分修覆ニ御座ハ。

一、町内起立之儀ハ、元地之内町人所持屋敷、元祿十丑年十一月中御用地ニ被召上ハ分、同十四巳年當場所ニ而貳畝廿六歩、右爲代地被下置、見取場ニ有之ハ處、享保十七子年九月中筧播磨守様御檢地有之、

町並屋敷ニ被仰付、高三斗四升七合ニ御定有之ゆ。

深川富吉町（市内深川區）。

一、御城ゟ東之方ニ當り凡三拾壹町程。

一、町内起立之儀ハ、熊井町同様、寛永六巳年開發人助十郎外七人地所築立之義御代官伊奈半十郎様ニ奉願ゆ處、願之通被仰付、同年築立出來之上、惣名深川獵師町と唱、當町之儀、右助十郎名主役相勤、住居之最寄ヲ以自分名前之町銘付、助十郎町と唱、諸役相勤、無年貢地ニ御座ゆ處、寛文十戌年伊奈半十郎様御縄入有之、御年貢上納被仰付、元祿八亥年六月四日酒井河内守様、安藤對馬守様再御撿地有之ゆ砌、當町分高九石九升貳合此反別七反五畝貳拾三歩ニ御定有之、且又其砌定町銘之儀も富吉町と相改申ゆ。尤何故右様相唱ゆ哉相分り不申、且又元祿十五午年迄、町内諸町續南側地所内ニ一向宗西念寺と申寺有之、右境内町内御除地ニ成三畝壹歩有之ゆ處、同年月日不知、同寺儀同所黑江町御年貢地之内ニ引移ゆニ付、右黑江町境内御除地ニ相成、當町分同寺御除地之分振替り御年貢地ニ被仰付、三斗六升四合新高入ニ相成ゆニ付、當町高九石四斗五升六合反別七反八畝貳拾四歩ニ相極り申ゆ。其後助十郎儀ハ如何ニ相成ゆ哉、書留等燒失仕、是又相成り不申、正德三巳年町御奉行所御支配ニ相成、地方も前々之通御代官所ニ成當時兩御支配ニ御座ゆ。且又年代相分り不申、權之丞と申者名主役相勤罷在ゆ處、天明七未年中御科被仰付ゆニ付、其砌月行事持ニ相成罷在ゆ處、翌申年六月中同所中嶋町名主忠太郎ハ支配付被仰付ゆ。然ル處右忠太郎儀、文化八未年中名主役御免被仰付、其節ゟ跡組合持ニ被仰付ゆ。此餘之儀も、委細熊井町より申上ゆ通ニ御座ゆ。

一、火之見櫓　壹ヶ所。

高サ貳丈八尺。根開キ壹丈貳尺。

右も町内河岸先表田舍間三間、奥行南北共八間四尺三寸之場所ニ建有之、享保年中（富吉町、熊井町、相川町、諸町）四ヶ町申合、願濟之由ニ成、書留等燒失仕ゆ。當時も右四ヶ町持ニ御座ゆ。

一、南側之内正源寺續地面。

表間口貳間。裏幅同斷。南北裏行貳拾間壹尺。此坪四拾坪三合貳勺八才。

右も正源寺入口手狹ニ付、享保十三年六月ゟ同寺ハ右之分貸置ゆ分ニ御座ゆ。

一、町内除地

東西三拾六間壹尺貳寸。東裏行貳拾間三尺。西裏行三拾三間。南裏幅拾八間。此坪七百貳拾貳坪ニ相成申ゆ。

右正源寺義、寛永六年起立之節ゟ同寺境内御除地ニ相成申ゆ。委細之儀も同寺ゟ申上ゆ。

一、町内ゟ北川町ハ渡ル

福嶋橋

長七間。幅貳間。

右掛渡し年月名目之分譯相分り不申ゆ得とも、元祿十六未年三月一日御入用ヲ以御掛替有之ゆ由、已來御入用橋ニ御座ゆ。

（富吉町、諸町、北川町、中嶋町）四ヶ町ニ成見守仕ゆ。

一、東横町道幅四間之内河岸通り

物置場　壹ヶ所。

長サ八間。幅貳間。此坪拾六坪。

右ハ文政七申年九月物置場ニ願上ヰニ付、河岸冥加ヶとして壹ヶ月壹匁六分ツヽ上納仕ヰ。

一、町内地方ハ御代官御支配ニ付、武州葛飾郡西葛西領深川獵師町之内富吉町ヶ唱ヰ。

一、元祿八亥年御檢地御役人御姓名、委細熊井町ゟ申上ヰ。

深川諸町（市内深川區。）

一、御城ゟ東之方ニ當り凡三拾貳町程。

一、町内起立之儀ハ、熊井町同樣、寛永六巳年開發人彦左衞門外七人地所築立之儀御代官伊奈半十郎樣ニ奉願ヰ處、願之通被仰付、同年築立出來之上、惣名深川獵師町ヶ唱、御菜用其外諸役相勤、無年貢地ニ御座ヰ處、寛文十戌年伊奈半十郎樣御繩入有之、御年貢上納被仰付、元祿八亥年六月四日酒井河内守樣、安藤對馬守樣再御檢地有之ヰ砌、當町分高四石三斗六升四合、此反別三反六畝拾壹歩ニ御定メ有之、且又獵師町一統町銘相改ヰ砌、當町之儀ハ、彦左衞門家名諸ヶ唱ヰニ付、諸町ヶ相改申ヰ。其後彦左衞門儀ハ、名主役御免ニ相成ヰ處、數年相立書留等相譯り不申ヰ得共、私四代以前理左衞門ニ支配付被仰付、正德三巳年御奉行所御支配ニ相成、地方ハ前々之通御代官所ニ而、當時兩御支配ニ御座ヰ。此餘之儀ハ委細熊井町より申上ヰ通ニ御座ヰ。

一、町内惣間數田舍間六拾壹間三尺五寸、東西ニ間口六拾壹間三尺五寸、裏幅五拾七間壹尺九寸、南裏行拾九間四尺九寸、南北ニ北裏行拾七間四尺八寸、惣坪數千百八坪四合。

一、町内地先河岸地之内長三拾八間壹尺五寸、幅貳間、此坪數五拾三坪九合貳勺物置場之儀ハ、御公儀地に有之處、年來物置等相建格別辨利ヶ御座ヰニ付、爲冥加五ヶ年以前文政七申年中より、壹坪ニ付月々銀壹分宛上納仕ヰ義ニ御座ヰ。

一、川之儀ハ、東三方富吉町ゟ町内地先を流、西之方相川町地先大川通ニ流落申ヰ、幅六間有之、名目無御座、堀割年月之儀ハ相譯り兼ヰ得共、寛永六巳年地所起立之節ゟ堀割有之ヰ申傳ニ御座ヰ。

一　富吉町ゟ北川町ニ渡ル

福嶋橋　長サ七間。幅貳間。

右ハ前ヽ川ニ懸渡有之、起立年月等相分不申ヰ得共、元祿十六未年三月二日御入用ヲ以御掛替有之、富吉町、北川町、中嶋町ニ見守被仰付ヰ。

一、町内西木戸際相川町地先道式貳拾貳間半餘、幅四間、此坪數九拾坪數九拾坪之地所、先年ハ相川町並屋敷ニ而家作建續有之、當町表通り住還袋地ニ相成居不辨利ニ付、相對ヲ以右地所相川町ゟ讓り受道式いふし、西之方ニ往來相付、右代り地面町内中程ニ而間口三間九寸、裏行拾八間貳尺壹寸、此坪數六拾貳坪六合餘之地面壹ヶ所、相川町ニ相渡し申ヰ。尤右年月之儀ハ書留燒失仕、委細之儀ハ相分り不申ヰ。

一、地方ハ御代官御支配ニ而、武州葛飾郡葛西領深川獵師町之内諸町ヶ相唱、當時山田茂左衞門樣御代官所ニ御座ヰ。

大嶋町

一、元祿八亥年御檢地御役人御姓名、委細熊井町ゟ申上い。

深川大嶋町○市内深川區。

一、御城ゟ東之方ニ當凡三拾三町程。

一、町内起立之儀ハ、同所熊井町ゟ申上い趣ニ付、寛永六巳年中彌兵衛・治郎兵衛・藤左衛門・新兵衛・利左衛門・助十郎・彦左衛門・助右衛門右八人、地所築立之義、御代官伊奈半十郎様ニ願之通被仰付、同年地所築立出來之上、惣名深川獵師町ゟ唱、當町之義ハ名主無之、其砌ゟ月行事持ニ付、町名大嶋町ゟ相唱申い。

右ハ新地出來以前ハ當地所南東之方海岸付ニ付、西北之方地窪ニ有之、嶋之形ニ相成居いニ付、相名付い哉ニ御座い。夫ゟ御茶御用其外諸役相勤、無年貢地ニ御座い處、寛文十戌年伊奈半十郎様御縄入有之、御年貢地ニ被仰付、元祿七戌年十二月十七日當名主助之丞九代以前助右衛門ニ支配付被仰付、同八亥年六月酒井河内守様・安藤對馬守様再御檢地有之、當町之高拾六石、此反別壹町三反四畝五歩ニ御定有之、其後正德三巳年町御奉行所御支配ニ相成、尤地方ハ前々之通御代官所ニ付、當時兩御支配ニ御座い。其餘委細之義ハ熊井町ゟ申上い通ニ御座い。且又正德元卯年五月中、越中嶋町之内御奥六尺衆拜領地ニ渡りい節、當町川岸屋敷之内中程ニ付拾九坪之處、橋臺御用地ニ被召上、越中嶋町ニ渡りい橋出來致、當所河岸地面續東角ニ付、右代地元坪之通被下置い。尤當町地續之義ニ付、其砌ゟ別段代地ゟ相唱不申、町内ニ籠り罷在い。且當所代地之義ハ、北之方蛤町之邊、東寄ニ付當町ニ續い地所、大猷院様御代御茶屋御用地ニ被召上、寛文二寅年中、右代地南之方川向越中嶋町續ニ付被下置、其後元祿十二卯年町内東之方地先川筋堀割ニ付潰地ニ相成、同十三辰年奥川町續ニ付代地被下置い。右貳ケ所ヲ大嶋町代地ゟ相唱申い。尤右越中嶋町續代地之義ハ、元祿八亥年御檢地後ニ付新高入ニ相成、反別貳反相增いニ付、當町高拾八石五升此反別壹町五反四畝五歩ニ相成申い。

一、町内惣間數貳百五拾八間九寸。

北側

東西ニ間口百拾九間壹尺七寸、裏幅百七間九寸、南北ニ西裏行貳拾三間九寸。東裏行貳拾七間。

南側西角

東西ニ間口百拾八間五尺壹寸、裏行百間四尺壹寸餘、南北ニ西裏行七間、東裏行七間四尺二寸。

同側東角

東西ニ間口貳拾間壹寸、裏幅貳拾間五尺壹寸、南北ニ西裏行八間、東裏行八間四尺。

惣坪數三千九百九拾壹坪九合。

一、隣町

東之方松平伊豆守様御下屋敷。西之方中嶋町（川向）、南之方越中嶋町、當町代地、定浚屋敷、北之方蛤町。

一、里俗之唱、當町并外拾貳ケ町獵師共住居之處、惣名濱拾三町ゟ唱い。

一、川々之義ハ、町内東南西之三方地先ヲ相流、里俗大嶋川ゟ相唱申い。南之方幅拾六間、西之方幅八間半、東之方幅八間、右南西之方二方ニ有之い川筋之義ハ町内起立之頃ゟ堀割有之、東之方ヲ相流い川々之義ハ、元祿十二卯年築地御普請御奉行深津八郎右衛門様御掛ニ付町内町人所持屋敷御用地ニ被召上、右

川筋御堀割有之い。

一、町内ゟ中嶋町に渡ル橋長七間。幅九尺。

右名目無之、掛始年月相知レ不申、寶永二酉年御掛替有之い。尤當町幷中嶋町にゟ見守仕い。

一、町内ゟ越中嶋町に渡ル橋

右も越中嶋町一手持に御座い間、委細之義も右町ゟ可申上い。

一、町内地方も、御代官御支配にゟ、武州葛飾郡西葛西領深川獵師町之内大島町ゟ相唱。當時御代官山田茂左衞門様御支配に御座い。

一、元祿八亥年御檢地御役人御姓名、委細熊井町ゟ申上い。

一、町内一手にゟ相勤い上覽魚獵之義も、享保二十卯年八月朔日惇信院様西御丸に被爲入い節、初ゟ簀引御用被仰付、其砌ゟ兩御丸様御三卿様魚獵上覽御用之節も、簀引又も投網長繩船活いな・せいこ・あかい・蚯蚓之類大小蜆蛤等撰立、御鳥見方ゟ御沙汰次第、御成先に差出し、尤蜆蛤之義も、御成之節に不拘御用被仰付い節も、直に御本丸に差上、右御手當等も前々ゟ御鳥見方御掛にゟ都度々々被下置い義に御座い。

深川大嶋町代地奥川町續壹ヶ所

一、御城ゟ東之方に當凡三拾五町程。

一、右代地之義も、元祿十二卯年築地御普請御奉行深津八郎右衞門様御懸にゟ、元地之内東之方川筋新規御堀割之砌、貳拾八坪之處御用地に被召上堀道式に相成、同十三辰年中元木挽町三丁目木置場之地所に

ゟ右代地に被下置い。

越中嶋町續壹ヶ所

一、御城ゟ東之方に當凡三拾三町餘。

一、右代地之儀も、先年元地續北之方町並屋敷之内、古來之儀にゟ坪數等書留無御座い得共、右地所大猷院様御代御茶屋御用地に被召上淺川邊にゟ一旦代地被下置い處、是又御船藏御用地に被召上い旨申傳、其後寛文二寅年六月廿五日越中嶋續にゟ右代地被下置い處、其砌水地にゟ家作出來兼、御支配幷御年貢等為無之い に付、追々地高に致、御代官伊奈半左衞門様御支配附に相願、御年貢上納致、元地に高入被仰付い様、度々御訴訟仕い處、享保二十卯年願之通被仰付、大嶋町分に相成、御年貢上納被仰付、同年ゟ町並に相成い義に御座い。尤右之節御檢地等無御座い。

一、當代地御代官御姓名其外之義も、委細元町ゟ申上い。且又代地之義も、一町に相立不申、自身番屋無之、万事元町に組合罷在い。

深川黒江町○市内深川區。

一、御城ゟ東之方に當り凡三拾三町程。

一、町内起立之儀も、同所熊井町ゟ申上い趣にゟ、當助之丞より拾壹代以前助右衞門外七人之者、寛永六巳年地所築立之儀、御代官伊奈半十郎様に願出い處、願之通被仰付、同年築立出來之上、惣名深川獵師町ゟ唱、當町之義も、助右衞門住居最寄に付、右町名主役相勤、自分名前之町銘相付、助右衞門町ゟ唱、御菜御看御用其外諸役相勤、無年貢地に御座い處、寛文十戌年伊奈半十郎様御繩入有之、御年貢地に被仰

付、元祿八亥年六月四日酒井河内守様、安藤對馬守様再御檢地有之、當町高貳拾四石九斗九升貳合、此反別貳町八畝八歩ニ御定有之、其砌獵師町一統町銘改ゆニ付、當町之儀も北之方川筋一圓黑江川ゟ唱ゆニ付、町名之儀も黑江町ゟ相改申ゆ。且又元祿十貳卯年築地御普請御奉行深津八郎右衞門様御掛りニゐ、南之方町屋裏通川筋堀割之砌、當町之内町屋敷貳反貳拾七歩右御用地ニ被召上、堀式ニ相成、同十三辰年中、當町久中橋向北之方ニゐ地面續西角元木挽町六丁目木置場之處、幷東角海邊新田之内ニゐ都合壹反壹畝貳歩、北川町續木挽町四丁目木置場之所ニゐ九畝廿六歩、代地に被下置ゆ。尤右之内久中橋向代地之儀も、當町續合之場所ニ付、當時代地ゟ相唱不申、當町之内ニ籠り罷在ゆ。北川町續之場所も、黑江町代地ゟ相唱申ゆ。其後正德三巳年町御奉行所御支配ニ相成、地方も前々通御代官所ニゐ、當時兩御支配ニ御座ゆ。此外地所起立之儀も、委細熊井町分申上ゆ。

一、當町南之方川筋御堀割以前當町ニ續合ゆ元御賄藏地所之義も、先年高外ニゐ、名主助右衞門預り被仰付、運上永上納致ゆ處、元祿八亥年御檢地之節、一旦黑江町高ニ入、町人拜借いゐし、炭薪置場ニ相成居ゆ處、元祿十貳卯年南之方川筋御堀立之節、右地所川向飛地面ニ相成ゆ。然ル處同十四巳年右場所御用地ニ被召上、猶又蛤町町人御買請地ニ被仰付、其節分蛤町分ニ相成申ゆ。且又町内ニ先年有之ゆ淨土宗眞光寺境内壹反七畝之地所、天和貳戌年十二月廿八日類火ニゐ同寺燒失いゐし、新地故寺建ゆ儀相成不申、地所被召上、元祿八亥年中御拂地ニ相成ゆ處、町内町人三郎右衞門御買請被仰付ゆ上、相對ヲ以同十丑年九月二日同所熊井町名主理左衞門名前ニゐ富吉町ニ元罷在ゆ西本願寺末一向宗西念寺ニ讓渡所持いゐし、元祿十三辰年九月中右地所表通りも、町屋敷ニ相願、御年貢諸役町並相勤罷在ゆ處、同十五午年右西念寺境内も地窪之場所ニ付、當町所持地面表通家作地之外裏之方明地三百坪之内九拾壹坪之處、富吉町境内除地之替地ニ相願、卯塔場ニいゐし、殘り貳百九坪明地之儀も、町並之通御年貢上納致、西念寺持添地ニ致度旨、寺社御奉行永井伊賀守様ニ願出ゆ處、同十二月六日願之通九拾壹坪之除地御引替ニ被仰付、尤卯塔場之義も、右除地之分幷持添地之内九坪都合百坪之場所も御免ニ相成、翌午年西念寺引移ゆニ付、前書眞光寺上り地跡九拾壹坪も、西念寺除地に相成、猶貳百九坪之持添地幷表通り家作地之儀も、當時町並御年貢地ニ御座ゆ間、元祿八亥年御檢地後、當町高反別共增減有之、當時高三拾石三斗六升四合、此反別貳町五反三畝壹歩ニ相成申ゆ。

町内間數三百拾七間三尺四寸。

一、町内里俗之唱北方之黑江川河岸通を濱拾三町、八幡橋通りを通り黑江町、坂本代地町向合之所ヲ東黑江町、又もかハらけ町ゟ唱、久中橋より黑江橋南河岸通を日影町、西念寺脇横町を西念寺横町ゟ相唱申ゆ。

一、東北之方川之儀も、東之方永代寺門前仲町分當町地先ヲ流、西之方蛤町大嶋町地先分末も大川之方ニ落申ゆ。尤當町黑江橋際分八幡橋際迄之内一圓ニ黑江川ゟ唱ゆ義も、獵師町起立以前當所干潟ニ有之ゆ砌、右川筋之處水道附キ有之、其比黑江川ゟ唱ゆゟ申義ヲ以、寛永六巳年當所築立之節、右ノ川筋ニ附、則黑江川ゟ唱ゆ旨申傳有之ゆ。川幅之儀も、八幡橋際八間半、久中橋西之方拾貳間、同東之方五間、黑江橋際七間、東之方蛤町佐賀町代地南本所代地向合之所川幅拾五間ニ御座ゆ。

一、南之方川之儀も、當町北之方川筋蛤町之方ニ流、川幅八間有之、堀割之儀も、元祿十貳卯年築地御普請御奉行深津八郎右衞門様御掛りニゐ、町内町人所持屋敷御用地ニ被召上、右川筋御堀割有之、尤里

俗唱等無御座い。

一、八幡橋 長七間。幅貳間。

右御掛渡年月相譯不申い得共、元祿十六未年三月二日御入用ヲ以御掛替有之、尤右名目付い義も、八幡宮に通行之橋に付、八幡橋と相唱、當町并同所北川町中嶋町に見守被仰付、當時御入用橋に御座い。

一、久中橋 長六間。幅九尺。

右御掛渡年月等并名目之譯相分不申い得共、寶永貳年酉年二月中御入用ヲ以御掛替有之、以來御入用橋に御座い。尤當町に御見守仕い。

一、黑江橋 長六間。幅九尺。

右御掛渡年月等相分り不申、先年御入用ヲ以御掛渡有之い處、正德四午年九月十八日中山出雲守樣御番所に被召出、向後最寄町々模合所入用ヲ以掛渡修復可致旨被仰渡い に付、其節ゟ町內并一色町永代寺門前仲町同所同門前山本町右四ヶ町入用ヲ以掛替修復とも仕來申い。

一、松平加賀守樣町並御抱屋敷　壹ヶ所。

間口拾六間四尺五寸、裏幅貳拾貳間壹尺四寸、奥行、南之方貳拾貳間五尺三寸、北之方貳拾貳間壹尺五寸、此坪數四百三拾壹坪。

右も寬文五巳年中加賀守樣に御抱入有之、其後元祿十五午年中當町家作御改御免之砌、當御抱屋敷之分も家作無之場所に付、別段御改御免願不申上い處、寶永四年亥年中家作御改御免儀、右御屋敷御家來湯原重左衞門殿ゟ屋敷御改倉橋三左衞門樣、杉山安兵衞樣に御願有之い處、同十二月九日家作御免に相成、當時町並御年貢地に御座い。

一、黑江川緣物置場　四ヶ所。

八幡橋南角、長拾五間三尺三寸、幅三間。

同北角ゟ町內自身番屋敷際迄、長七拾六間餘、幅三間。

右自身番屋敷際ゟ久中橋南角迄、長五拾間餘、幅三間。

久中橋北角、長拾六間餘、幅三間。

惣坪數四百七拾五坪六合餘。

右四ヶ所物置場地所之義も、一躰御公儀地に有之い處、先年ゟ町內之者共物置場等建遣來格別辨利為宜敷い付、爲冥加五ヶ年以前文政七申年中ゟ月々壹坪に付銀壹分宛上納仕い義に御座い。

竹內久兵店地借神職
白川殿配下
大平志津馬

右も金昆羅、日本武尊、船玉大明神右三社居宅構內に勸請いたし、神躰何とも幣帛に而、貳拾壹年以前文化五辰年十月ゟ當住居仕い。

一、町內地先に有之い非人小屋　壹ヶ所。

間口貳間、奥行貳間半、此坪數五坪。

右も先年同所佐賀町地先に罷在い處、元祿十一寅年中永代橋御掛渡之節、右地所御取拂に相成い に付、其砌ゟ當時之場所に小屋建い旨申傳、當時非人金右衞門住居仕い。

北川町續黑江町代地

一、御城ゟ東之方ハ當凡三拾五町程。

右代地之義ハ、元祿十二卯年築地御普請御奉行深津八郎左衞門樣御掛りニ成、元地之内南之方川筋新規御堀割之砌、貳反廿七歩御用地ニ被召上ハ地所之内、同十三辰年中元木挽町四丁目木置場ニ成、右代地被下置、黑江町代地ゟ相唱申ハ。右高反別之儀ハ元地ハ籠り罷在ハ。

（但、右之外ニも代地相渡ハ得共、元地續之場所ニ付元地ハ籠申ハ。）

——文政町方書上

一、深川清住町・富吉町・相川町・熊井町・諸町・黑江町・大島町・佐賀町

右ハ寛永巳年海手汐除堤干瀉之所、獵師町ニ取立度段、御代官に相願、元祿十五午年九月願之通町並ニ成、正德三巳年町支配ニ成、先年ハ無年貢ニ成、御菜御肴差上、御成先御役舟御用等相勤ハ處、寛文十戌年右御役之外ニ年貢高入被仰付ハ年貢相勤。

——本所深川起立

此年○寛永六年。深川の土人深川新田を開拓して獵師町とす（正實錄、○按に竪川の成りしも此頃のことも也と云。）

——東京地理志料

〔附記一〕深川材木町

深川材木町（○市内深川區。）

一、町方起立之儀ハ、往古深川海面ニ成、追々寄洲出來、寛永之頃ハ、地高之場所ニ相成ハ付、本材木町三拾間堀并神田材木問屋共、木置場ニ被成下ハ。（○下略。）

——文政町方書上（○深川材木町書上。）

〔附記二〕材木奉行

寛永七年（○庚午。紀元二二九〇年。）正月、是月材木奉行宮崎半兵衞重次子、助右衞門重景召出され（○中略。）大番にハる。

〔附記一〕深川材木町

〔附記二〕材木奉行

寛永十七年五月廿一日、今度本城構造不日に成功し、御感の旨をつたへられ、（○中略。）村木奉行美濃部與藤次茂勝、中根七左衞門貞次、永井清兵衞某（○中略。）金あるは三枚あるは貳枚たまひ（○中略。）

——大猷院殿御實紀十五

七年庚午（○寛永七年。紀元二二九〇年。）六月廿五日癸酉（○癸酉、三正綜覽。）將軍家光（○德川。）軍船天地丸ニ乘シテ、水軍ヲ江戸海口ニ閲ス。（○港灣篇參照。）

——大猷院殿御實紀四十四

水軍檢閲

水軍檢閲事蹟

水軍檢閲　港灣篇之ヲ記セハ、參看ス可シ。

廿七日（○寛永七年六月。）海邊に御船遊あり。兼て船手頭向井將監忠勝、水軍の備をかし御覽に備ふへしとの仰蒙りければ、數多の兵船をこぎからべ、各戰具をそろへ御覽に供ふ。天地丸といへるを御座船とす。水戸中納言頼房卿ならびに土井大炊頭利勝、酒井讃岐守忠勝、本多甲斐守政朝、井伊辨之助直寛（○注略。）は大龍丸といへるにのらしめらる。ときに松平伊豆守信綱その船にいたり、（○中略。）御旨を頼房卿に傳ふ。ふたゝび御使ありて天地丸へめされ、七五三の御膳供せられ、三献の御祝あり、利勝はじめ西の老臣まで召て御酒をたまふ。（○中略。）黄昏に及び還御かる。（○下略。）

——大猷院殿御實紀

七月十日戊子（○寛永七年庚午（紀元二二九〇年）○戊子、三正綜覽。）芝新網町（○市内芝區。）漁師ニ白魚獻上ノ褒美トシテ百間四方ノ網干場ヲ下賜ス。（○文政町方書上。）

芝新網町漁師ニ網干場下賜

芝新網町漁師ニ網干場下賜事蹟

芝新網町漁師ニ網干場下賜

芝新網町○中略。

其後○寛永三寅年九月三日白魚紙上ノ事ヲ承ケ。下總國古河ニ被爲成ル砌、島田彈正忠樣御組田所五右衞門殿御使ニ參、古河御殿ニ白魚差上ル樣被仰付ル間、差上申ル處、爲御褒美、寛永七午年七月十日、酒井雅樂頭樣、土井大炊頭樣、町御奉行嶋田彈正忠樣御立會ニ參、當名主惣十郎先祖越後事傳右衞門被召出、百間四方之濱端、漁夫共網干場ニ被下置、尤汐入之葭原ニ參御座ル。

——文政町方書上

〔附記〕京都市人ニ糸賣買其他付令ス。

糸空賣

覺

○中略。

一、京町人糸のうをりいの事、糸少取出ねたんをいたし、無之糸をも賣買仕故申分多有之由ニゆ。前廉僞無之樣高賣不可仕旨を申きかせ、其上僞之賣買いたすに付ゐて籠舍可申付事。

——東武實錄

○中略。

寛政七年七月十三日

十三日○寛永七年七月、中略。京の市人糸賣買の時、糸を少しとり出し價を定め、貯蓄せざる糸を有といつはりうりひさぐがゆへに、いひあらがふ事あるよし聞ゆ。あらかじめ詐僞せざらんやうにし、かつ高價にうりひさぐべからざる旨教諭し、私曲の賣買せば獄につなぐべし。新建の寺院有よし、よく査檢し、制旨の如くきびしく命ずべし。天主教の徒毎年改むべし。山城國中各所處士抱置ざるよう、毎年改むべし。六條幷中道寺の娼里、何地なりとも點檢し、市外に移らしむべし。屋舍も美麗ならざるやう命ずべし。もし人の子たるもの、不良のふるまひ有よしその親廳へ訴ふるさま詳明なるにおいては、親の申まゝに其子を繫獄すべし。逋債幷賣買の價滯りたるは、前々のごとくたるべし。山岡圖書助某下吏かくしをきしものは、獄につなぐべしとなり。

——大猷院殿御實紀卷十六

深川獵師町御菜肴獻上船役永免除

是歲○寛永七庚午年(紀元二二九〇年)。ヨリ深川獵師町○市内深川區。御菜肴一ヶ月三度宛本丸ヘ獻上、御成ノ節御役船五拾艘宛ヲ出シ、御用人足ヲ勤メ、船役永免除其他ノ特權ヲ與ヘラル。○寛永錄。

深川獵師町御菜肴獻上、船役永免除事蹟

武州葛飾郡西葛西領

深川獵師町起立

南受東北ハ凡長十町程

南西ハ四十間ゟ貳拾間余迄

○中略。

寛永七午年ゟ御菜御肴壹ヶ月三度宛御本丸ハ差上、御成之節御役船五拾艘宛當所ニ附置御用人足相勤、獵船無年貢之儀ハ、御菜御肴差上ル故、船役永御免、獵船數不定獵業致ル。其節永代嶋浦々ゟ中川迄御鳥見方御廻り之節、八月ゟ翌三月迄毎日船貳艘宛差出所、起立ゟ獵師町之内渡場當時永代橋之所大渡場ゟ唱壹ヶ所、富吉町地先大川通ニ壹ヶ所都合貳ヶ所有之、○川カ大渡場之儀靈岸嶋ハ渡ル場所ニ參渡錢之義ゟ往來武家方相除、壹人ニ付貳文宛、馬ハ六文宛可取旨於御評定所被仰付、所之者稼ニいたし、深川御薪藏御煎栽物日々持送り有之、右渡船御役相勤、其上諸浦ゟ廻船入津之場所ニ參御成之節船留御役船差出。

前將軍富士見寶藏ノ金銀帳簿點檢

寛永八年辛未（○紀元二二九一年。）二月二十日甲子（○甲子、三正綜覽。）前將軍德川秀忠、富士見寶藏ノ金銀帳簿ヲ點檢ス。（○大猷院殿御實紀。）

前將軍金銀帳簿點檢事蹟

富士見御寶藏番頭

二十日（○寛永八年辛未二月、甲子。）西城にて大御所（○德川秀忠。）諸老臣諸奉行をめして、富士見寶藏の金銀簿を點檢し給ふ。

——大猷院殿御實紀卷十七

富士見御寶藏番之頭ニ付、柳營補任傳フル所左ノ如シ。

富士見御寶藏番之頭

始メ富士見番ノ頭ト御寶藏番ノ頭ト相分リ有ル之い處、元祿十午三月十五日兩方打込相勤い樣被ニ仰付一御寶藏番所見廻リ富士見御番所番頭泊リ依ル之（富士見御寶藏）番ノ頭ト御役名ニ相成ル。

御番衆始百人、後ニ五拾人四組、御寶藏番ハ寛永十七年辰十月芦田五拾騎者被ニ仰付一い。

天正十八辰十月關東御入國之節一組百人有レ之掃部筆頭被ニ仰付一後番頭ト唱フ。

大阪御歸陣後筆頭被ニ仰付一

寛永十七辰十月御寶藏番斗被ニ仰付一

其後始御寶藏番ノ頭被ニ仰付一

寛文四辰月日。

大猷院樣御代極之助兩人被ニ仰付一

都合四組。

深尾掃部

松平主馬

御寶藏番ノ頭

西山忠左衛門

四番

内藤太郎左衛門

——寛永錄（二相川藏書。）

右同斷

寛文六午年八月十八日願御免。

〔附記〕紅葉山寶藏普請

清許（○沼間兵右衛門。）八年（○寛永○紀元二二九一年。）紅葉山御寶藏の普請を奉行し云々。

——寛政重修諸家譜（○大猷院殿御實紀同。）

二番

酒井極之助

——柳營補任（六。○武家補任ニ依リ補訂。）

三月十日甲申（○寛永八年辛未（紀元二二九一年）○甲申、三正綜覽。）幕府直領ノ租法ヲ改正シテ徵收ノ期ヲ緩クス。（○東武實錄。大猷院殿御實紀。）

租稅徵收期緩和

租稅徵收期緩和事蹟

同（○寛永八年三月。）十日

覺

一、年内皆濟之事、其所ゟ之春迄為相延可申歟之事、言付之通尤ニ被思召事。

一、先代官、先給人之時之未進、當代官、當給人急度被ニ取立差上い樣ニと如何可レ有ニ御座哉之事、書付之通尤ニ被ニ思召一い事。

寛永八年三月十日

十日（○寛永八年三月。）此日代官山岡圖書助　屬吏私曲ありて亡命せしかば、御勘氣蒙りてありしが、こたびかの姦吏を追捕して奉りければ、御勘氣をゆるさる。又代官の徒御旨をこひ奉りしごとく、年内皆濟。その地によ

——東武實錄

りては春に至るまで、延滯することあるべきなり。たゞし先代官先給人の未進は、當代官給人きびしく取立て、上納せしむべき旨仰下さる。○日記。東武實錄。

——大猷院殿御實紀卷十七

小金野山開鑿計畫

是春○寛永八年辛未（紀元二二九一年）三月。前將軍德川秀忠七月ヨリ下總國小金ノ野山ヲ堀割、下總、常陸、下野、陸奥ヨリ運漕ノ水路開鑿ヲ計畫下命セシガ、七月秀忠病ミ事停廢ス。○大猷院殿御實紀。

小金野山開鑿計畫事蹟

この春○寛永八年三月。大御所○德川秀忠。阿倍四郎五郎正之に、七月よりして下總小金の野山を堀割、下總、常陸、下野、陸奥より運漕の水路を開くべしと面命ありしが、御不豫にて停廢あり。

——大猷院殿御實紀卷十七

絹紬布木綿丈尺規定

四月十八日壬戌○寛永八年辛未（紀元二二九一年）○壬戌、三正綜覽。絹紬布木綿等ノ丈尺ノ定法ヲ定ム。○大猷院殿御實紀。東武實錄。

絹紬布木綿丈尺規定事蹟

十八日○寛永八年四月。

此日命ぜらるは、絹紬一反長工尺三丈四尺。幅一尺四寸。布木綿一反長三丈四尺。幅一尺三寸にさだめ、この寸尺に不足の布帛うりひさがば、見あたるもの收納すべしとなり。

——大猷院殿御實紀卷十七

同○寛永八年四月。十八日、絹紬布木綿等ノ丈尺ノ定法ヲ仰出サル。

定

一、絹紬之事

壹端ニ付、長サ大工ろね三丈四尺、むゞ壹尺四寸事。

一、布木綿之事

壹端ニ付、長サ大工かね三丈四尺、むゞ壹尺三寸事。

右織物之寸法如此御定之上、長むゞ不足之絹布賣ゆるれあてハ、見合ゆ輩可レ取之者也。

寛永八年四月十八日

——東武實錄○日本財政經濟史料所收政柄秘記一、同。

人馬賃錢引上事蹟

七月○寛永八年辛未（紀元二二九一年）。物價騰貴ニ由リ人馬賃銀ヲ引上グ。○大日本帝國驛遞志稿考證。大猷院殿御實紀。

人馬賃錢引上

是月○寛永八年七月。驛馬の高札を建らる。其文にいふ。近年米豆の價騰貴によて、府より品川驛まで駄賃錢壹駄五十文、乘掛荷は人ともにおなじ、無荷にて乘らば三十二文、人夫は壹人廿五文たるべしとなり。

——大猷院殿御實紀卷十八

〔附記一〕女丼手負通關布令

八年○寛永。七月令ス。近年米豆騰貴ノ故ヲ以テ江戸ヨリ品川ニ至ル一駄ノ賃錢及乘掛荷ニシテ騎ヲ兼ル者ハ共ニ五十文トシ唯騎スルモノハ三十二文、驛夫ハ二十五文トス。○德教類典。寛永系圖。

〔附記一〕關東代官ニ女丼手負等ノ乘船航行、通關ニツキ令ス。

同○寛永八年未九月。二十一日、御代官ノ面々エ相觸レラル、趣

覺

女幷手負其外不審成者を船まて何方へ成相越い事堅令停止畢、若猥之輩あらば縱後日に聞いとも船頭舟宿等之事と不及沙汰其一在所のもの迄可爲曲事。船まて可越と申ものを捕差上いた其人まよりを御褒美の高下有之ゐ急度可被下、自然禮物を出し可渡ま申族於有之も捕置可申上、金銀米錢何こゐも其約束一倍可被下之い。

右之趣御代官所中能々可申付者也。

寛永八年未九月廿一日

長谷川庄次郎　長田喜兵衛
山田權左衛門　小泉久彌
丸茂兵三郎　布施孫兵衛
向井將監　間宮彦次郎
大橋長左衛門　大岡次郎兵衛
掛斐與右衛門　大岡忠次郎
杉浦内藏丞　飯室金左衛門
八木次郎左衛門　間宮左衛門
小幡源太郎　服部惣左衛門
戸田久助　松下孫十郎
坪井治左衛門　中野吉兵衛
倉橋庄兵衛　成瀨五左衛門
戸田數馬　間宮虎之助
津田平左衛門　間宮庄五郎
飯室次郎太郎

覺

手負幷女其外不審成者を手形なくして一切通をへからず。若猥相渡まれゐてハ縱後日に聞えいとも、其番之者の事は不及沙汰二在所之者迄可爲曲事。缺落の者を捕へ差上いハゞ其人によりを御褒美の高下有之ゐ急度可被下之、自然禮物を出し可渡と申族あらば捕置可申上、金銀米錢何こゐも其約束之一倍可被下者也。

寛永八年未九月廿一日

右ノ御書付ヲ以テ東國ノ關所エ相觸レラル、

根無川　箱根　小岩　もくの橋　市川
四郷　御料　川俣　芝　金町
關宿　松戸　武州小佛　大戸　上州碓氷
房川　中田

——東武實錄

廿一日（寛永八年九月）代官廿九人の輩に令せらるゝは、婦女及び刄傷せられしもの、其他いぶかしげなるもの船にのせ、何方にても越しむる事、かたく停禁す。若猥の徒あらば、たとひ後日に聞ゆとも船主船頭はいふ迄もなし。一村の農民等曲事たるべし。船にて赴くべしといふものをとらへば、其人にしたがひ褒賜

あるべし。もし謝物を出し渡らんといふものあらば、とらへ置うたへ出べし。金銀米錢約せし一倍たまはるべしとなり。又東國根府川、箱根、小岩、もくの橋、市川、四郷、五料、川俣、芝、金町、關宿、松戸、小佛、大戸、碓氷、房川、中田の諸關に令せらるゝは、刄傷せられし者幷に婦女其他不審なるものは、奈なくして一切通すべからず。もしみだりに通行せしめば、後に聞ゆるとも、番人はいふ迄もなし一村の者迄とがめらるべし。亡命のやからとらへいでば、其人により褒賜あるべし。もし謝物を出さんといふ徒あらば、とらへ置うたへ出べし。金銀米錢約せし一倍下さるべしとなり。○東武實錄。

——大猷院殿御實紀卷十八

〔附記二〕近國騷擾

〔附記二〕近國騷擾。

廿三日○寛永八年九月。この日巳刻にいたり、忍、熊谷、深谷、本庄、佐野、館林、一時に騷動す。すべて笛吹峠より板橋にいたるまで又同じ。その日館林城下にて常例の市ありて、人あまたつどひたる中に、修驗の山伏いひしとて、城主榊原殿兩御所の御旨にたがふ事ありて、江戸にて誅せられ、只今この城に討手の御使向はる。先大手は井伊殿の奉りて川股より向はれ、搦手は永井殿にて、佐田川より押よせられ、奥平殿は案内者として、眞先かけてはや旗の手みえたり。いさゝか油斷すべきにあらずと、異口同音に唱へ出し、村里男女家財をかたづけ逃かくれんとす。盜賊その虚に乘じ家屋をうちやぶり、資財を奪ふ事あげて數ふべからず。城中にても虚實分明ならねども、此風説に驚き、城兵武具をよそひ持口をかためまづ足輕を佐田川股にはしらせ事の様を伺はせければ、各歸り來て、敵雲霞の如くよせたり、家々の旗差物雲日にかゞやきわたりゆと申、また樵夫牧童等も、今山々に敵兵屯して、國民をことゞく殺さんとす。吾々からき命助りやう〳〵にげかへりしといふもあり。城兵各必死のかくごをなし、防禦の術を運す外なし。然るに未刻過に至り騷動一時にしづまり、毀損せし者一人もなかりしかば、城中も夢の醒たることくあきれはてしとなり。これ何等の怪といふことをしらず。○天享東鑑。

——大猷院殿御實紀

町奉行任命

廿二日癸巳○寛永八年(紀元二二九一年)九月。○癸巳、三正綜覽。加々爪忠澄○民部少輔。堀直之○式部少輔。ヲ江戸町奉行ニ任ス。尋テ奉行所ヲ吳服橋内○市内麴町區。及常盤橋内○市内麴町區。ニ置ク。南北番所ノ稱有リ。○坂上池院日記。東武實錄。大猷院殿御實紀。柳營補任。正實錄。寛政重修諸家譜。江戸町政錄。東京通志。

町奉行任命事蹟

町奉行任命　加々爪忠澄、堀直之ノ江戸町奉行ニ任スル、寛永日記、大猷院殿御實紀、之ヲ寛永八年九月廿二日トシ、柳營補任同十月五日トス。孰カ是ナルヲ詳ニセザルトモ、姑ク寛永日記、大猷院御實紀ニ從フ。

九月廿二日○寛永八年○中略。

水戸記

一、加々爪民部・堀式部町奉行被仰付。

——寛永日記

今年○寛永八年。堀式部少輔直之、加々爪民部少輔忠澄ニ、江戸町奉行被仰付、米津勘兵衛田盛○田政勝。島田彈正○利正。等ニ替ル。

——坂上池院日記

是月○寛永八年九月。堀式部少輔直之江戸町奉行トナル。○同十七年正月幸社奉行トナル。

——東武實錄

廿二日○寛永八年九月。加々爪民部少輔忠澄、堀式部少輔直之ともに町奉行に仰付らる。○水戸記。

——大猷院殿御實紀

寛永八未十月五日御目付ヨリ
同十七辰正月廿三日大目付

寛永未十月五日御使番ヨリ
同十五寅正月廿八日寺社奉行

〔參考〕加々爪忠澄

〔參考〕加々爪忠澄。堀直之。

忠澄 甚十郎民部少輔。○加々爪。從五位下。

慶長四年台德院殿の御前にをいて、元服し御諱字をたまひ、忠澄とめさる。○時十四歳。五年上杉景勝御征伐のとき、下野國宇都宮まで扈從し、また上杉方の逆徒を追討あるべしとて、中仙道を御發向により、したがひたてまつり大坂にいたり、仰によりてこれより東照宮に近侍し、十九年大坂御陣のときは御使番をつとむ。元和元年の役にも從ひたてまつり、五月七日御使をうけたまはりて、台德院殿の御前に參りて御旨を言上し、また諸軍先手の人數を配るべきのよし仰を傳ふ。既に合戰に及びて、忠澄鎗をとりて敵を突、郎等をしてしるしをあげしむ。八日大野修理亮治長、速見甲斐守守之等秀頼母子が助命をこふにより、豊島刑部某と共に城中にいたりて御使をつとむ。十二月二十一日從五位下民部少輔に叙任す。五年正月十一日御目付となり、寛永二年七月二十七日采地の御朱印を賜ひ、武藏國比企、相摸國高座、下總國海上三郡のうちにをいて四千石、其餘新田をあはせて四千五百石を知行し、後千

加々爪甚十郎○（澄カ）忠隆。
民部少輔

堀三左衛門○直之。
式部少輔
——柳營補任

石を加へらる。三年大猷院殿洛にのぼらせたまふのとき從ひたてまつり、御參内のときも供奉の列にあり。八年町奉行に轉じ、十年四月二十三日四千石を加へられ、すべて九千五百石を知行す。十三年七月二十七日先に石垣及び堀普請の奉行をつとめしにより、黄金二十枚を賜ふ。十四年十二月二十二日先に火災あるのとき、これを防ぐこと等閑なりとて出仕をとゞめられ、十五年正月十九日放免あり、五月十六日御前にめされて職をゆるされ、十六年播磨國姫路城を松平下總守忠明に賜ふにより、三月三日彼地に赴き引渡の役をつとむ。八月十二日本城火あるの後尚其火を鎮むる事を奉行す。十七年正月二十三日大目付となり、この年異國の船長崎に着岸せしにより、六月二日仰を蒙りて彼地に赴き、其船を燒すて、耶蘇の徒數千人を斬殺す。十八年正月晦日死す。年五十六。法名宗黒。下谷の廣德寺に葬る。妻は紀伊の家老安藤帶刀直次が女。

——寛政重修諸家譜

堀直之

直之○佐太郎。主計助。三右衛門。式部少輔。從五位下○堀。

はしめ堀左衛門督秀治をよび越後守忠俊につかへ、忠俊封を除かるゝの後、兄丹後守直寄にしたがひて江戸に到り、慶長十六年はじめて台德院殿に拜謁し、御書院の番士となり、食祿をたまふ。十九年大坂の役に、直寄が手に屬して供奉し、元和元年の御陣、五月六日道明寺口の合戰に甲首一級を打とり、七日天王寺表の戰に小返の功あり、御凱旋の後、其軍功を賞せられ、武藏國兒玉郡のうちにをいて采地千石をたまはり、御使番に列し、二年七月采地を轉じ、加恩ありて越後國沼垂郡のうちにをいて五千石の地をたまはり、かつ新墾の田五百石を采地にくはへ、すべて五千五百石を知行し、椎谷を

居所とす。九月采地にゆくの暇をたまはり、六年大坂城修補のとき、加々爪民部少輔忠澄、日下部大隅守定好、村上三右衛門吉正等とともに、仰をうけたまはりてこれを監し、寛永三年七月大猷院殿洛にのぼらせたまふの時、したがひたてまつり、四年十二月十八日從五位下式部少輔に叙任す。八年九月町奉行となり、十年四月二十三日上總國夷隅、市原、長柄四郡の内にをいて四千石の地をくはへられ、すべて九千五百石をたまふ。このとき居所を夷隅郡刈吉に移す。このとし稲葉丹後守正勝病に罹るにより、五月二十一日御使をうけたまはり小田原におもむき、十三年七月二十七日隍壘の普請を奉行せしかば黄金二十枚をたまふ。十四年十二月二十二日さきに市中に火あるの時防ぎやう等閑なるにより出仕をとゞめられ、十五年正月十九日ゆるさる。五月十六日職を辭し、八月十一日仰をうけて伊丹播摩守康勝とともに關東國々の論地を巡視し、十六年大和國郡山城を本多内記正勝にたまふにより、三月三日仰をうけたまはりて、彼地にいたり嚴命を傳ふ。八月十二日本城火災のとき、其餘焰をしづむることを奉行し、十七年正月二十三日寺社の奉行となる。十九年七月十日死す。年五十八。法名宗覺。湯島の養源寺に葬る。のちこの寺を駒込にうつされ、代々葬地とす。妻は柴田佐渡守勝全が女。

——寛政重修諸家譜

〔附記〕　關東大水。

この秋（寛永八年九月。）關東大水堤防若干崩破し、人畜の溺死かぞふるにいとまあらず。（天享東鑑。）

——大猷院殿御實紀卷十八

〔附記〕關東大水

徒侍服制其他

徒侍服制其他事蹟

十一月五日甲辰（寛永八年辛未（紀元二二九一年）○甲辰、三正綜覽。）徒侍ノ服制、幷ニ小者私ニ侍トナルノ禁、家屋及饗應分ニ過グ可カラザル事等ヲ令ス。（○東武實錄。日本財政經濟史料。御當家令條。德川禁令考。大猷院殿御實紀。）

徒侍服制其他

同（寛永八年十一月。）五日、仰出サル、趣

覺

一、徒侍衣類之事

ねり羽二重より上之着物着用ゑゐのらす、若猥之輩あらは來年四月朔日よりを可ニ剝取之事。

一、小者自分として侍よ成ゆ者於有之之、元主人へ相斷改之、急度曲事ニ可ニ申付事。

一、家造作幷振舞以下不依何事其分限ニ不相應過分之儀停止也。但常之振舞ハ此以前より定のことくたるゐき事。

右可相守此旨者也。

寛永八年未十一月五日

寛永八未年十一月五日

衣類幷家作振舞等之覺

一、歩行侍衣類之事、練羽二重より上之着物着用すへからす。若猥の輩あらは、來年申四月朔日より可ニ剝

——東武實錄（○日本財政經濟史料同。）

取事。

一、小者自分として侍に成い者於有之は、本人主人に相新改之急度曲事可申付事。

一、家造作幷振舞已下何事ニよらす其分限ニ不相應過分之儀停止也。但常々振舞ハ已前より定のことくたるへき事。

寛永八未年十一月五日

引書（御當家令條。）

五日（○寛永八年十一月。）けふ令せらるゝは、徒侍衣服練羽二重の外着すべからず。もし背くものあらば、來年四月朔日より剝とるべし。小者私に侍とならば、先主へ尋問しきびしくとがめらるべし。屋舍構造幷饗應に至る迄、身の程にしたがひ過分の事なすべからず。されど常の饗饌は前令の如くたるべしとなり。

——大猷院殿御實紀

〔附記〕船手頭向井將監安宅丸造立。

この月（○寛永八年十二月。）船手頭向井將監忠勝大御所（○德川秀忠。）の仰を蒙り　伊豆國伊東の湊にまかり、安宅丸といふ大船を造立す。

——大猷院殿御實紀卷十八

〔附記〕船手頭向井將監安宅丸造立

千住組魚問屋冥加川魚獻納

是年（○寛永八年辛未紀元二二九一年）ヨリ千住組魚問屋八名、幕府へ冥加トシテ毎歳七月十五六日ニ鯉鮒等ノ川魚獻納ヲ始ム。（○東京諸問屋沿革志。日本財政經濟史料。）

千住組魚問屋冥加川魚獻納事蹟

千住組魚問屋

一、千住組魚問屋濫觴は、舊記の闕乏を以て之を詳にせず。今口碑の傳ふる所に就て、沿革の大略を擧ぐれば、往時は農間に近傍川筋にて漁業を營み、之を江戸市街に販賣せしに原けり。爾後追年上野、下野、常陸、仙臺の地方より輸送するところの川魚を引受け、專ら之を販賣するに至れり。

一、寛永八年末、當時同業者八名より冥加の爲め、毎歳七月十五六日幕府へ川魚鯉鮒を獻納す。

——東京諸問屋沿革志（○日本財政經濟史料、同。）

是年（○寛永八年辛未紀元二二九一年）茅葭商、南茅場町（○市内日本橋區茅場町。）ヨリ深川新茅場町（○市内深川區新大橋一丁目。）ニ移轉ス。（○御府内備考。）

茅葭商深川へ移轉事蹟

茅葭商深川へ移轉

茅場町一丁目

新茅場町

茅葭商深川へ移轉　註記　現在町名ハ大略ヲ指示シテ參考ニ資スルニ止ム。

茅場町壹丁目（○市内本所區江東橋町。）

一、右町起立之儀ハ、乍恐、權現樣（○德川家康。）御入國以來當時南茅場町（○市内日本橋區。）と唱い場所へ其砌ハ在方之所、町屋ニ取立、町内一同茅葭商賣いニ付、則町名茅場町ト相唱罷在、其頃御當地一圓茅葺ニ御座い處、追々御府内御繁榮に從ひ、諸高成物ニ付火之元不宜品ニ付、深川御船藏（○深川區新大橋一丁目。）御取立無御座以前、右近所ニ寛永八未年中代地被下置いニ付、右町内之者共一同引移り、新茅場町と相唱、右商賣仕罷在い處、御船藏御取立御座いニ付、同（○寛永。）十二亥年中、又候貳町上當時尾上町元町（○本所區東兩國一二丁目。）之邊替地被下置住居仕い處、兩國御橋掛りい節御用地ニ被召上、萬治三庚子年本所之内里俗四ツ目當時之場所（○本所區江東橋町。）へ替地被下置いい

本所新茅場町

に付、町名本所新茅場町一丁目、二丁目、三丁目と相唱、住居仕右茅葭商賣仕罷在ゆ處、天和三亥年本所御奉行庄田小左衞門樣、長谷川五左衞門樣御掛に被召上、大久保平兵衞樣御代官所百姓地に相成ゆに付、貞享元子年町内之儀も御用地に被召上代地無御座ゆに付、屋敷代金被下置壹丁目貳丁目分合金六百五拾四兩壹分銀六匁九分九厘、三丁目分金四百九拾六兩三分銀六匁六分八厘頂戴仕、屋敷差上、淺草山之宿町幷其外に罷在茅置場無御座迷惑仕ゆに付、茅葭賣場之儀、同年十一月十六日御公儀樣へ御訴訟申上ゆ處、同十二月朔日茅葭置場共本所北横川端東側當時柳原壹丁目○本所區江東橋一丁目。幷最上圖書助樣御下屋敷邊に被横巾八間半、長六拾間之處茅葭置場に拜借被仰付、同廿日御代官大久保平兵衞樣ヨリ地所御引渡に相成ゆに付、右賣場へ罷出商ヒ仕罷在ゆ。然處元祿元辰年御普請御奉行中坊長兵衞樣奥田八郎右衞門樣御掛に被古來之通又〻本所御取立被遊ゆに付、同六酉年元地歸之儀御願申上ゆへば、同年七月八日右茅葭賣場被召上、元地屋敷頂戴仕、立戻、則本所茅場町○本所區江東橋。壹丁目、二丁目、三丁目、と相唱是又葭茅商賣仕罷在ゆ。右に付先達テ頂戴仕ゆ屋敷代金追々公納仕ゆに付、右上納仕ゆ内ハ町御役御用捨被下置ゆに付、皆納仕ゆ上御公役相勤申ゆ。勿論江戸向追々茅屋葺相止ミ蠣殼葺被仰付、其後猶又塗屋作に被仰付ゆ由、依之茅商無之故、追々茅商賣相止み葭のみ商賣仕、又々炭薪材木等商賣仕、是迄致仕居罷在ゆ。御公役人共之儀ハ賃銀ヲ御上納可仕旨、享保七寅年十一月中被仰付ゆに付、小間拾間口一役此賃銀人足壹人銀貳匁ツヽ壹ヶ年十五漏勤之積に被年々上納仕ゆ。且又全ク古町に御座ゆ間古來より人御能拜見被仰付ゆ。

賣場

茅屋葺
蠣殼葺
塗屋作

一、町内

東西へ　表間口五拾壹間壹尺八寸四分。
　　裏巾同斷。
南北へ　裏行貳拾間。
　　但片側。

一、四隣

東之方　同町○茅場町。貳丁目。
西之方　柳原壹丁目。
南之方　高井數馬樣御下屋敷、柑本兵五郎樣御代官所武州葛飾郡西葛西領龜戸村田地。
北之方　竪川向本所柳原五丁め同所六丁目。

一、自身番屋　間口貳間貳尺奥行五間。
右ハ町内河岸地東之方に建置、同町貳丁目ト組合町用相勤申ゆ。建始願濟年代書留之儀ハ三拾九年以前、寛政二戌年正月廿二日出火類燒之節燒失仕ゆに付相知不申ゆ。

一、物揚場
右ハ町内壹丁目、貳丁目境、竪川河岸會所地河岸行八間巾五間之所古來御寄合遠山主水樣御屋敷物揚場に御座ゆ處、寛政十二申年四月中右主水樣御屋敷御本丸元御側衆高井飛驒守樣御屋敷ハ御相對替有之ゆに付御同人樣御物揚場に相成、御跡當時御寄合高井數馬樣御下屋敷物揚場に相成申ゆ。

一、竪川　巾貳拾間

右ハ萬治二亥年中、本所御奉行德山五兵衛様、山崎四郎左衛門様御掛ニ〆出來仕ゆ。川巾之儀ハ、古來貳拾壹間、河岸行七間餘御座ゆ處、享保十五戌年正月中、川巾貳拾間、河岸行八間、道巾五間順ニ被仰付ゆ。尤町内北之方地先ヲ流、東之方茅場町貳丁目前ヨリ西之方柳原四丁目之方へ相流申ゆ。

一、竪川河岸地　間口五拾五間貳尺七寸壹分。河岸行八間。

右ハ文政七申年十月ヨリ河岸地冥加金上納被仰付、壹ヶ月金三分銀九匁壹分三厘四毛ツヽ上納仕ゆ。右河岸地内舟大工小屋貳ヶ所御願濟ニ御座ゆ。

河岸地
冥加
舟大工
小屋二ヶ所

一、御上り場

右ハ本所柳原四丁目同所茅場町壹丁目境會所地、竪川河岸行八間巾五間之内貳間程之處土俵ニ〆御築立、鷄御成之節、寶暦六子年四月廿五日、初〆御上り場ニ相成、其後天明四辰年頃迄、大納言様御成之節、御取繕御上り場ニ相成ゆ處、其後御用ニ相成不申ゆ。尤其頃御成相濟御跡、御差構無御座ゆニ付、御上り段之處ヲ除、左右之方兩町物揚場ニ相用申ゆ。

物揚場

一、青石　凡長五尺程巾三尺程厚壹尺程。

右青石之儀ハ、御成之節、御腰掛りゆ由申傳ニ付、右所持屋敷賣渡ゆ砌茂兵衛住屋之地面へ引取、稲荷之社際ニ差置、只今以大切ニ仕置申ゆ。

但、右之石三拾九ヶ年以前、寛政二戌年正月廿二日、幷拾壹ヶ年以前寅年十月十七日、右兩度出火之節火ニ當申ゆ。

一、領名之儀ハ、葛飾郡西葛西領之内ニ御座候。

茅葺商賣

一、草分人

江戸草分名主之内
本所茅場町名主
助左衛門

私先祖助左衛門儀ハ、生國三河ニ御座ゆ處、乍恐　東照大權現様(徳川家康)御入國之節、御供仕御當地へ罷出、當時南茅場町ト相唱ゆ場所、在方ニ〆、町屋無御座ゆ處、助左衛門儀、町屋ニ取立、町内一圓茅葺商賣仕ゆニ付、則町名茅場町ト相唱、御由緒有之名主役被爲仰付相勤罷在、其頃御當地一圓家根茅葺ニ御座ゆ、然處追々繁榮ニ相成、茅葺之儀、嵩高成物ニ〆火之元不宜品ニ付、前書ニ申上ゆ通り、寛永八未年中深川御船藏近所へ代地被下置、其後追々尚又代地被下置、當時之場所へ、右町内之者共一同引移、私迄七代實子相續、名主役相勤罷在、江戸町草創名主、當時貳拾六人之内ニ御座ゆ〆、古町名主ニ付、右町名主一同毎年正月三日、御本丸様へ御年頭御禮ニ罷上り、尤献上之品三本入臺居御扇子箱貳組持參於御同所西御丸様へモ献上仕、乍恐於紅葉之御間ニ兩御丸様へ御禮御目見仕來、御代替之節モ罷上り、御扇子箱献上右御同様ニ仕來、冥加至極難有仕合ニ奉存ゆ。草創地之義モ、同所貳丁目西角ニ〆所持罷在ゆ處、其後讓渡し申ゆ。尤由緒書、系圖、古書付等之儀ハ、三拾九ヶ年以前、寛政二戌年廿二日出火、私宅類燒之節、燒失仕無御座ゆへ共、實父助左衛門ヨリ申傳之趣申上ゆ。

但、本文之通草創地之儀ハ、讓渡ゆへ共、町内西角表京間貳間貳尺四寸、裏行同貳拾間之地面壹ヶ所、元祿八亥年十二月中買求メ、同續貳軒目表京間貳軒五尺八寸五分、裏行同貳拾間之地面壹ヶ所、同十丑年五月中猶又買求メ、右地面ニ住居仕罷在ゆニ付此段申上ゆ。

右助左衛門實子幼佐太郎事
二代目　助左衛門

右助左衛門時代、本所藤城町（藤代町。）名主無御座ハニ付、右助左衛門支配ニ附申度旨、右町拜領主藤左衛門、
幷同人拜領屋敷之内譲請主四郎左衛門、幷助左衛門ヨリ享保二十卯年正月町年寄奈良屋市右衛門方へ願ハ
處、町御奉行大岡越前守様へ御伺之上、願之通助左衛門へ被仰付ハ旨被仰渡ハ段、同月廿九日被申渡ハ
ニ付、其節ヨリ右支配仕罷在ハ。

右五代目助左衛門迄代替り願ハ年月書留之儀、三拾九ヶ年以前寛政二戌年正月廿二日出火類焼之節、焼失
仕ハニ付、相知不申ハ。

右助左衛門儀ハ、明和二酉年十月廿七日、名主役見習奉願、同七寅年四月廿八日實父助左衛門跡名主役
願之通被仰付、享和二戌年迄三拾八ヶ年相勤申ハ。

一、本所綠町四丁目同五丁目同所花町右町支配名主幸八儀、病身ニ相成、役儀難相勤候ニ付、安永七戌
六月朔日退役願ハ所、同七月願之通幸八退役被仰付、跡目行事持に相成、名主無御座ハニ付、右三ヶ町
共助左衛門へ支配付被仰付被下置ハ様、安永七戌年八月七日、町年寄奈良屋市右衛門方へ願書差出しハ
處、町御奉行牧野大隅守様へ御伺之上、願之通被仰付ハ旨被申渡ハニ付、其節ヨリ右町支配仕罷在候。

一、天明四辰年、町御奉行曲淵甲斐守様御掛ニ〆、本所堅川通一ツ目ヨリ逆井渡之場迄、御川浚御普請御座

同人實子佐太郎事
三代目　助左衛門
同人實子助次郎事
四代目　助左衛門
四代目助左衛門實子庄右衛門事
五代目　助左衛門
右助左衛門實子佐太郎事
六代目　助左衛門

候節、右助左衛門外三人、川巾改掛り被仰付、右御浚出來致、同年十二月右甲斐守様御番所ニ、右助左衛門
外三人之者共被召出、於御座敷御目見被仰付、御浚中出精之段、御褒之上爲御褒美金三百疋宛被下置、
難有頂戴仕ハ。

一、寛政三亥年三月十四日、町御奉行初鹿野河内守様御番所へ、江戸本所深川町々名主共之内、都合五十
五人之内ニ〆、右助左衛門等モ被召出、諸色直段調掛り被仰付、同五月廿六日右掛名主共一同被召出、爲
御褒美金貳百疋ツ、被下置、助左衛門儀も難有頂戴仕ハ。

一、寛政六寅年十二月十八日、右助左衛門儀、名主肝煎役被仰付ハ。

右助左衛門實子佐太郎事
七代目　助左衛門

一、右助左衛門儀ハ、寛政七卯年四月十日名主役見習奉願、享和二戌年四月廿九日、實父助左衛門跡名
主役願之通被仰付、文化十一戌年二月廿八日、肝煎見習被仰付、同十二亥年四月六日肝煎出役被仰付ハ。
尤當子年迄三十四ヶ年相勤罷在ハ。

一、右助左衛門外拾八人、名主共一同、文化十一戌年四月六日根岸肥前守様御番所御内寄合ニ被召出、於
西御丸様竹千代様御誕生之節、別〆入念心附ハ様被仰渡之趣、松守（〇ママ）自身深更迄夜回り出精致ハニ付、被
仰上、金貳百疋ツ、被下置ハ旨被仰渡難有頂戴仕相勤罷在ハ。

七代目助左衛門實子忰
佐太郎
文政七申年三月三日名主役見習勤奉願相勤罷在候
同分家持茅屋
茂兵衛

茅場

茅場稲荷

一、草分人

右茂兵衛苗字勝村ト相唱、先祖茂兵衛儀ハ古來南茅場町ヨリ追々當町へ引移相續仕罷在ゐ者ニゐ、同町西角ヨリ六軒目、表京間四間壹尺七寸三分、裏巾同斷、裏行同貳拾間、此坪數八拾五坪三合貳勺三才御座ゐ。草創地壹ケ所所持致、則古來より住居仕、幷同續七軒目、表京間四間壹尺四寸六分之家屋敷壹ケ所、同續五軒目、表京間五間四尺壹寸三分同壹ケ所、古來追々買求、右三ケ所間口合拾四間八寸貳分之所、一ツ地面ニ仕罷在、尤享保十五六年之頃より茅商賣相止メゐへ共、所持屋敷等上り高を以ゐ、當茂兵衛迄古來より十一代相續仕罷在ゐ。

右茂兵衛儀、先年堅川通南側ニゐ、清水橋向深川南松代町四丁目之内、下之方ニ間口間數相知不申地面、所持仕、保養所補理置茅場ニ致差置、其頃右町地先河岸幷續河岸地共過半茅場ニ貸附有之ゐ處、茅場ゟ相唱ゐニ付火之元安穩之爲、茂兵衛所持屋敷内ニ、稲荷之社相建、則茅場稲荷と相唱祭置申ゐ。然ル處享保十九甲寅年十二月十八日、公方様御成之節、右茂兵衛所持屋敷内ニ乍恐御腰掛りゐ砌、五代目茂兵衛白銀壹枚頂戴仕、幷翌二十乙卯年十二月御腰掛り、右茂兵衛是又白銀壹枚頂戴仕、右貳枚共年號月日上包紙ニ認メ有之、壹枚ハ其儘、壹枚ハ開封仕ゐへ共、只今以貳枚共所持仕罷在ゐ。勿論其後年月相知不申勝手ニ付、右之所持屋敷賣渡ゐニ付、其節右茅場稲荷神體之儀ハ、古來より同前ニ祭置ゐ玉子稲荷ト唱ゐ社へ移、相殿ニ祭置申ゐ。

但、右ハ御成之節、稲荷屋敷へ御腰掛りゐ節、白銀頂戴仕ゐ段右銀包紙ニ認メ有之ゐ。

訴狀二通寫左之通

大平太船所持在々へ所金投下

茅葭賣場

乍恐以書付御訴訟申上ゐ。

一、先年南茅場町ニゐ、拙者共之儀茅場商賣仕罷在ゐ所、かさ高成商賣故、五拾五年以前ニ、深川御船藏近傍ニゐ新茅場町被爲下ゐ所、御船藏出來仕ゐ。又ゐ貳丁上へ御替地被爲下、茅葭商賣仕ゐ處貳拾五年以前兩國御橋掛申ゐ節、御用地ニ被爲召上、本所四ツニ目ゐ御代地被爲仰付、御代ゝ町御役等相勤罷在ゐ處、又ゐ去年御用地ニ被爲召上御代地之地所無御座ゐニ付、以賣券御金被爲下難有奉存ゐ。屋敷差上申ゐ事。

一、右ハ茅葭賣場無御座ゐ間、商賣不仕渡世送可申樣無御座迷惑仕ゐ。拙者共之儀ハ、大平太船所持仕、前々より買置ゐ茅葭段々船積江戸着仕、賣場無御座、殊ニ在ゝ所々ニ入置申ゐ金子すゝりニ罷成及餓命申ゐニ付、去年霜月十六日茅葭賣場本所ニゐ御年貢地御公儀樣へ御訴訟申上ゐ處、同十八日御同寄合へ被爲召出、御吟味之上ニゐ、同廿二日御評定所御式日ニ可罷出之旨被爲仰付ゐ。其節大久保加賀守樣へ御訴訟申上ゐ得共、同極月朔日町御奉行樣へ拙者共被爲召寄、右御訴訟申上ゐ茅葭置場賣場共ニ被爲仰付、則町御奉行樣御指圖ヲ以テ、同四日御評定所へ罷出、安部豐後守樣へ御禮申上ゐ事。

一、右之茅葭賣場、大久保平兵衛樣より同極月廿日ニ横八間半、長六拾間之所被爲渡難有奉存ゐ。然共北横堀之場末ニゐ御渡被遊迷惑仕ゐ間、其節より度々御訴訟申上ゐ。又ゐ當八月より繪圖以訴狀御訴訟申上ゐ。然ル處今度新百姓衆居屋敷御田地共ニ被爲召上ゐ。前々ヨリ御訴訟申上ゐ通拙者共之儀場末ニゐゐ得ゟ、商賣不罷成及餓命迷惑仕ゐ間以慈悲右被爲下ゐ場所ト替地ニ、新川通貳ノ橋ニゐ茅葭置場賣場共ニ被爲仰付被爲下ゐゟ御年貢御役等相勤罷在、大勢之者共助り難有可奉存ゐ。以上。

御代官様

一、十年以前子年本所ニ〆茅葭賣場被爲召上、迷惑仕ゆニ付、丑之霜月十六日茅葭賣場本所ニ〆御年貢地ニ御訴訟申上ゆ處、同十八日ニ御内寄合ヘ被爲召上御吟味之上ニ〆、同廿二日御評定所御式日可罷出之旨被爲仰付ゆ。其節大久保加賀守様ヘ御訴訟申上ゆ。同極月朔日ニ兩御奉行様、拙者共被爲召寄、御訴訟申上ゆ茅葭置場賣場共ニ被爲仰付難有奉存ゆ。則御奉行様ヘ御伺申上以御意、同四日御評定所ヘ罷出、安部豊後守様ヘ御禮申上ゆ事。茅葭置場賣場共本所、北ヶ輪三ツ目橋より貳丁下、横川之角、東側ニ〆、坪數五百拾坪之所被爲仰付ゆ。御年貢諸役相勤商賣仕、是迄大勢之者共渡世送り助り難有奉存ゆ事。

一、本所横川茅葭賣場去ル八日ニ御用地ニ被爲召上、迷惑仕ゆ間、御訴訟申上候事。

淺草山ノ宿町　助左衛門
同所　又兵衛
同　茂兵衛
同　次郎兵衛
同所御馬屋河岸　伊右衛門
同所　伊兵衛
本郷本町十　兵衛
馬喰町四丁目　五兵衛
同所　又兵衛

一、新茅場町、十年以前子ノ年御用地ニ被爲召上、御賣券御金被爲下、屋敷指上申ゆ。今度拙者共奉願上候場所、乍恐系圖以御訴訟申上候場所被爲仰付被下ゆハヽ、元茅場町賣券之御金差上可申ゆ間、御慈悲ニ被仰付被下ゆハヽ難有可奉存ゆ。

元祿六年酉七月十一日

淺草山ノ宿町　助左衛門
同所　又兵衛
同　茂兵衛
同　次郎兵衛
馬喰町四丁目　又兵衛
同　五兵衛
本郷本町十　兵衛
本所林町　伊兵衛
本所賣場　伊右衛門

以上書上年月欠

——御府内備考卷百三十一本所

茅場町二丁目

茅場町貳丁目（本所横江町東端町。）

一、當町起立之儀ハ、同町（茅場町。）壹丁目ニ〆申上ゆ通、同様ニ御座ゆ。其節明和五子年六月二十二日町内河

岸より出火仕、惣間敷京間五拾五間九寸八分之内、貳拾七間四尺七分五厘、此坪數五百五拾貳坪五合三勺八才程之所燒失致ゆ之付、同六丑年七月八日右類燒場所地主共町御奉行牧野大隅守様御番所へ被召出、類燒地面之分、猿江御材木藏火除御用地ニ被召上、同年十一月廿一日右爲代地深川佃町續稻垣對馬守様御下屋敷御上ケ地跡ニ為、惣間敷田舍間四拾五間六尺三寸九分余、右代地被下置、則町名本所茅場町貳丁目代地ト相唱申ゆ。

但、御公役銀上納仕、且御能拜見罷出ゆ儀、是又壹丁目同様ニ御座ゆ。

一、町内　東西ヘ表京間貳拾七間三尺四寸五厘、裏巾同斷。
　南北ヘ裏行東西共京間貳拾間ツヽ、但片側町竪川通南側。

一、四隣
東之方　高柳平次郎様御支配猿江御材木藏火除地人足寄場付地所。
西之方　本所茅場町壹丁目。
南之方　柑本兵五郎様御代官所武州葛飾郡西葛西領龜戸村田地。
北之方　竪川向本所柳原六丁目。

一、自身番屋之儀ハ、町内ニハ無御座、同町壹丁目河岸地ヘ模合、自身番屋建置、町用相勤申ゆ。

一、竪川　巾貳拾間。

右ハ町内北之方地先流、東之方猿江御材木藏火除地前より、西之方茅場町壹丁目前之方ヘ相流申ゆ。堀割年月并川巾河岸行道巾當時之姿ニ相成ゆ儀ハ委細壹丁目ニ為申上ゆ通ニ御座ゆ。

一、竪川河岸地　間口貳十九間四尺九寸壹分。河岸行八間。

右ハ文政七申年十月より、河岸地冥加金上納被仰付、金貳分と銀六分壹厘八毛以毎月上納仕ゆ。

一、町内東之方竪川通河岸會所、河岸行八間、巾五間之處、文政元子年四月十一日鷹御成之節、初為御上り場ニ相成ゆ處、其後御用ニ相成不申ゆ。

一、領名之儀ハ、葛飾郡西葛西領之内ニ御座ゆ。

茅場町三丁目　○市内本所區

一、當町起立之儀ハ、同町壹丁目ニ為申上ゆ通り同様ニ御座ゆ。
　但、御公役銀上納且御能拜見之儀、是又壹丁目同様ニ御座ゆ。

一、町内　東西ヘ表京間八拾六間貳尺七寸貳分、裏同斷。
　南北ヘ裏行、東西共京間貳拾間ツヽ。但片側竪川通北側。

一、四隣
東之方　深川北松代町壹丁目。
西之方　本所柳原六丁目。
南之方　竪川向猿江御材木藏火除地人足寄場付地所。
北之方　柑本平五郎（○長五郎歟）様御代官所武州葛飾郡西葛西領龜戸村白須甲斐守様御下屋敷。

一、町内里俗四ツ目ト相唱申ゆ。

右ハ四之御橋際之町屋ニ付相唱申ゆ。又ハ前栽場共相唱申ゆ。

一、自身番屋　○間口貳間半。奥行四間半。

右ハ町内河岸地西之方ニ有之、起立年月相知不申ゆ。

一、髪結床番屋　間口貳間壹尺。奥行五間。

右ハ四之御橋臺際河岸地ニ有之御橋番屋ニ御座ゆ。

一、竪川　○巾貳拾間。

右ハ町内南之方地先を相流、東之方深川北松代町壹丁目前より本所柳原六丁目前之方へ相流申ゆ堀割年月并川巾河岸行道巾共當時之委ニ相成ゆ儀ハ、委細同町壹丁目ゟて申立ゆ通ニ御座ゆ。

一、竪川河岸地　○間口田舍間九拾三間三尺七寸貳分。河岸行同八間。

右ハ文政七申年十月より河岸地冥加金上納被仰付、金壹兩貳分壹朱ト錢貳百十三文ツヽ毎月上納仕ゆ。右河岸地内物置拾三ヶ所、明樽置場小屋貳ヶ所、前栽物賣小屋十三ヶ所何ゟも御願濟御座ゆ。

一、御召場

右ハ本所柳原六丁目并町内境河岸會所地、河岸行八間、巾五間之内貳間程之處土俵御築立、鷄御成之節、寶暦三酉年四月廿七日ニ初ゟ御召場ニ相成、只今以鷄御成之節、御召場ニ相成申ゆ。尤御成相濟ゆ得ゟ、跡御構無之ゆニ付、右御上り段之所除キ置、右左之方兩町ニ物揚場ニ相用申ゆ。

一、前栽物市場

右ハ四月御橋際より西之方、町内半町程之所ニゟ市場起立之儀ハ、万治三子年當所へ代地被下置、竪川通四之御橋ニゟ、南側ニ有之、日向等宜敷ニ付、東西葛西領より毎朝前栽ものかりき出し、御橋近邊町内往還ニゟ賣捌ゆ儀ニゟ、其の節町内住居之者共方へ湯茶等乞ゆ間、振舞遣し、自然ト近在百姓と懇意ニ相成、追々右品買出し來ゆ者相增、前栽物賣捌方多分ニ罷成ゆニ付、右湯茶等致世話遣しゆ者方へ、舟ニ積來り、晴雨ニ不拘賣捌ゆ樣相成、町内ニゟ右荷物引請ゆ者拾貳人、并隣町深川北松代町壹丁目其外ニ拾三人、都合二十五人有之、右之者共寛文年中之頃より前栽物問屋ト相唱、右荷物引請、口錢ヲ取賣捌、只今以渡世仕罷在ゆニ付、爲冥加ニ初荷物參着仕ゆ節ハ、何品ニ不寄御納屋御役所へ御注進申上、御下知相濟不申内ハ、賣捌不致ゆ仕來ニ御座ゆ。且兩御丸樣御用土物青物等、神田多町、連雀町、永富町、右三ヶ所前栽物品屋へ被仰付御品切等之節、右場町より申來次第御差支ニ不相成ゆ樣、有合ゆ品々早速相納來ゆ儀ニ御座ゆ。尤右問屋之内、近來他町より町内へ引越參ゆ者四人有之、當時町内ニ前栽物問屋渡世仕罷在ゆ者、都合拾六人、北松代町壹丁目ニ右問屋渡世仕罷在ゆ者共八人、右仲間都合貳拾四人ニ御座ゆ。右體古來より前栽物市場ニゟ問屋渡世仕ゆ證據之儀ハ、寶永七寅年五月中前栽物仲買より取置ゆ取締連印帳壹冊、并享保十八丑年五月問屋仲間申合連印帳壹冊、寛政元酉年四月中同壹冊、町内右問屋共所持罷在ゆ。尤右之外書留并帳面類之儀ハ、三十九ヶ年以前、寛政二戌年正月二十二日出火類燒之節ニ燒失仕ゆニ付無御座ゆ。

一、四之御橋

右ハ北之方竪川ニ掛渡し有之、當町并深川北松代町壹丁目ヨリ南之方人足寄場付地所へ相渡ゆ板橋長サ拾間半、巾三間、萬治二亥年本所御奉行德山五兵衛樣、山崎四郎左衛門樣御掛ニゟ、出來仕ゆ。寛政二戌年正月廿二日出火之節類燒致、同年四月中町方御勘定方御拂ニゟ、御掛替御座ゆ。其後文化四卯年十月中御

河岸地冥加
物置所十
三ヶ所
明樽置場
二ヶ所
前栽物小屋
賣物十三ヶ所
前栽物市場
前栽物問屋
原屋起
御納屋
御役所

掛替御座候處、猶又文政六未年中七月御取掛御掛替、并南之方橋臺石垣損し御樂直御修復渡御座い。尤御橋臺道造之儀ハ町内ニゐる仕來申い。且右四之御橋南之方御橋臺下り口ニゐる、東西へ八間、同所往還ゟ御橋臺入口ニゐる八間貳尺、南北へ左右七間三尺之處、町方御掛ニゐる、寛政二戌年七月廿二日、當町并深川北松代町壹丁目右兩町へ見守被仰付、同町道造之儀も兩町ニゐる仕來申い。

右四之橋之儀ハ鵜御成之節、御渡越ニ相成申い。

右ハ町内善太郎店ニ住居仕罷在い。

一、領名之儀ハ葛飾郡西葛西領之内ニ御座い。

吉田殿御配下
神職　鈴木右内

——御府内備考卷百三十一所本

〔附記一〕寺院新建禁止

〔附記一〕　寺院新建禁止

是頃寺院ノ新建ヲ禁ス。○天成令。慶錄記。玉露叢。　卽チ大成令、慶錄記等寛文八年十月十三日ノ禁令ヲ載セ、

覺

一、新地建立之寺御停止之旨三十八年以前○寛永八年。被仰出之處、○下略。ト記シ、玉露叢ニハ。左ノ如ク見ユ。

同月○寛文八年四月。ニ仰出ル、ハ新地建立ノ寺院御停止ノ義ハ、卅八年以前ニ仰出ル、處也。其後御借置ル、寺地ノ分ハ被召上由也。是當春ノ火夏ニ燒失ノ寺院計也。其外ハ年數ノ通貸玉フ。

〔附記二〕前將軍德川秀忠ノ遺物遺金頒賜

〔附記二〕　前將軍德川秀忠ノ遺物遺金頒賜

九年○寛永。正月二十四日前將軍德川秀忠薨ジ二月其遺物トシテ貴物金銀ヲ親藩諸侯幕下ニ頒ツ事各差アリ。

廿四日○寛永九年正月。夜亥刻、大御所○前將軍德川秀忠。大漸に及ばせ給ふ。紀伊記

——大猷院殿御實紀卷十九

台德公○德川秀忠。寛永九年正月二十四日薨、二月七日諸大名等に遺言して金を賜ふ。其數通計五十二万六千四百六十三兩餘と云々。

——鹽尻卷三十五

大猷院殿御實紀載スル所ハ左ノ如シ。

六日○寛永九年二月。御ゆかりのかたゞ〳〵へ御遺物つかはさる。女院へ金貳千枚、銀一万枚。天樹院御かたへ金五百枚、銀二万枚。高田の御かたへ金一万枚、銀一万枚。松平新太郎光政母ならびに妻金百枚、銀千枚づゝ。高松故式部卿智仁親王、九條右大將道房卿の北の方へ銀千枚づゝ。故九條關白幸家公北のかたへ金百枚。松平越前守忠宗、加藤肥後守忠廣、松平長門守秀就の妻へ金二百枚、銀千枚づゝ。細川越中守忠利妻は金百枚、銀千枚。毛利甲斐守秀元、小出大和守吉英妻は金百枚づゝ。鍋島信濃守勝茂妻は金百枚、銀千枚。松平阿波守忠英母、松平右衞門佐忠之、京極丹後守高廣、加藤式部少輔明成妻は金百枚、銀千枚づゝ。松平土佐守忠義、有馬玄蕃頭豊氏妻、市場御方(神祖御妹、荒川甲斐守賴將室、後筒井伊賀守定次の室)有馬左衞門佐直純妻、大久保加賀忠守職母は金百枚づゝ。若州の常高院尼(京極宰相高次室、崇源院殿御姉君)金二百枚。尾紀の母堂并雲光院一位(阿茶局。女院の御母代)に金二千兩。淺野但馬守長晟が母良雲院尼金百枚。英勝院尼(加智局、神祖御側室)金二千兩賜ふ。水戸記。

七日○寛永九年二月。諸大名へ例年のとく暇賜ふ。又大御所御遺命とて、本城へ金卅万枚進らせらる。又諸大名へ賜はる御遺物は、松平越後守光長へ銀卅枚。松平出羽守直政、松平石見守輝澄へ銀千枚づゝ。松平大和

守直基、松平土佐守直良、松平右近大夫輝興、中川内膳正久盛、稲葉民部少輔一通、有馬左衛門佐直純、小出大和守吉英、稲葉淡路守紀通、伊東修理大夫祐慶、一柳大監直盛、松浦肥前守隆信、古田兵部少輔重恒、加藤出羽守泰興、池田備中守長幸へ銀五百枚づゝ。黑田市正高政、金森出雲守重頼、本多飛驒守成重、松倉長門守勝家、片桐出雲守孝利、山崎甲斐守家治、木下右衛門大夫延俊、島津右馬頭忠興、秋月長門守種春、織田出雲守高長、小出對馬守吉親、龜井大力茲政、大村松千代純信、遠藤伊勢守慶利、本多因幡守政武、分部左京亮光信、市橋伊豆守長政、毛利攝津守高成、織田辰之助信勝、京極修理大夫高三、戸川土佐守正安銀三百枚づゝ。五島淡路守盛利、桑山左衛門佐一直、片桐石見守貞昌、久留島越後守通春、青木甲斐守重兼、小出大隅守三尹、土方本助雄高、平岡石見守頼資、織田丹後守長政銀二百枚づゝ賜はり、又御側室清雲院尼に金百枚。加賀中納言利常卿の娘万姫、寵姫へ銀二千枚づゝ下さる。又在封の輩へ驛賜せられしは、加賀中納言利常卿へ卿の御刀并金一万枚。仙臺中納言政宗卿へ銀一万枚。松平伊豫守忠昌、松平宮内小輔忠雄、佐竹右京大夫義宣、森美作守忠政、細川越中守忠利、松平長門守秀就、加藤肥後守忠廣、淺野但馬守長晟、松平右衛門佐忠之、上杉彈正大弼定勝、京極若狹守忠高、鍋島信濃守勝茂、藤堂大學助高次、加藤式部少輔明成、松平新太郎光政へ銀五千枚づゝ賜はり、忠昌へ青江國次の御刀。忠雄へ二字國俊の御刀。忠之へ五聖房茶壺。高次へ無準の墨跡。明成へ虚堂墨跡。光政へ唐肩衝添て下さる。松平阿波守忠英、堀尾山城守忠晴、松平土佐守忠義、松平中務大輔忠知、生駒壹岐守高俊、南部信濃守利直、有馬玄蕃頭豊氏、寺澤志摩守廣高銀三千枚づゝ賜はり。忠英へ山内國次の御刀。忠晴へ同じ御刀。忠義へ四聖坊(一本瀬戸肩衝)。忠知へ小柴茶壺。高俊へ大柴茶壺そへて下さる。京極丹後守高廣、宗對馬守義成、毛利甲斐守秀元、立花飛驒守宗茂、伊達遠江守秀宗、丹波宰相長重、本多甲斐守政朝、松平隱岐守定行へ銀二千枚づゝ。細川忠興入道三齋へ金五百枚。織田越後守長政、蒔田左衛門權佐廣定、長谷川式部少輔勝知、建部三十郎政長、池田内藏助重政、伊藤若狹守長昌、谷大學助衛政へ銀二百枚づゝ賜ふ。天享東鑑。紀伊摩延略記。記。

十二日寛永九年二月。酒井讃岐守忠勝御使し、御遺物とて尾紀兩卿に銀三万枚づゝ。水戸中納言頼房卿へ銀二万枚遣はさる。又井伊掃部頭直孝へ銀五千枚。松平下總守忠明へ三千枚賜ふ。水戸記。

十四日○寛永九年二月。けふも御遺金を賜ふ。松平式部大輔忠次、奥平美作守忠昌、鳥居左京亮忠政、酒井宮内大輔忠勝、松平丹波守康長、内藤左馬助政長、牧野右馬允忠成、眞田伊豆守信之、堀丹後守直寄、水野日向守勝成、松平周防守康重、小笠原右近大夫忠眞、戸田左門氏鐵、松平越前守定綱、岡部内膳正長盛は銀千枚づゝ。松平山城守忠國、松平和泉守乘壽、松平主殿頭忠利、菅沼織部正定芳、松平紀伊守家信、黑田甲斐守長興、本多伊勢守忠利、石川主殿頭忠總、本多能登守忠義、松平右近將監成重、内藤豊前守信照、松平五郎忠憲、大久保加賀守忠職、相馬長門守義胤、戸澤右京亮政盛、淺野采女正長重、脇坂淡路守安元、仙石越前守政俊、秋田河内守俊季、津輕平藏信義、九鬼長門守守隆、本多下總守俊次、諏訪因幡守頼水、保科肥後守正之、水野隼人正忠清、松平大膳亮忠重、溝口出雲守宣直、小笠原信濃守長次は銀五百枚づゝ。土岐山城守頼行、内藤帶刀忠興、小笠原左衛門佐政信、丹羽式部少輔氏信、北條出羽守氏重、戸田因幡守忠能、西郷若狹守正貞、松平玄蕃頭清昌、水谷伊勢守勝隆、加藤式部少輔明成、新庄越前守直好、佐久間日向守忠長、岩城左兵衛宣隆、大關土佐守高增、松下左助長綱、細川玄蕃頭興昌、

織田百助信昌、六郷兵庫頭政乗、眞田河内守信吉、土方彦三郎雄次、松前志摩守公廣、太田原左兵衛政清、那須美濃守資重、佐久間大膳亮勝之、前田大和守利孝、溝口伊豆守善勝、遠山刑部少輔秀友、眞田大内記信政、本多三彌正貫、酒井長門守忠重、水野遠江守忠猶、松平外記忠實、寄合日根野織部正吉明、設樂甚三郎貞代は銀三枚づゝなり。紀伊記。東武實錄

十九日（寛永九年二月。）蜂須賀家政入道蓬庵御遺金三百枚たまふ。紀伊記。

廿六日（寛永九年二月。）御遺金を賜ふ。酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝銀二千枚づゝ。酒井讃岐守忠勝、永井信濃守尙政、稲葉丹後守正勝、青山大藏少輔幸成、内藤伊賀守忠重銀千枚づゝ。酒井山城守重澄、安藤右京進重長、酒井阿波守忠行、高力攝津守忠房銀五百枚づゝ。井上河内守正利、水野監物忠善、板倉内膳正重昌、秋元但馬守泰朝、島田彈正忠利正、加々爪民部少輔忠澄、堀式部少輔直之、牧野内匠頭信成、松平伊豆守信綱、阿部豊後守忠秋、三浦志摩守正次、堀田加賀守正盛、松平大隅守重則、松平右衛門大夫正綱、伊丹播磨守康勝、植村帶刀泰朝、保科彈正忠正貞、植村出羽守家政、松平出雲守勝隆、小笠原壹岐守忠知、皆川志摩守隆庸、安部攝津守信盛、水野備後守元綱、松平豊前守勝政、堀市正利重、松平縫殿助眞次は銀四百枚づゝ。本多美作守忠相、土屋民部少輔利直、鳥居石見守忠賴、堀采女正直政、池田帶刀長賢、朽木民部少輔稙總、服部玄蕃頭政久、稲垣若狹守重太、三枝土佐守守惠、朝倉織部正豊明、太田采女正資宗、佐野左京亮正直、竹中采女正重義、永井式部少輔直重、酒井下總守忠正、成瀨伊豆守之成は銀三百枚づゝ。日下部大隅守宗好、田中主殿頭吉官、松平監物乘次、大河内平十郎正勝、酒井和泉守忠吉、玉虫助大夫重茂、土屋市之丞勝正、水野左衛門忠貞、齋藤左源太利政、小栗又市政信、川勝丹波守廣綱、跡部民部良保、城織部佑信茂、德山五兵衛直政、眞田長兵衛幸政、中山勘解由照高、永田勝左衛門重眞、富永主膳正重吉、柘植三四郎正時。柳生但馬守宗矩、赤井豊後守忠泰、神尾内記元勝、大久保源三郎忠知、多賀左近常長、森伊豆守重政、柳原左衛門職直、今村傳四郎正長、佐久間將監實勝、堀三右衛門直景、石川八左衛門政次、永井監物白元、渡邊圖書助宗綱、朝倉仁左衛門在重、石河三右衛門勝政、石川六左衛門重勝。鵜殿新三郎長直、秋山修理亮正重、井上筑後守政重、宮城甚右衛門和甫。仙石大和守久隆、新庄美作守直房、飯田四郎左衛門重次、京極主膳正高通、内藤市正信廣、柴田筑後守康長、川窪主膳信雄。諏訪隼人賴郷、高木肥前守正成、大久保彦左衛門忠教、服部權大夫政信、花房志摩守幸次、八木勘十郎守直、酒井内記忠重、永井傳十郎直清、山岡圖書頭景以、渡邊半兵衛勝綱、松平美作守定房、依田肥前守信政、今村九郎兵衛吉正、大久保新八郎康村、松平伊賀守忠晴、高木筑後守正次、中根傳七郎正成、岡野平兵衛房恒、松平新五左衛門直次、河野權右衛門通重、横田甚右衛門尹松、榊原八兵衛正成、横田次郎兵衛述松、小川新九郎長保、安藤傳十郎定智、神谷與七郎清正、太田善大夫吉正、内藤外記正重、山田十大夫重利、布施孫兵衛重直、永見新右衛門重成、坪内惣兵衛定仍、岡部小右衛門吉正、森川金右衛門氏信、井上太左衛門重成、渡邊孫之助勝、永井清右衛門某、阿倍四郎五郎正之、本多太郎左衛門信勝、久世三四郎廣當、加藤喜助正重、久永源兵衛重知、服部中保俊、阿陪四郎兵衛重信、安藤次右衛門正珍、近藤登助貞用、堀田權右衛門一純、馬場三郎左衛門利重、大久保助左衛門忠政、能勢治左衛門賴重、本郷勝右衛門勝吉。黑川八左衛門盛至、石谷友之助清正、庄田小左衛門安照、神保三郎兵衛重利、中山助六郎直定、都筑彌左衛門爲次、岡野權左衛門英明、長谷川久三

郎正信、朝比奈勘右衞門良明、大久保甚右衞門長重、兼松彌五左衞門正直、花房勘右衞門正盛、伊澤隼人正政信、曾我又左衞門古祐、神尾宮内少輔守勝、向井將監忠勝、水野甲斐守忠保、根來小左次盛正、齋藤伊豆守利宗は銀二百枚づつ。神尾刑部少輔守世、眞田隱岐守信昌、川村善次郎重久、小濱彌十郎安隆、小林勝之助正直、大久保主膳正幸信、大久保右京亮敎隆、有馬出雲守豊長、一色宮内義直、服部杢助政次、竹中筑後守重信、小笠原安藝信盛、楫斐興右衞門政景、間宮虎之助長澄、大久保玄蕃頭忠成、山口半左衞門重恒、朝比奈源六泰勝、酒井石見守忠定、夏目杢左衞門吉次、水野出雲守成貞、花井庄右衞門吉高、菅沼三五郎政次、酒井左京亮忠久は銀百枚づゝ。内藤勝兵衞直信は金五拾兩、酒井藏人忠次、石丸淡路守定次、松平内藏助正成、大久保主馬正朝、遠山因幡守資爲、水野右京亮勝忠、加々爪甲斐守直澄は金百兩づゝ。齋藤右近三友、小出右馬助尹貞、佐藤外記信成、太田三十郎某、土岐伊織頼久は金八拾兩づゝ。大草大學公利、内田權九郎正信、森川金十郎之俊、山口忠三郎直治、島田刑部少輔直次、筒井左馬助正信は金七十兩づゝ。松田牛之助定鄕、弓氣多主水昌勝、本多主馬助俊昌、朝岡權三郎國孝は金六十兩づゝ。松平織部忠利、朝倉三十郎重宣は金五十兩づゝ。土屋金彌之直、瀧川大學利貞、清水權之助政利、有馬長門守信堅、伊東主膳正祐豊は銀百枚づゝ。宮崎金右衞門時重、保々半左衞門貞廣は金百兩づゝ。藤川孫十郎重信、戸田九郎兵衞某、中根平十郎正盛は金八十兩づゝ。大岡兵藏忠吉、長坂血鑓九郎信次、大岡忠四郎忠種は金六十兩づゝ。牟禮万五郎勝政、高木善七郎守久、大塚平右衞門重世、小栗平吉久玄、小林長五郎直次、大久保彦十郎忠貞、喜多見久太夫重勝、水野金十郎某、日下部作十郎正定、水野小十郎元吉、野々山新兵衞兼綱、關兵三郎正成金五十兩づゝ。又堀淡路守直升、松平庄右衞門清直、松平美作守定房、宮城主膳正豊嗣に銀二百枚づゝ。青木二郎右衞門直澄、大島茂兵衞義唯、石河伊豆守貞政、吉良上野介義彌、朽木兵部少輔宣彌、脇坂主水正安信、花房平吉職利、船越三郎四郎永景、竹中左京重常、平野權平長勝、關兵部少輔氏盛、堀田兵部少輔一通、大澤兵部大輔基宥、本堂伊勢守茂親、横山土佐守興知、眞田隼人信重、喜連川右兵衞督尊信、遠山勘右衞門方景は銀百枚づつ。神保左京茂明、大島久吉義豊、井上淡路守庸名、多羅尾久八郎光雅、宮原右京晴克、山内伊豆守一唯、品川新六郎高久、福原淡路資盛、岩城左兵衞宣隆、土岐市正持益、吉良若狹守義冬、桑山左近大夫貞晴、千本大和守義等、今川主膳正直房、芦野民部少輔資泰、畠山長門守義眞、織田美作守高重、山岐左馬助頼勝、蒔田左兵衞義祗、福島市之丞正利は五十枚づゝ。又阿部備中守正次は金百枚。稲垣攝津守重綱、久貝因幡守正俊は五十枚づゝ。渡邊山城守茂、水野河内守守信、小堀遠江守政一は三十枚づゝ。小濱民部少輔光隆は廿枚賜はる。西城書院番六隊銀百枚あるは金五十兩。本城書院番四隊同じ。兩城花畠番十二隊銀百枚。また金五十兩、あるは三十兩二十兩。大番十一隊は金六十兩。あるは五十兩、又は三十兩、二十兩。小十人組四隊は五十兩、又は二十兩。納戸番はその頃杉浦内藏允正友、内田平左衞門正世は銀二百枚づゝ。番士は金六十兩。あるは五十兩。また二十兩。御膳奉行十三人六十兩。また五十兩諸道具奉行七人は銀百枚、あるは金五十兩。腰物役十六人金五十兩、又三十兩。腰物奉行十一人金五十兩。奥方番十二人は六十兩、又五十兩、二十兩。鎖炮打五人五十兩。鎖炮役人四人五十兩、または三十兩。道奉行二人六十兩。破損奉行三人同じ。鎖炮奉行二人、具足奉行二人、船奉行二人、材木奉行三人、幕奉行一人は五十兩。馬預八人は六十兩、または五十兩。馬屋の徒は五十兩、または三十兩、二十兩。細工

方三人五十兩。又は四十兩。馬屋方九人三十兩、また二十兩。金奉行六人は五十兩。殺生方八人は二十兩、又は十兩。醫員十四人は金十枚五枚三枚二枚とわかち下され、儒役林道春信勝、永喜信澄は金五枚づゝ。二丸衆三人は三十兩。女院附天野豊前守長信、二條城門番春日左衞門家吉は銀百枚づゝ。その下三人は金五十兩、または三十兩。鷹匠加藤伊織則勝は銀百枚。所屬九人は金六十兩、また五十兩、三十兩。大坂役人十八人銀百枚。又金六十兩。千人頭十人は三十兩、また二十兩。黑鍬小細工九人は二十兩、又は十兩。歩行目付二十五人は銀二十枚、十枚、又は金十兩。徒押七人は銀十枚。夜居間番十二人は銀十枚。灯燈奉行四人は金十兩。火番十八人は銀十枚。大工頭二人は銀百枚。淺井半兵衞元成、尾崎助大夫信重は金五十兩。山川撿校城管金三十兩。同朋一人三十兩。庖所徒七十六人は六十兩、又は三十兩、二十兩、十兩、七兩、五兩、四兩。下男四十二人は銀一枚づゝ。その頭は三枚。賄方頭二人は五十兩。その同心六十三人は金五兩、又は三兩。大番十一組與力八十騎に二百兩。同心は二十人に銀百枚。その外諸隊三十六組與力は金二十兩。同心に銀六枚、あるは五枚。歩行士十六組は各隊の組頭二人へ金二十兩づゝ。組士二十八人に銀二百八十枚。數寄屋坊主六十三人は金三十兩、または二十兩、銀二十枚、又は十枚、五枚三枚。內宮の坊主六人へ十八枚。二丸坊主五人七枚、四枚。花作坊主四人五枚、又は三枚。廣間坊主百十一人は銀十枚、五枚、四枚、三枚。時計方二人、鳥飼二人、泉水方二人三枚づゝ。中間頭は七人十枚、六枚、五枚。中間三百廿七人二枚づゝ。馬取頭四人五枚。組頭九人三枚。持繼廿人。馬取三十五人三枚づゝ。駕籠頭二人六枚づゝ。其下三人三枚。舁夫四十四人三枚づゝ。御旗指三十五人幷に小人頭四人金二十兩銀十枚。その下十七人は五枚、三枚。幷小人二百二人は二枚づゝ。草履取十八人五枚づゝ。力者十二人三枚づ

彌宜町芝居興業

彌宜町芝居興業事蹟

つ。小道具持廿四人。御馬印五人は三枚づゝ。幷に小人は二枚。長柄千人は一枚づゝなり。東武實錄。

而シテ大判・小判ハ金幣ニシテ、大判ハ一枚量目四十三匁、小判ハ一兩、四匁七分余、銀ハ大判一枚量目四十三匁也。以テ巨額ノ金額ヲ頒賜セシヲ知ルベク、府庫頗ル富ミタルヲ窺フベキ歟。

四月○寛永九年壬申。（紀元二二九二年）**中橋**○市內京橋區。**中村勘三郎芝居其他ヲ彌宜町**○市內日本橋區。**ニ移ス。**○戲場年表。

彌宜町芝居興行　寛永九年中橋ノ劇場ヲ彌宜町ニ移シ、其後彌宜町堺町等ニ劇場增設セラル。

寛永九壬申年　中橋より芝居を彌宜町へうつす。今の人形町の事なり。　——歌舞妓年代記

同○寛永。九年壬申

四月○寛永九年。中村勘三郎芝居、外に芝居とも彌宜町へ移り、是迄通り興行差許旨、申渡さる。是御城近きか故也。彌宜町は今の長谷川町也。　——劇場年表

同○寛永。九年壬申

中村勘三郎か芝居、中橋より彌宜町へ移る。今の人形町なり。　——武江年表

長谷川町○市內本橋區。

長谷川町　此地モ慶長ノ開創ニシテ、昔ハ此町ヲ彌宜町ト云ヒ、杉森社ノ彌宜此ニ住メリ。後市廛トナリ、今ノ町名ニ改ム。里俗西横通リヲ人形町ト云、南新道ヲ三光新道ト云。　——東京府志料

長谷川町

沿革　相傳フ、慶長年間ノ開創ニ係ルト。杉森社ノ神官此ニ住スルヲ以テ、初メ彌宜町ト稱セリ。明暦以

後開テ市肆ト爲シ、今稱ニ改ムト云フ。江戸圖說。東京府志料。○或云、長谷川久兵衛ト云モノノ草創ニ係ル故ニ此名アリ。人形町里俗本町ト稱ス。新和泉町ノ間ヲ稱ス。偶人ヲ賣ル者多シ。三光新道里俗本町ト稱ス。三光稲荷社アルニ因レリ。

〔參考〕人形劇ハ、是ヨリ先元和中、已ニ之ヲ淺草寺門前ニ爲ス者有リタリト見エ、寒松稿ニ左ノ如ク記ス。

傀儡子二首

嘉會偶人倭漢風。却疑歌妓出房櫳。棚頭遊戲共成舞。善巧應機幃幄中。

皷聲太急笛聲頻。魁櫺猶如歌舞人。願著襴袗戴其蓋笠。向棚頭看掌中身。

芝阜病叟與命子題。

辛酉○元和七年。九月十七八九日參詣觀音者、寺門如市見之。

御勘定頭任命

五月三日庚子○寛永九年壬申（紀元二二九二年）○庚子。三正綜覽。幕府松平右衛門大夫正綱ニ加フルニ伊丹播磨守康勝、杉浦内藏允正友、酒井伊紀守忠吉三名ヲ御勘定頭（後ノ御勘定奉行）ニ任ズ。○柳營補任。

御勘定頭任命事蹟

勘定頭任命

御勘定頭

元御役料七百俵、天和二戌年四月廿一日御役料地方直一統御加增、其後御役料如ニ前々一被下、享保八卯年六月十八日三千石高定號奉行。

松平正綱

年月日不詳御近習出頭ヨリ御小性組番頭兼帶慶安元子六月廿二日卒。

伊丹康勝

寛永九申五月三日御納戸頭ヨリ

同十二亥五月廿一日佐渡奉行兼帶

萬治二亥七月日辭。

杉浦正友

同日同斷ヨリ

三千石御加增

同十二亥十一月九日御留守居。

酒井忠吉

同日

同十一戌二月廿五日御留守居。

伊丹勝長

寛永十九年二月三日詰並ヨリ

寛文二戌二月廿七日御代官一色内藏介ト打果ス。

曾根吉次

寛永十十九年八月十六日御勘定吟味役ヨリ

寛文元丑十一月十九日辭。

御勘定奉行

寄合頭より、慶安元子御免。

寛永九年五月三日、御納戸頭より、（中略）萬治二亥七月御免。

寛永十一戌二月廿五日、御留守居に。

寛永十二亥十一月九日、御留守居に。

寛永十九年三月三日、詰衆並より、寛文二寅二月廿七日、御代官一色内藏介被ニ打果一。

寛永十九年八月十六日　御勘定吟味役ヨリ

寛文元巳十一月十九日依レ願御免。

伊丹播磨守康勝

杉浦内藏允正友

酒井紀伊守忠吉

伊丹藏人勝長

播磨守

曾根源左衛門吉次

——柳營補任六。武家補任ニ依リ補訂。

松平右衛門大夫正綱

伊丹播磨守康勝（後改ニ順齋一）

酒井紀伊守忠吉

杉浦内藏允正友

伊丹播磨守勝長

曾根源左衛門吉次（○吉一作レ良）

——諸役代々記五上

御勘定奉行ノ沿革ハ、其頭初ノ事諸書出入アリテ詳ナラズ。上掲柳營補任及ビ諸役代々記ハ、曾根源左衛門

關東勘定頭

吉次ノ勘定頭就任ヲ寛永十九午年八月十六日ト爲セドモ、大猷院殿御實紀ハ已ニ寛永七年及ビ同九年ニ曾根源左衞門吉次ノ關東勘定頭タルヲ記セリ、即チ左ノ如シ。

寛永七年、此年曾根源左衞門吉次、東國を巡見し、關西洪水の地も巡見し、加恩ありて關東勘定頭になり。○下略。

——大猷院殿御實紀十六

寛永九年七月廿六日、諸國巡察の輩暇賜ふ。上方は○中略。勘定組頭杉田九郎兵衞忠次○中略。關東は○中略。勘定頭曾根源左衞門吉次○中略。なり。

——大猷院殿御實紀二十

更ニ御役人代々記ハ、曾根源左衞門吉次ニツキ左ノ如ク記セリ。

御勘定吟味役　仲ノ間

曾根源左衞門（后源左衞門藏）

元和年中ヨリ右衞門大夫副役
寛永十八巳年正月十八日御勘定奉行被ニ仰付一千石御加增。

○附箋

此役天和二戌年六月十四日始テ被ニ仰付一、元祿十二卯年十二月廿一日ヨリ正德二辰年七月朔月マテ闕役、但曾根源藏、松平右衞門大夫副役ニテ當時吟味役ニ類スル者也記レ之。

——御役人代々記

以下寛永年中ノ御勘定頭ニ關スル記事ヲ年次ニ并列シテ史實ノ把捉ニ便セン。

寛永十二年四月十四日、御勘定頭ゟ佐渡國金銀支配之事、兼可勤旨被仰之、御勤定頭は松平右衞門大夫○正綱。酒井紀伊守○忠吉。杉浦内藏允○正友。伊丹藏人○康勝。也。

〔古事類苑〕　按ズルニ、大猷院殿御實紀ニハ、伊丹康勝一人ニ命ジタル事見エテ、之ヲ寛永十二年五月二十二日ノ事トシタリ。

——營中御日記十二

廿二日○寛永十二年五月。伊丹播磨守康勝佐渡國金鑛の事、つかさどるべしと仰付らる。

——大猷院殿御實紀

寛永十二年乙亥年十一月十日

一、關東中御代官方并百姓御用訴訟之事

松平右衞門大夫○正綱。伊丹播磨守○康勝。伊奈半十郎○忠治。大河内金兵衞○正綱。曾根源左衞門○吉次。以上五人勘定奉行。

右五人、一月づゝ貳番にいたし可ニ承事

——憲政類典御役二ノ五

寛永十二乙亥年十一月

一、關東御代官并百姓承ゝ日

九日　十九日　廿七日

——憲教類典四ノ五上評定

寛永十三年、此年○中略。曾根源左衞門吉次は惣勘定頭となり。

——大猷院殿御實紀三十三

寛永十四年、このとし勘定頭曾根源左衞門吉次は、評定の席に列り衆訴をきかしめらる。

——大猷院殿御實紀三十六

惣勘定頭

按ズルニ、是勘定奉行ノ訴訟ニ預リシヿノ見エタル始ナリ。

寛永十六年十二月十二日、疱所費用の事査檢すべき旨、勘定頭伊丹順齋康勝、曾根源左衞門吉次、留守居牧野内匠頭信成、杉浦内藏允正友に命ぜらる。

——大猷院殿御實紀四十二

勘定奉行

勘定奉行

曾根源左衛門　伊丹播磨守康勝　酒井紀伊守忠吉　杉浦内藏允正友　松浦内善允正　伊丹播磨守康勝

元寛記日記曰、寛永十八年正月、曾根源左衛門良次補之、同十九年三月、伊丹播磨守康勝、杉浦内藏允正友、酒井紀伊守忠吉等輔之、依是別當職始ニ曾根氏乎、又曰、神祖及台德院殿之代、松平右衛門大夫正綱一人ゟ奉ニ當職事一也慶延略記、載ニ伊丹杉浦酒井三氏補職之事一而曰、於ニ御事所一而被レ申ニ諸事可ニ吟味一之旨ニ也。——東職記聞一

播磨守源康勝○伊丹。は○中略。松平右衛門大夫正綱と共に、郡國の吏務、貢賦の結解等を司り、寛永十九年三月三日、始て勘定頭三人を置かれし時、其第一に擇まれき。年老て頭の毛悉く禿なりぬれば、おのづから入道して順齋と號す。

諸役人帳を按ずるに、此人年頃松平右衛門大夫と同じく、天下吏務の奉行人たり。後に二人ながら、いさゝか御勘氣を蒙る事あつて蟄居せり。其後をば御代官伊奈半十郎、大河内金兵衛の二人假に司る。其後これも御代官曾根源左衛門其事を兼ね司る。こゝに於て播磨入道順齋、酒井紀伊守○忠吉。杉浦内藏助○正友。の三人を以て、御勘定頭になさる。是れ御勘定頭の初なりと云々、然れば伊丹かくの如き職に在る事再度なり。

——藩翰譜五伊丹

右衛門大夫源正綱○松平。は○中略。凡天下郡國の吏務、貢賦の結解をつかさどり、要劇の職に居て、終に一事の淹滯なし。寛永十九年三月三日、始て勘定頭といふ職置かれて、伊丹播磨守康勝、酒井紀伊守忠吉、杉浦内藏允正友等、三人に司らしめらる。是れ正綱が年來壹人して司りし所なり。これ寛永の日記に見えたり。按ずるに、正綱が晩年に伊丹播磨守と二人して、事を行ひしと見え、又諸役人帳に、御勘定頭の下に、初めに右衛門大夫、播磨守二人を載せしは誤なり。

——藩翰譜二松平長澤。

勘定奉行職責

御勘定奉行之事幷吟味役之事

問云、御勘定奉行ハ、先規ゟ諸大夫役にい哉、諸大夫役にて無之衆ゟ昔ハ有ゝ之樣ニ及承い。此譯如何に被聞及い哉。

答云、御勘定奉行之事は、寛永年中迄ハ、兼帶役之樣ニ承い。御留守居年寄衆ゟ伊丹播磨守後順齋と改む。酒井紀伊守、杉浦内藏允、右之衆兼役にゟ被勤い由、其以後妻木彦右衛門、杉浦伊右衛門、德山五兵衛抔無官にて當御役被勤、伊丹後播磨守、杉浦後内藏允、甲斐庄飛驒守、岡部駿河守、大岡備前守、此面々は諸大夫にゟい。極ゟ諸大夫役と申に被初付いは、天和二戌年十二月廿六日と及承い。惣ゟ右之外御作事奉行、御普請奉行抔も、寳永八年寅十二月より極ゟ之諸大夫役に成い由承い。

——仕官格義辨

天和二年十二月廿七日、諸大夫になるもの十一人○中略。勘定頭中山主馬信久は隱岐守と稱す。

——常憲院殿御實紀六

勘定奉行ノ職責

勘定奉行ハ、民治、財政、爭訟ノ事ヲ掌リ、郡鄕吏員ノ能否ヲ監査ス。故ニ全國ノ郡代、代官及ビ切手米手形奉行、藏奉行、繩竹殘物奉行、金奉行、錢奉行、林奉行、漆奉行、油奉行、川船奉行等ヲ支配シ、又驛路ノ事ニ關スル道中奉行ノ職ヲ兼ヌ。時ニ由リテ三人若シクハ五人ヲ置クコトアレドモ、大抵四人ヲ定員ト爲シ、内二人ヲ勝手方、二人ヲ公事方トシテ、一箇年每ニ互ニ相交替シ、各々月番ヲ定メテ政務ヲ行フ。

勝手方ハ、專ラ租稅ノ徵收、米錢ノ出納、金銀銅山、諸役人ノ知行割等、總テ幕府ノ民政財務ニ關スル一切ノ事ヲ掌リ、

公事方ハ、專ラ關東八州ノ公私領及ビ關外公領ノ訴訟ヲ聽斷ス。公事方ノ其支配下ノ訴訟ヲ聽クハ、月番

ノ宅ニ於テスレドモ、事ノ他ノ支配ニ關聯スルハ、評定所ニ於テ合議裁決スルコト、寺社奉行ト異ナルコトナシ。此職ハ三千石高ニシテ、從五位下ニ叙シ、役料七百俵、手當金三百兩ヲ給スルヲ例トス。屬僚ニ勘定組頭、勘定衆アリ、勘定組頭ハ十餘人アリ、勘定衆ヲ指揮シテ、其事務ヲ監督ス。三百五十俵高ニシテ、役料百俵ナリ。勘定衆ハ御殿詰、勝手方、取箇方、伺方、帳面方、道中方、評定所留役等ノ諸課ニ分レテ、其數二百餘人アリ。通常百五十俵高ニテ、別ニ役扶持ヲ給ス。其他支配勘定アリ。勘定出役アリ。抑ゝ勘定奉行ノ職ハ、德川氏ノ初世ニ在リテハ、松平正綱一人ノ掌ル所ナリシガ、寛永ノ末ニ曾根、伊丹、杉浦、酒井等ノ諸氏、同時ニ之ニ補セラレシヨリ、其職制モ粗ゝ定マリ、享保六七年ノ頃ヨリ、勝手方、公事方ヲ分チテ、其分掌益ゝ明確トナリ、又勘定所ヲ營中ト大手門内トニ置キ、營中ノ勘定所ニテハ、一般ノ財務ヲ總統監督シ、此ニ出仕スル役人ヲ御殿詰ト云ヒ、大手門内ニテハ、專ラ地方ノ財務ニ關スル重大ノ事件アルゴトニ必ズ臨時ニ其掛リヲ命ゼラレテ、其議ニ參與スル重職ナレバ、其人ヲ得ルト得ザルトハ、幕府勢力ノ消長ニ關係シ、萬民ノ休戚ニ影響スルヲ以テ、屢ゝ令ヲ下シテ其過誤失錯ナカランコトヲ戒飭セシガ、明治元年ニ至リ、遂ニ寺社奉行、町奉行ト共ニ廢止セリ。

——古事類苑官位部三。

一、御勘定奉行ハ、國を治め民を養ふ事を司る職に侍れば、重き御役と見へたり。むかしハ是も御老中の兼勤られ、其後松平右衞門大夫殿當役勤申されたるに付、夫までは町奉行より上たるといへり。伊丹播磨守殿、酒井紀伊守殿、杉浦内藏允殿御役之比より町奉行衆の次ゟ成きたるか、播磨守殿ハ伊丹喜之助とて御近習ゟて輕き御奉公勤られしを才智有地方鍛錬なる人とて御取立、當役ゟ被仰付毎度御加增被下壹萬石領せられ、後には剃髪伊丹順齋と云けるが、御勘定奉行ハ勤らる。紀伊守殿ハ酒井讃岐守殿舍弟なれば俗姓も貴けれ共番頭にも成給はゞ、此御役被仰付、内藏允殿ハ小拾人より成立て御納戸頭勤られしが、算勘に達し申されたるとて仰付られたる三人同時の御勘定奉行也。右之内紀伊守殿と内藏允殿ハ御留守居ニ成きても御勘定奉行猶被勤ゟるといへり。人數ハ其後も三人或ハ四人ゟて不定なり。むかしは、當御役ゟ成る人三千石の高ニ被仰付ゟ故、御加增有たり。曾根源左衞門殿小身なるに付大分御加增被下、高三千石成きたり。御役も久敷勤仕せられ隱居してハ曾根覺齋と改られしが、御役中諸大夫ニハ被仰付ざる也。順齋の子息伊丹藏人殿御勘定奉行ニ成き、諸大夫ニ被仰付て名を是も伊丹播磨守殿と改らきしハ万石以上の故なるべし。岡田豊前守殿ハ御役已前ゟ伊勢御宅御造營奉行勤らきて其時諸大夫ゟ被仰付ゟ。此外之衆ハ御加增被下、三千石已上ニハ成きゟれ共、諸大夫ニ被仰付人ハ無之、何きも布衣ゟて居られしゟり。綱吉公御代延寶八年十月七日、高木善左衞門殿を彦坂源兵衞殿當役被仰付し時、御加增減少、千石宛の御加增也。兩人共ゟ小身ゟるに付き三千石ニハ詰らざりきる。天和二年十一月二十八日中山主馬殿被仰付ゟるも、千石御加增ゟて三千石ニハ成らきざりし事也。夫より已後ハ千石御加增も止て、五百石ニ減じ、大方ハ御加增無之、御勘定奉行被仰付と見へゟり。諸大夫役ゟ成ゟる事ハ、天和二年十二月二十七日當御役大岡五郎右衞門殿、彦坂源兵衞殿、中山主馬殿を叙任被仰付、大岡備前守殿、彦坂伯耆守殿、中山隱岐守殿と申ゟる。是御勘定奉行諸大夫役の始也。夫官位有人ハ其名の聞も能のゝからも、後世まて官名殘り、又ハ常ニ白小袖著用し、見分も宜敷侍き共、知行ハ子孫に傳て三千石を起し侍きハ、八朔ニ大刀目錄献上する事ゟれば官位よりハ、むゟしの通ゟ三千石ニ成ゟるを增と呼ぶ人も多し。

一、御勘定奉行を御勘定頭共いへり。此下ニハ御勘定吟味役、御勘定組頭有、其組頭ハ御殿詰上方組頭、

上の御勘定所
下の御勘定所

關東方組頭かと云て、箱根碓井の關を隔て國郡を分、御用の掛り別と也といへり。又平勘定衆ハ數不定かりなき共皆御勘定改の支配かり。御城の中口に廣き部屋あり、上の御勘定部屋と云、毎日當御役衆出て御用を辨する所也。但式日、立合、内寄合の日ハ、部屋ゟ人見へも。又大手の番所後ゟ下の御勘定所と云て此所も組頭以下御勘定衆出勤する場所ゟて、諸大名諸旗本衆の家來百姓町人までも公あるをば出る所かり。さて御勘定方支配と云ハ、出替奉行、御藏奉行、御林奉行、御漆油奉行、惣御代官等也。御金奉行ハ御留守居衆支配ゟる處、四拾年計已來、御勘定頭の支配ゟ附らをゟり。又寄合日ハ寺社奉行、町奉行同日なり。内寄合ゟハ、寺社奉行、町奉行より出座大勢かり。夫ハ御勘定組頭已下御代官衆まで參らはゝ故、已前より人多に侍ると聞ゟり。御代官などハ手前の用向仕舞次第歸らは共、殘て出來合料理給らは人、何時も七八十人ほとある也。仍給仕する人も少てハ間に合侍らを、又常〳〵も支配中に御用に付書中の往來又急觸等あるをば使も多く出を に付、人少ゟてハ御用不叶、身體よりも人おほく抱置と、何をも申さるゝかり。むかし當役ゟ成衆ハ三千石以上に被仰付ゟるも、かやうの時のため人多抱置あるをとの思召からんと覺へたり。近年の衆は小身に侍をば、無人ゟて急かる時、間に合兼ると申さるゝ、さもあるべき事なり。

一、御勘定方御用ハ、諸奉行衆の御用向とも入組たる事多し。夫ハ國々に散在せる御領より出る御用向ハ勿論、給所にても御領百姓を取鎭たる公事訴訟等ハ何をも御勘定奉行掛り也。凡地方の事ゟさへあをハ、皆當役執行ハるゝ事と聞たり。又御代官方の御年貢租稅の事堤川除の修復御普請等も地方に付たる御用かれば、不殘受込れ繁多かる役所也。又云當職ゟハ第一民を憐み其風俗を正し農業を勸め、法則を守るやうゟと申付らはゝを御代官中も下知有べき役義と思はれ侍を共、さやうの沙汰も聞を。御取毛の多からん事のみ詮儀有、御代官方にも田畠の毛見を專とし、一粒ゟても御貢米の多からんやうゟと心かけ、田畝を正し、民を安し、教誨かどするハ一人も無之、剩へ貪欲を宗とし、公代を掠め、民の金銀を搾取事を先とする族ありて、終ゟ身命を滅を類多と見たり。誠に可慎事かり。さて元祿年中より御年貢米を嚴く取立る人、亦上納の金銀をハ多く下下行の金銀をば少きやうゟと考侍る人、是を御爲者と名付、稱美せらはゝに御勘定奉行も御代官も何とて御褒ゟ預からんと朝暮心を勞し、又ハ御爲と云に事よせ、我ため能やうゟ勤る人出來ゟり。如此ノ事御代官等ハ論ゟたらを、御勘定奉行衆以上までもあらぬ事共思案し、御代々之法式ゟも逆ひ、諸人の難義するをも不顧下賤の鄙吝かる事を御老中へ申上らはゝゟ、夫を御爲かりとて被仰付行ハるをハ、又跡より同じ樣かる思案共出來、日々諸人難義する事共行ハれゟり。彼御ため者を稱美せらはゝハ古の收歛之臣と云者也。就中萩原近江守殿此道を得たる人也。初ハ萩原彦次郎と云て、平勘定を成し世才智少々有に付、小菅遠江守殿の目利ゟて、吟味役被仰付、其後當役に替て、百五拾俵より三千七百石まで取上らを叙任してハ近江守殿と申さる。後ゟ松平美濃守殿に邪智と才覺を以取入、美濃守殿の心に叶、何事も近江守殿かくてハと懇ゟを相談せらをたるにより、驥尾に付く威を振ハを、世上に人も無之やうの有樣かり。同役衆ゟハ心ゟ不叶と思ひたる人もいべれど、此人ゟ背きてハ一日も立かたく、美濃守殿に讒へらを侍らんかと身を怖て下知ゟ隨ひ、勤られし故、同役衆ハ近江守殿組子かとやうゟ見へたり。さるほとゟ大名小名等此人を□□し、付屆の絶る間もかく、百姓町人等ハ阿諂て日々□來り門前市をなし、金銀貴物ハ山のごとしといへり。其頃賴ゟる事共此人の得心さへあれハ、叶かゟき願ひも叶ひ、勝間敷公事も勝侍れハ、欲ふかく道理辨へさる者の賴たるも尤なり。其間ゟ賄賂の多少ゟて情出されゟるゟよ

御爲者

御勘定頭衆

り、福者の望ほど早く調たりと人沙汰さり。然るに盛者必衰の理まぬがれ難く、正德二年の秋病氣にて御役御免、翌年九月二十五日死去せられたるに、同君を歎き人を誑かさし事利欲を以て受納すまじき物貪たる惡事顯れ、跡目之時本高三千七百石内三千石は被召上七百石を子息に被下たり。夢に五十年の榮華を見たるかの等し、或人物語に近江守殿威光ありて金銀とられし時、家老用人は云に及ず家來迄名を呼るゝ者は、小者中間まで百姓町人より物取ざるは無之、仍召仕共町屋敷二軒三軒は押並て求め所持まさり。近江守殿の町屋敷は、殊更奈狀高き場所なれば知行減少しても宿賃ばかりにて、不足は有まし、家來の浪人まさる者町家持るるに付、今に福祐かりといへり。

一、御勘定頭衆の佐渡奉行兼らはゝ事、大久保石見守殿と云人、後世の御勘定奉行とは違侍れ共、大神君の御時諸國地方御用と佐渡金山の事を一向に勤められたり。此人死去已後むかしの惡行共顯き、子供死刑せられてより、佐渡奉行は御代官又は時々御目付衆を被遣御金山の御用も事濟さり。其後伊丹播磨守殿御勘定奉行之時、佐渡奉行兼帶被仰付順齋と云ける時まで勤らき、是御勘定奉行之兼役せらはゝ始也。順齋身去以後は二代めの伊丹播磨守殿御勘定頭佐渡奉行共勤られさり。此人寛文二年二月二十七日自宅に内寄合かるか、御代官一色内藏助と云人亂氣まるるは、遺恨も有さるか、播磨守を殺害せり。夫より大番組頭若林六郎左衛門殿佐渡奉行被仰付、御勘定奉行の御兼役以て數年の間二三人の衆佐渡奉行勤られさる處、元祿三年十一月朔日、御勘定吟味役萩原彦次郎殿は佐渡奉行兼役被仰付御勘定奉行に成て、近江守殿と云し時迄、數年之内替らを兼帶せられける。元來佐渡奉行は勝手向宜敷かる御役と申傳へさるか、此人は聞しに增て大分の金銀を貯へ、福者と成て事缺さる樣子なりける。子息を彦次郎にせられ手前にて能を興行

伊丹順齋

ありさるか、花麗を盡して大客を招請せられさるか、役者共も呼はゝに隨ひ時の名家皆と來り役を勤ける。其體六萬石とらはゝ人のまろも福者と人の云ける溝口信濃守殿能興行に增さりと見さる人の物語かり。此奢侈も佐渡支配せらはゝ故と聞さり。近江守殿御役御免ありて、正德二年十月三日、河野勘右衛門殿、神保新五左衛門殿、佐渡奉行被仰付、御勘定奉行の御兼役わ止さり。又云佐渡奉行の外御勘定頭御兼帶の御役義は無之處、元祿十二年の春、御勘定頭久貝因幡守殿は道中奉行を兼帶被仰付、大目付安藤筑後守殿と兩人にて勤られ、是道中奉行を兼役の始かり。此例とて其後も大目付一人、御勘定奉行一人、道中奉行御兼帶せられて、今は彦坂壹岐守殿と筧播磨守殿勤らは、兩人にて月番を立られ一ケ月に一度ツゝ寄合、道中御用相談かり。近年御勘定奉行四人勤かれ共、去寅年より御勘定頭衆月番兩人つゝ勤よと被仰出、一ケ月に兩人つゝ一人は御仕置方、一人は御用方と分りて勤らはゝに付、道中奉行兼役の御勘定頭は別段寸暇無之と聞さり。

一、御勘定奉行伊丹順齋老の事を知さる人申たるは、若年之時より常の人には替さる行作や其心第一奢ヲ厭ひ、儉約ヲ專とし、始末ヲ考て、假にも贅なる事茂せられざる人なり。往昔は小身にて輕キ御奉公勤られ共、金銀に乏敷もありさりける。付合申さるゝ人も約やかなるを撰ミ友とさられさるといへり。或時同しやうなる朋友三人耗損なき事を相談有しに、友の申さるゝは、夜中同行するに挑灯立ねは不叶とへ共三人かから同しく挑灯燃せは贅かり、自今一人宛代に挑灯立て其光にて殘兩人も步行可然侍らん、一ケ月十夜に分て三人交々炷し侍るへきと有けるは、即座に順齋、まろらは中ノ十夜を某の炷番に定められよと答申されしと物語かり。吝嗇なる人この中にても順齋は其通に別て賢き人と見へさり。一ケ月中の十日

ハ月夜なきハ、月明きとて挑灯燃き間敷所存知れさり。定て一世のほとかやうの約敷事いか斗有つらん不ゝ知。大身ニ成き、當役勤られし時ハ、方々の音物受用し、佐渡の奉行も御兼帶なれば金銀米錢調度まで藏廩ま充滿し、諸用事缺申されぎといへり。後ニハ髮毛抜侍りて鬘まかゝらねば法體し、名を順齋と改免ても、御役は如ゝ元勤められゝる。又人の云、順齋法體願を思ひ立きしころ、内田平左衞門殿に語られゝるま、平左衞門殿ハ輕口なる人まて、貴殿ハ元來髮無之法印なるを、今めかしく法體の願ゐらんと宣ふ、日頃費嫌の人まハ似合ざる口上なり、夫よりも安く上下御免を願ひゆハゝ無費して可然侍らんと笑れさると物語なり。順齋ハむゝしの能役人と申傳へされ共難心得事なり。二男を岡邊左近と云、是も後まハ御勘定奉行被仰付さり。巳年ゆへま母方名氏を名乘り申さると聞ゆ。後ま名を覺右衞門殿と改めらは。此人右之目盲て一眼なり、其故を尋れば幼少なる時乳持の老女ま寄添て栗の皮をむき食せられしが、皮むく小刀を自誤り目ニ付立潰れ、片目ニ成れさり。順齋此事を聞大切なる子預ケ侍るハ怪我もさせ間敷ため也、亀末ニ存るゆへ如此事出來る、一向汝ゝ罪なりと怒らき、彼老女を死刑に行れしといへり。苟あやまちて子息のみつゝらまさる怪我を人の科ま究めらはゝハ愛ま溺きさるより出さる小人の所行なり。大役をも勤め公事沙汰熟行人まハ有間敷振舞なり。此一事を以見れば外まもかやうの類侍りつらんと無覺束侍る也。又云順齋才智ハ勝れたる人なれども、學問會ゐなきニ付、如此事有べし。美質易得至道難聞學之至則可以爲聖人不學則所免爲鄉人而已といへる思出され侍る。順齋の嫡子播磨守殿と云ハ刄傷まて果られ、其子大隅守殿と云、其子左京殿とて家相續し、一萬石を領せられゝる處、氣自滅なりて知行も上り嫡流斷絶せり。二男角左衞門殿御役替諸大夫ニ成て駿河守殿と云しが、此人謙遜まて繕飾なく諂曲を嫌ひさる性質なれば人も稱美さり。其ころ綱吉公御自身被遊御講談ゐるを拜聞仕度と大名小名一同ニ願れし事有、然ま駿河守殿一人願申されざるニより諸人の拜聞ま洩られたり。人魂なる衆中笑止ま思もれて願ひ給へと勸め申されければ駿河守殿返答ま、上より拜聞仰付らはゝ事小侍らハ辭退なく難有奉存拜聞仕べし、某いのでか上をも不憚して拜聞を願ひ侍らむ、物ゐ願と申事ハかくのごとくならでハ不叶と思ふ。無據事を可奉願道理も有ゐけれ、御講尺拜聞せざればとて、御奉公難成ニもあらま、又士の恥辱まも成まじゝれば、同輩の人ま物いふことく馴ゝ敷御講尺拜聞仕度とハ憚多く思侍れば、某ハ元より人並ニ奉願事成間敷と異見をも不聞入終ま願はざりけまば、諸役人中ま駿河守殿一人殘さりとハ守る可所を不變、心の清廉なるやうニハ聞へ侍れ共愚なる人と沙汰さり。子息ハ舍弟伊丹宇右衞門と云人の子を養子なり。本苗ま復し伊丹角左衞門と云て小普請組の支配を勤らは。又駿河守殿差次の弟をハ伊丹彌五八郎と云、是ハ異人まて御奉公も不勤小普請組まて居らは。三線を好て、朝夕三線を引遊び、樂とせしが後ニは江戸の町々をゐるき、三線を引て若黨ま小歌謠ハせ、夫ま合て行々ま俳徊し人所望すれば悦で内へも入、外ま立かがらも引れゝる。町人共元來御旗本衆と知、これハ不禮する者もなく稱美さるといへり。

御勘定吟味

一、御勘定吟味と云ハ、むゝしも有たれ共、御勘定奉行の支配受之、布衣役まハあらざる處

綱吉公御代天和二年佐野六右衞門殿、國領半兵衞殿と兩人被仰付、御勘定副奉行と名付らき御勘定頭衆ま差添可勤之との事まて布衣ニも成き、御勘定奉行同前ニ勤め、加印もせられいゐ、六右衞門殿祖父ハ佐野肥後守と云、大坂城中の御屋敷を預られ守護せられしが、慶長五年一亂之時、賊徒共追出之。肥後守ハ伏

見の城に籠り此所にて討死かり。大坂西丸を明け退くるを不屈に被思召ほるやらん、名跡も不被下子息主馬ハ浪人にて果られしといへり。この六右衛門殿ハ其子にて、是も主馬といひ、若年の時ニハ上野南光坊僧正に居らきしを召出されて御家人と成きゝり。久敷御勘定方勤め功者にて、性質信實かる人の働きゆりされば、段〻立身、此役被仰付、後ハ御勘定奉行ニも成て佐野長門守殿と云ける。半兵衛殿ハむかし國領と云さる相撲の名人有、其子孫なりといへり。大番か淺草御藏奉行に成き、其身の學力才智を以、御藏方の妄浪なる事有を正敷し、私なく勤られしニ付、御代官被仰付けきハ其郷村多といへ共支配する所の下民を正路に治められゝり。仍て副奉行被仰付と聞ゝり。其後萩原彦次郎殿諸星傳左衛門殿此役勤らほ。傳左衛門殿ハ神田御殿にて御勘定頭勤めゝる人かり。無私曲正道かる役人と沙汰ゝゝり。彦次郎殿ハ美濃守殿懇意にて取分ゝる勤め御老中方御用も彦次郎殿に仰られ、諸人共ニ心よせ、傳左衛門殿ハ有甲斐もかきやうに見ゝれ共、功者なるハ、傳左衛門殿ほとなるもあらねは御老中方も御勘定奉行衆も傳左衛門殿捨る事もからずと聞へゝり。諸役人衆も相談事ハ此人を用られゝり。彦次郎殿の御役替已後ハ、傳左衛門殿一人副奉行勤らほ。然共及老衰願て御役御免かり。夫より後ハ久敷此御役義止ゝり。今の御勘定吟味役ハ、家宣公御代ニ杉岡彌太郎殿、萩原源左衛門殿始被仰付布衣ニも成きゝれと、初の副奉行より格式劣て、布衣役人之内にハ末席かり。勤方ハ副奉行ニ同し、御勘定頭ハ他役より成ゝる衆かれば、御用向の事御入用増減等迄も暫時ハ熟せさるゆ、此兩人ハ御勘定組頭より被仰付、元來其譯功者なれば、當分かく其筋の御用ハ專に勤らほ爲と聞ゝり。

當御代に至り、源左衛門殿、いのかる事にの二丸御留守居に成きしの、無幾程ニ如元御勘定吟味に歸役有之、剩へ彌太郎殿より上座に被仰付諸事頭衆のやうニ成ゝり。御勘定衆ゝる時、淺草御藏役勤らるゝに古例ニ無之事も考出て才智ハ有人といへ共、其才智の善惡ハ知らず。竹村惣右衛門殿も御勘定組頭より被仰付是より三人同役にて勤られしの、惣左衛門殿ハ追付病氣引込きゝり。其跡ハ美濃郡代より辻六郎右衛門殿被仰付又三人にて勤らほ。近きころハ御勘定奉行衆同前に切々御前へも被召出御直ニ御用被仰付、又御側衆共對談ありといへり。御前に召出さるる御用は何事やらん知人かしといへ共、凡テ士の風義數年奢て毎事花麗に成ゝるを改め、むかしの質素かる世に歸らきめんと思召さるる御仁愛深く、公用を始め無用の費を止め、儉約にするからば上下共ニ貧窮かる者ならじとの御政事かるべきを、何ときゝる事成らん、奉行中ハ一向に上の御物入少く納方金銀多を御奉公と心得、夫を上の思召ニ叶と料簡さらき、其筋專一にと勤らほと見へゝり。御臺所向其外役所人へも毎度簡略の事被仰出ニ付、道理をも辨ざる諸役の人〻、御爲と云て、末〳〵の輕き者共工人商人等の難澁するをも不顧して我おとらじと約敷事のミ申出て、昔ニ替る御制法數多に成ゝり。吟味役三人にても天下の事を吟味すれば間も合兼るやらん頃日御勘定組頭より二人被仰付、都合五人に成侍るといへり。

御勘定衆

一、御勘定衆ニハ品〻御用ありれば勤方も別々也。役所へ毎日出る人も有、隔日又三日四日ニ一度出るもあり、皆勤

上々勤

上勤

緩急ハあれ共、晝勤斗にて、泊番ハ無之、自宅に居ながら御用勤る人も多といへり。若ハ公用からぬ用有時ハ、御番日ニ當ても仲ケ間賴合事もあり、凡テ御勘定衆御番ハ諸番衆のごとく判帳と云も無之勤來ル事也。昔より御番改被仰出る時御勘定方ニハ皆勤多と聞へゝり。其譯諸番方ニハ判帳を以改め、皆勤上〻勤、上勤を分侍るニ付、御人多といへ共、都テ皆勤の人前々より少し、御勘定方にハ古例と云て判

帳も無之、空なる堂上やうニ侍き共御答めならざるなり。仍四年以前の御番改ありし時、御勘定衆ニハ皆勤五十余人ありるよし書上らる。諸番方ハ御人多かき共、皆勤ハ稀なり。大勢といふ程ニも無之御勘定衆の皆勤多きを御用番御老中不審ニ思ひ給ひ、御勘定奉行衆へ御尋有さる處、御勘定奉行返答ま詰らき、大御番衆ハ在番の度々前後の休なり、其内御番日ハ無之侍き共勤ニ立、又親類の看病斷、自分煩等ま江戸ま殘さる者も勤ニ立、又晝夜廻り衆の御番頼合さるも勤ニ立とて、番頭衆之書上と似も似ざる事手前の非を紛さんため證據のやうニ申されさり。御勘定奉行衆の内ニハ大御番より出さるありて、能知さるやうニ申さるれ共、實ハ行當術なさのまゝ遁辭ま申されしと聞へたり。御用番御老中ハ然あらんと思ひ給ふの大番頭衆ニ有のまゝ御申聞御番改め吉例の書出は私なるやうに仰られたり。其後大番頭の三月番同道まて御用番御老中ニ參られ御番改め之事御勘定方ハいあゝ有も存知侍らね共、大番方の判帳を以勤めを吟味いさし侍るニ付、御番勤さる衆中ハ必ズ判形有之、是を以勤と書上無紛事也。在番の前後休中御番日無之事勿論なり。但休と云事は公儀より被仰付て自分より私ま休ニハあらず、其故ニ休ハ前後共ニ勤の日數ニむのしより成來れり。在番からぬ御使等ニ參、御用ニ懸さる者、御番ハ勤ざれ共、是も勤なり。尤諸役人も同前の事なれば、御勘定方も同例ニ侍らん。又看病斷自分煩まて殘りさる者ハ、江戸まて同役之内ニ預り其組ニ付、西丸御番勤る故、二條大坂ニ不參といへ共、御番ハ勤預組の判帳ま判形仕るまゝ其帳を以改め書上侍る。晝夜廻りの御番頼合申事ハ是も判帳を改め、一年ニ何十日の御番と定さる日數ニ合せ、日數と判形と合侍きハ勤ま成侍る。頼さる御番ハ必ス返番ヲ勤るニ付、勤めさると申まてハ無之、又病人の助なと勤る者ニハ定たる御番の日數よりハ多く勤る者なりと申達らきければ、御用番御老中も尤と仰られさり。五年の御番改さへ皆勤と云ハ少し。此時ハ十年の御番改なをば、諸番衆ニハ皆勤立之外侍る處、御勘定方皆勤おほく、漫りニ書上られしをハ、御人用減ずるを專一と吟味をる御役ニハ不相應なりとて人笑ひ歎き侍るも有さり。かく皆勤を多く書上られさるハなありつるといへり。

御勘定組頭ノ稱

一、御勘定組頭以下御殿詰の面々なと月次の御禮日ニ御目見する事、むのしハ無之侍つる處、元祿年中より御勘定頭衆申立らき、其頃より寄合衆小役人なとの後座ま並居御禮なり、仍此節より寄合座敷の御禮衆多く成て紅葉の間まて入込事ま成さり。予の御小姓組の御番頭勤さる時までハ紅葉間ニ御禮衆ハ無之明置たり。万一不案内まて様子しらぬ人紅葉の間に參らはる有ハ、組頭衆居らきて、此所ハ御小姓組御番ニ侍きば、立申されよといひて、其人を脇にやられさるに、御勘定衆御代官以下迄入込ニ付、此節ハ紅葉間を御禮の場所と人思ひ侍るなり。さて御勘定衆の格式近年ハ能成さり。是ハ御人用減少の事ま精出し、骨折とて諸人の中ニ御勘定奉行以下力有人のやうま御老中なと稱美せらるゝ故平勘定衆までも切ま代り諸番方の人をば目下まなきと沙汰なり。元來輕き御奉公なをば尊卑上下も知さる成へし、亦云御勘定衆より御役被仰付事以前ハ御代官又ハ漆奉行、疊奉行、二條の御藏奉行等の小役人ま成斗なりしが、萩原近江守殿御役之節申上ゆとより以來、淺草の書替奉行、御藏奉行ニも大番衆と御勘定衆同じく被仰付る。其外御役人ニも被仰付大方新番衆、大番衆と同前まて小拾人組よりハ御役拔よろしきやうま成さり。

——御役人代々記二

御勘定頭ノ稱ハ、寛永ノ初メニ有リタルモノ、如ク、古事類苑曰ク、「按ズルニ、營中御日記、寛永元年八月廿日ノ條ニ、甲斐中納言樣ニ、甲斐、駿河、遠江、信州御領地書付、老中并勘定頭衆ゟ中納言殿家老ニ遣之ト

勘定組頭

アレバ、寛永ノ初年ニ、既ニ勘定頭ノ職名アリシコト知ルベシ」ト。又勘定頭ヲ改メ勘定奉行ト稱スルニ至リタル時期ニツキテ同書曰ク、「按ニ勘定奉行ハ、初メ勘定頭トモ稱テ、寶曆頃迄ノ諸記錄ニハ、兩稱並ビ行ハレシガ其ヨリ後ハ、專ラ勘定奉行ト稱スルニ至レリ」ト。先キニ引用セル柳營補任、御勘定頭ノ條ニハ、「享保八卯年六月十八日三千石高定、號奉行」トアリ、參考スベシ。

又御勘定組頭ナルモノニ就キテモ、先キニ引用セル大猷院殿御實紀々事中、「寛永九年七月廿六日○中略。上方は○中略。御勘定組頭杉田九郎兵衛忠次」ト云ヒ、次ギノ

寛永十年九月廿六日、勘定組頭杉田九郎兵衛忠次○中略。賦税檢斷の事奉る。　——大猷院殿御實紀三十。

ト合セ見レバ、既ニ當時斯職在リシガ如ク柳營補任ニ、寛永廿年比ト云者必シモ當ラザルニ似タリ。

御勘定組頭

寛永年中

能勢四郎右衛門

寛永廿末年比

下島市郎兵衛

杉田九郎兵衛

——柳營補任六。○武家補佐ニ依リ補訂。

又大猷院殿御實紀ハ、寛永十年九月廿六日ノ條ニ「勘定役」同十四年十二月三日ノ條ニ「勘定組頭」アリ。

寛永十年九月廿六日、勘定役由比平兵衛光運、窪田喜左衛門正次は　賦税檢斷の事奉はる。　——大猷院殿御實紀三十。

寛永十四年十二月三日、勘定組頭能勢四郎右衛門頼安、勘定山中喜兵衛信三、これも信綱○天草逆徒征討使老中松平伊豆守。に陪從し、粮米の事沙汰すべきむね仰付られ暇下さる。　——大猷院殿御實紀三十六。

寛永十五年十二月五日、勘定組頭諸星清左衛門盛政、代官下島市兵衛政眞、勘定能勢四郎右衛門頼安は上方、井上新左衛門某、井上宇右衛門某、糸原甚左衛門重正、壺井金大夫永重は關東○中略。の會計を司るべしと仰付らる。　——大猷院殿御實紀三十九。

古事類苑曰、「按ズルニ、勘定組頭ノ關東ト上方トニ分レシ年月詳ナラザレドモ、此文ニ據リテ考フレバ、蓋シ寛永ノ頃ナルベシ」ト。

六月九日乙亥○寛永九年壬申（紀元二二九二年）○乙亥。三正綜覽。**及ビ同十四日庚辰**○庚辰、三正綜覽。**ニ幕下諸大名旗下ノ士ノ采地税額十年間ノ平均調査書ヲ提出セシム。**○大猷院殿御實紀。國字分類雜記。

幕下大名旗下ノ税額十箇年平均調査

幕下大名旗下ノ税額十箇年平均調査

九日○寛永九年六月。尾紀水三卿召れてまうのぼられ拜謁せらる。普第の輩番頭物頭拜謁す。各采地の税額十年の間を平均し、上中下の品をわかち、三ケ年の所を注記して奉るべしと命ぜらる。日記。　——大猷院殿御實紀卷廿。

十四日○寛永九年六月。諸士采邑の税額、十年このかたの所上中下にわかち、注記して奉るべしと命ぜらる。日記。　——大猷院殿御實紀卷廿。

知行平均調

寛永九壬申年六月十四日、諸奉公人領地物成之義、十ケ年上中下書付可差出旨被仰出大成令。

商人橋本十左衞門拜謁

七月廿八日甲子。○寛永九年壬申（紀元二二九二年）○甲子、三正綜覽。商人橋本十左衞門唐ヨリ歸朝、活鶴幷唐犬ヲ獻ジ將軍ニ拜謁ス。○大猷院殿御實紀。

——國字分類雜記卷二十。

商人橋本十左衞門拜謁事蹟

商人橋本十左衞門拜謁

廿八日○寛永九年壬申七月。

商人橋本十左衞門入唐の商船歸朝せしとて、活鶴幷唐犬を獻じ拜謁す。

——大猷院殿御實紀卷廿。

諸士法度

九月廿九日乙丑○寛永九年壬申（紀元二二九二年）。○乙丑、三正綜覽。諸士法度ヲ下ス。分限ヲ守リ奢侈ヲ禁ジ、徒黨加擔ヲ禁ジ、武家相續ノ法、奉行代官已下ノ買置キ賣買ヲ爲ス事ヲ禁ズル等、九ケ條。

○德川禁令考。嚴制錄。大猷院殿御實紀。日本財政經濟史料。

諸士法度事蹟

諸士法度

寛永九壬申年九月廿九日

諸士法度

條々

一、侍之道無二油斷一軍役等可二相嗜一事。

一、何事ニよらず其身の分限にまたがふべし、私のおごり仕間敷事。

一、死罪におこなハるゝ者有之時被仰遣者之外一切不可二縣集一違背之輩は可二爲一曲事一事。

附、喧嘩火事之時も同前、但火事にハ内々之者幷親類緣者ハ非二制限一。

一、徒黨を結ひ、或荷擔、或妨をなす儀停止之事。

一、構有之奉公人不可二抱置一事。

一、跡目○跡繼。之儀、養子は存生之内に可二得御意一、末期におよび忘却之刻雖二申之一御もちいあるべからず、勿論筋目なきもの御許容有間敷也。たとひ實子たりといふとも筋目ちかいたる遺言御立被成間敷事。

一、物頭諸奉行人依估於有之ハ急度曲事可二被仰付一事。

一、諸奉行人幷代官已下買置あきなひいたすにおいては可二爲一曲事一事。

一、諸役人其役々品々常に可二致吟味一油斷有之者可二爲一曲事一事。

右條々可二相守一此旨者也。

徒黨加擔禁止

武家相續規定

奉行代官已下買置賣買禁止

寛永九年九月廿九日嚴制錄。

廿九日○寛永九年九月 諸番頭諸奉行に條約をくださる。武士の道怠慢なすべからず。死刑に行はるゝとき其事にあづかるものゝ外、一切その地へのぞむべからず。違犯せば曲事たるべし。爭鬪あるか又は火災のときも是に同じ、されど火災のとき家内の者幷に親戚は、制の限にあらず。黨を結びあるひは荷擔し或は妨をなすべからず。障りある奴婢抱置べからず。遺跡相續の事、沒前に養子をこひをくべし。末期に聞え上ばゆるさるべからず。いふまでもなく筋目違ひたるは、ゆるさるべからず。たとひ實子たり共その筋目違はゞ跡を立らるべからず。諸物頭諸奉行人依怙偏頗あらば曲事たるべし。諸奉行幷に代官以下、何によらず買蓄て賣買すべからず。諸有司其局事をつねづね査檢すべし。怠慢せば曲事たるべしとなり。東武實錄。

——德川禁令考第一帙。○日本財政經濟史料。同。

御作事奉行設置

御作事奉行設置事蹟

十月三日丁卯○寛永九年壬申(紀元二二九二年)。○丁卯、三正綜覽。幕府御作事奉行ヲ置キ諸職人ヲ是ニ屬セシム。○柳營補任。營中御日記。享保集成。東職記聞。職掌錄。台德院殿御實紀。德川禁令考。諸役人代々記。寛永日記。役人代々記。御作事奉行被仰付候覺。明良帶錄。萬天日錄。大猷院殿御實紀。

——大猷院殿御實紀卷廿。

御作事奉行設置 作事奉行ヲ置ク、是ヨリ先幕府ノ土木營造、一ニ普請奉行ヲシテ之ヲ掌ラシム。是ニ至リ新ニ作事奉行ヲ常置シ、以テ營作ノ事ヲ掌理セシム。

御作事奉行

元御役料七百俵天和二戌四月廿一日御役料七百俵、地方直御加增其後三百俵宛被下、享保八卯六月十八日ゟ二千石高ニ定ル。

寛永九申十月三日御使番ヨリ　佐久間將監實勝

同十九午三月廿二日卒。　酒井因幡守忠知

同日御書院番ゟ

同十酉二月廿八日千石御加增

同十五寅五月十六日町奉行。

——柳營補任六。武家補任ニ依リ補訂。

寛永九年十月三日、職人不レ殘、今日可ニ罷出一旨、年寄中被ニ申渡一付、西湖之間へ伺ひ。小十人組衆番所之前ニ並居、大炊頭○土井利勝。讃岐守○酒井忠勝。信濃守○永井尚政。丹後守○稲葉正勝。大藏少輔○青山幸成。被ニ申渡一ハヽ、佐久間將監○直勝。神尾内記○元勝。酒井因幡守○忠知。御作事奉行ニ被ニ仰付一ハヽ間、御普請之刻、御細工等、右三人ヨリ可ニ申付一之間、可レ存ニ其旨一之由、依ニ上意一如レ此。

——營中御日記九

柳營補任、神尾内記元勝ノ任免ヲ「寛永十五寅十一月十日長崎奉行ゟ、同十七辰年五月十六日町奉行」ト記セルハ誤リ歟、諸役人代々記左ノ如シ。

御作事奉行　二千石高

家光公御代、始ゟ寛永九申年十月三日、御使番より。　佐久間將監直勝

同年同月同日、御書院番より、同十五寅年五月十六日、町奉行に。　酒井因幡守勝久

同年同月同日、長崎奉行より、同十七辰年三月五日、町奉行に。　神尾備前守元勝

同十五寅年十一月十一日寄合より、寛文千戌年九月二日卒。　船越伊豫守永景

同年同月同日、御小納戸ゟ萬治二亥年五月十五日、二千石御加增、山田奉行に。

同年同月同日、御書院番ゟ、寛文三卯年十一月六日御免。　八木但馬守宗直

家綱公寛文二寅年二月八日より切支丹掛り、與力六騎、同心三十人御預、同十二子年四月廿九日依願御免。　牧野織部正成常

保田若狹守宗○宗雪。

——諸役人代々記一

十月三日○寛永九年(紀元二六二年)。晴天○中略。

一、佐久間將監○實勝。神尾内記○元勝。酒井因幡守○忠知。御作事奉行被仰付之。○中略。

一、諸職人不レ殘今日○寛永九年十月三日。可ニ罷出一之旨、年寄中被ニ申渡一付ゟ、井戸之間に祗候ス。申上刻、大炊○土井利勝。讃岐○酒井忠勝。信濃○永井尚政。丹後○稲葉正勝。伊賀○内藤忠重。大藏○青山幸成。小十人組衆、番所之前ニ並居、佐久間將監○實勝。